

萩原城遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書

—第1・3・5次—

— 淡河地区圃場整備事業に伴う —

2001

神戸市教育委員会

萩原城遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書

—第1・3・5次—

—淡河地区圃場整備事業に伴う—

2001

神戸市教育委員会

序

昭和33年2月に神戸市に編入された淡河町は、緑豊かな自然の中で、寺院・神社を始め多くの茅葺き民家などの貴重な文化財が地元の方々の努力の結果、今に至るまで数多く残されてきました。

今回ここに報告いたします萩原城遺跡の発掘調査は、農家の担い手育成を推進することを目的として、生活基盤の整備を行う土地改良事業に伴うものです。

この萩原城遺跡は戦国という激動の時代の潮流に飲み込まれた淡河氏と、逞しく生き抜いた有馬氏という2つの生き方を明らかにし得る重要な遺跡です。

この遺跡が地元の方々のご理解とご協力のもとに、将来にわたって守り続けられることを願いますとともに、この報告が、縄紋時代から続く淡河地域の歴史を考える上で何らかの礎になれば望外の喜びです。

平成13年3月

神戸市教育委員会

教育長 木村良一

例　　言

1. 本書は平成5年から同7年にかけ、神戸市北区淡河町宇野田において実施した、萩原城遺跡第1・3・5次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、神戸市北区淡河地区県営圃場整備事業に伴うもので、神戸市教育委員会が神戸市農政局（現産業振興局）農林土木課からの委託を受けて実施した。また、平成12年度には、財団法人神戸市体育協会が、当教育委員会の委託を受け、整理作業を行った。
3. 発掘調査の組織は、本文に記した。
4. 本書に示した方位・座標は、国土方眼第V系座標で、標高は東京湾中等潮位（T.P）である。
また、遺構図に表す方位は座標北を示している。
5. 萩原城遺跡第1次・3次及び第5次調査については、平成5・6・7年度の『神戸市埋蔵文化財年報』に概要を記したが、本書をもって本報告とする。
6. 遺構の実測は各担当者が行った。遺物実測は黒田恭正・池田毅が、遺構・遺物のトレースと本書の執筆及び編集は黒田が担当した。
7. 遺構写真は各担当者が行い、遺物写真は笠幹（千種撮影）を除き奈良国立文化財研究所牛鷲茂氏の指導のもとに、杉本和樹氏が撮影した。
8. 本書に使用した地図の内図2は神戸市農政局作成の「淡河地区県営圃場整備事業平面図（昭和52年測図・昭和63年修正）」をトレースした。図3は国土地理院発行の25000分の1の地形図「淡河」「有馬」を使用した。
9. 発掘調査中及び報告作成期間中は多くの方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。記して感謝いたします。
樋本誠一・渡辺昇（兵庫県教育委員会）、北垣聰一郎（奈良県立橿原考古学研究所）、千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古研究部）、多田暢久（姫路市教育委員会）、（故）下田勉（日本城郭協会）、神戸市淡河土地改良区、神戸市産業振興局
10. 発掘調査で出土した遺物並びに図面・写真類は神戸市教育委員会が管理・保管している。

本文目次

I.はじめに

1. 調査に至る経過.....	P 1
2. 調査経過.....	P 1
3. 調査組織.....	P 1

II. 遺跡の位置と環境..... P 5

III. 遺構と遺物

1. 調査区の設定.....	P 13
2. 時期の設定.....	P 16
3. I期の遺構と遺物.....	P 16
4. II期の遺構と遺物.....	P 18
II a期.....	P 18
II b期.....	P 26
5. III期の遺構と遺物.....	P 34
III a期.....	P 34
III b期.....	P 38
6. IV期の遺構と遺物.....	P 74
7. その他の遺構と遺物.....	P 85

IV. まとめ

1. 文献史料からみた萩原城築造の契機.....	P 93
2. 「堀」SD02~10の掘削順序.....	P 103
3. 出土遺物の検討.....	P 103
4. SD04及びSD02の掘削時期について.....	P 105
5. 結語と残された問題.....	P 107

挿 図 目 次

図1	淡河町位置図	P 5	図36	III a期遺構全体図	P 34
図2	調査地周辺地形図	P 6	図37	SB09・10	P 35
図3	周辺遺跡位置図	P 9	図38	SB10柱穴出土遺物	P 36
図4	調査地区割図	P 13	図39	SB11	P 36
図5	検出遺構全体図	P 14	図40	SB12	P 37
図6	検出遺構全体図	P 15	図41	SK11	P 37
図7	縄紋土器	P 16	図42	SK11出土遺物	P 37
図8	竪穴住居	P 17	図43	SK12	P 38
図9	石器類	P 18	図44	SK12出土遺物	P 38
図10	II a期遺構全体図	P 19	図45	III b期遺構全体図	P 39
図11	SB01・SA01	P 20	図46	III b期遺構全体図	P 40
図12	SB02	P 21	図47	SB13	P 41
図13	SB03	P 21	図48	SB14	P 42
図14	SB04	P 21	図49	SB14出土遺物	P 42
図15	SB04柱穴出土遺物	P 21	図50	SB15・SB16	P 43
図16	SB05	P 22	図51	SB17	P 44
図17	SB05柱穴出土遺物	P 22	図52	SB18	P 45
図18	SB06	P 23	図53	SB18出土遺物	P 45
図19	SA02	P 24	図54	SA05	P 46
図20	SK01・SK02	P 25	図55	SK16	P 46
図21	SK01出土遺物	P 25	図56	SK17	P 46
図22	SX01	P 26	図57	土坑出土遺物	P 47
図23	SX01出土遺物	P 26	図58	SK18	P 48
図24	II b期遺構全体図	P 27	図59	SK18出土遺物	P 48
図25	SB07・SA03	P 28	図60	SK18出土・石五輪塔	P 49
図26	SB08	P 29	図61	SK18出土・石五輪塔	P 50
図27	SA04	P 29	図62	SK19出土遺物	P 50
図28	SK03	P 29	図63	SK20出土遺物	P 50
図29	土坑出土遺物	P 30	図64	SX04	P 51
図30	SX02	P 31	図65	SX04出土遺物	P 51
図31	SX03	P 31	図66	SX05	P 52
図32	SX02出土遺物	P 32	図67	SX05出土遺物	P 53
図33	SX03出土遺物	P 32	図68	SX05出土遺物	P 53
図34	Pit出土遺物	P 32	図69	SX06	P 54
図35	包含層出土遺物	P 33	図70	SX06出土遺物	P 55

图71	SX08出土遺物	P 55	图109	SD11出土遺物	P 85
图72	Pit14出土遺物	P 55	图110	K区北東部出土遺物	P 86
图73	SD01	P 56	图111	K区北東部出土遺物	P 86
图74	SD01出土遺物	P 56	图112	K区出土遺物	P 87
图75	SD02・05～07	P 57	图113	金属器	P 87
图76	SD05～07土層断面図	P 58	图114	金属器	P 88
图77	SD02出土遺物	P 59	图115	板碑	P 89
图78	SD02出土遺物	P 59	图116	土師器すり鉢分類図	P 104
图79	SD02～04・07	P 60	图117	Ⅲ b期遺構図	P 109
图80	SD02～04・L層断面図	P 61	图118	周辺地形図	P 110
图81	SD03出土遺物	P 62			
图82	SX07	P 62			
图83	SD04出土遺物	P 63			
图84	SD07出土遺物	P 64			
图85	SD08～10	P 65			
图86	SD09・10土層断面図	P 66	表1	一石五輪塔集計表	P 69
图87	SD10出土遺物	P 66	表2	小柄柄部一覧表（16世紀代）	P 72
图88	SD09出土遺物	P 67	表3	小柄柄部一覧表（17世紀代以降）	P 73
图89	包含層出土遺物	P 67	表4	笠軸一覧表	P 92
图90	Ⅳ期遺構全体図	P 75	表5	I期・II期遺物観察表	P 119
图91	SK21・SX10	P 76	表6	III期遺物観察表	P 122
图92	SK21出土錢貨	P 76	表7	IV期遺物観察表	P 128
图93	SK22	P 77	表8	石器観察表	P 130
图94	SK22出土遺物	P 77	表9	石造品観察表	P 131
图95	SK23出土遺物	P 77	表10	金属器観察表	P 131
图96	SK24出土遺物	P 77			
图97	SK25出土遺物	P 77			
图98	SX09	P 78			
图99	SX09出土遺物	P 78			
图100	SX10出土遺物	P 79			
图101	SX11	P 79			
图102	SX11	P 80			
图103	SX12	P 81			
图104	SX11・12出土遺物	P 82			
图105	SX13出土遺物	P 82			
图106	SX14出土遺物	P 82			
图107	SX14	P 83			
图108	SD11	P 84			

表 目 次

写 真 図 版

- 図版1 1. 調査地遠景（東から・下端が本丸）
2. 同上（西から）
- 図版2 1. 調査地遠景（北から）
2. 同上（北から）
- 図版3 1. 調査地遠景（西から）
2. 同上（南から・出入口部）
- 図版4 1. E～H区（南東から）
2. 同上（北西から・中央上が本丸）
- 図版5 1. 壁穴住居炭化材検出状態（南から）
2. 同上（東から）
- 図版6 1. SB02（西から）
2. SB03（南から）
- 図版7 1. SB06（北から）
2. SK01・02（南から）
- 図版8 1. SK01（北から）
2. SX01（北から）
- 図版9 1. SB08（西から）
2. SX02・03・09（南から）
- 図版10 1. SX02（東から）
2. SX03（西から）
- 図版11 1. D区遺構（西から・SB14・18）
2. 同上（東から・手前右がSK18）
- 図版12 1. SB16（南から）
2. SB17（南から・奥はSB08）
- 図版13 1. SK13（東から）
2. SK14（北から）
- 図版14 1. SK16（西から）
2. SK17（南から）
- 図版15 1. SK18（南から）
2. 同上（南から）
- 図版16 1. 横矢3（南東から）
2. SX04（北から）
3. 同上（西から）
- 図版17 1. SX05（北から）
2. 同上鉄器出土状態（南東から）
3. 同上一石五輪塔出土状態（東から）
- 図版18 1. SX06（北東から）
2. 同上小柄出土状態（南東から）
3. 同上断面（南東から）
- 図版19 1. SD02～04（西から）
2. SD03・04・SX14（東から）
- 図版20 1. SD05（北から）
2. SD08（南東から）
- 図版21 1. SD09・10（北から）
2. SD09検出状態（北から）
3. SD10土層断面（北西から）
- 図版22 1. SD10土層断面（北から）
2. SX07（南から）
- 図版23 1. SK22（南から）
2. SK23（南から）
3. SK25（南から）
- 図版24 1. SX09（南から）
2. SX10・21（東から）
- 図版25 1. SX11（西から）
2. 同上（南西から・奥はSX12）
- 図版26 1. SX12（南から）
2. 同上（西から）
- 図版27 1. SX13（西から）
2. 同上前面石垣（北から）
- 図版28 1. SD11（北から）
2. 同上・石垣（北から）
- 図版29 1. J・K区北東部分（東から）
2. 同上弧状石垣（北から）
3. SX14（北から）
- 図版30 1. J・K区北東部分（北東から）
2. 同上（北から）

- 图版31 遗物 1~13
- 图版32 遗物20~23·59·63~66
- 图版33 遗物75·76·85·103·120·126·131
- 图版34 遗物142·144~146·154~156·171
- 图版35 遗物176~179·181·197·199·200
- 图版36 遗物202·204·210·45·108·135
- 图版37 遗物46·54·61·69·112·203·47·136·138·166·194
- 图版38 遗物185·198·208·102·105·211
- 图版39 遗物68·184·209·212~219·168·169·195·221~227
- 图版40 遗物77~82
- 图版41 遗物83·84·101·228

I. はじめに

1. 調査に至る経過

北区淡河地区の土地改良（圃場整備）事業に伴う発掘調査は、昭和51年度の淡河城の調査以来平成12年現在も継続して行われている。神田遺跡・中村遺跡・行原遺跡・萩原遺跡・萩原城遺跡・中山遺跡・北畠遺跡・本町遺跡・筑前遺跡・南僧尾遺跡・北僧尾遺跡・奥遺跡・歳田遺跡・勝雄城遺跡・勝雄遺跡・野瀬遺跡・木津遺跡・東畠遺跡・南浦遺跡が当該事業に伴って発掘調査が実施されている。

今回発掘調査の対象となった地区は、平成4年12月2日から同年12月16日まで試掘調査を行い、ほぼ全域に遺構・遺物の存在が確認された。この結果をうけ神戸市農政局土木課は、兵庫県教育委員会及び神戸市教育委員会と協議を重ね、所謂「二の丸」部分については全面調査を行い、また、所謂「家臣屋敷」部分については、当該事業によって遺跡に影響を及ぼす区域に限って調査を実施する事となった。前者の地区は市教育委員会が、後者に関しては市教育委員会及び淡神文化財協会・御阪神文化財調査会が調査を行った。

2. 調査経過

第1次調査は平成5年6月7日から同年12月11日まで、第3次調査は平成6年5月17日から同年11月9日まで、第5次調査は平成7年8月11日から平成8年3月12日まで現地調査を行った。調査総面積は約7,000m²である。

第1次調査は1,750m²を行い、掘立柱建物・土壇墓・溝・集石土坑や堅穴住居等が検出された。

第3次調査は2,400m²を行い、掘立柱建物・横列・集石土坑・土坑・石室・石橋・堀・横矢などを検出した。

第5次調査は「本丸」北側及び西側の地区で2,820m²を実施し、堀・石組造構・土坑などを検出した。

現地での発掘調査については平成7年度に終了し、遺物の整理作業及び写真撮影などは平成12年度に(財)神戸市体育協会が市教育委員会からの委託を受け実施した。また昭和35年当時撮影された航空写真から、1:1,000の地形図を作成し、萩原城の構造を検討する資料とした。

3. 調査組織

発掘調査は神戸市教育委員会が神戸市農政局土木課から委託を受け実施した。以下、各年度毎の調査組織を記す。

平成5年度 神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

檀 上 重 光 神戸女子短期大学教授

和 田 晴 吾 立命館大学文学部教授

細 見 啓 三 奈良国立文化財研究所建造物研究室長

教育委員会事務局

教 育 長	小 野 雄 示
社会 教育 部長	松 田 康 宏
文 化 財 課 長	杉 田 年 章
埋 藏 文 化 財 係 長	奥 田 哲 通
文 化 財 課 主 審	中 村 善 則 · 渡 辺 伸 行
事 務 担 当 学 芸 員	口 野 博 史 · 佐 伯 二 郎 · 東 喜 代 秀
現 場 担 当 学 芸 員	黒 田 恭 正 · 池 田 敏
保 存 科 学 担 当 学 芸 員	千 種 浩

平成 6 年度 神戸市文化財専門委員（埋藏文化財部会委員）

檀 上 重 光	神戸女子短期大学教授
和 田 晴 吾	立命館大学文学部教授
山 岸 常 人	奈良国立文化財研究所遺構調査室長

教育委員会事務局

教 育 長	小 野 雄 示
社会 教育 部長	西 川 和 機
文 化 財 課 長	杉 田 年 章
埋 藏 文 化 財 係 長	奥 田 哲 通
文 化 財 課 主 審	中 村 善 則 · 渡 辺 伸 行
事 勿 担 当 学 芸 員	山 本 雅 和 · 前 田 佳 久 · 川 上 厚 志
現 場 担 当 学 芸 員	黒 田 恭 正 · 藤 井 太 郎
保 存 科 学 担 当 学 芸 員	千 種 浩

平成 7 年度 神戸市文化財専門委員（埋藏文化財部会委員）

檀 上 重 光	神戸女子短期大学教授
和 田 晴 吾	立命館大学文学部教授
山 岸 常 人	奈良国立文化財研究所遺構調査室長

教育委員会事務局

教 育 長	小 野 雄 示
社会 教育 部長	西 川 和 機
文 化 財 課 長	杉 田 年 章
埋 藏 文 化 財 係 長	奥 田 哲 通
文 化 財 課 主 審	中 村 善 則 · 渡 辺 伸 行
事 勿 担 当 学 芸 員	背 本 宏 明 · 松 林 宏 典 · 川 上 厚 志
現 場 担 当 学 芸 員	黒 田 恭 正 · 阿 部 敬 生
保 存 科 学 担 当 学 芸 員	千 種 浩

平成12年度 神戸市文化財保護審議会委員（考古部門）

檜上 重光 前神戸女子短期大学教授

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

工 楽 善 通 (財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所
研修部長

教育委員会事務局

教 育 長 木 村 良 一

社会 教 育 部 長 水 田 裕 二

文 化 財 課 長 大 勝 俊 一

社会 教育 部 主 幹 渡 迈 伸 行

埋蔵文化財調査係長 丹 治 康 明

文化 財 課 主 査 宮 本 郁 男 , 丸 山 潔 , 菅 本 宏 明

整理担当学芸員 谷 正 俊

保存科学担当学芸員 千 種 浩 , 中 村 大 介

(財)神戸市体育協会

専 務 理 事 鞍 本 昌 男

常 務 理 事 静 観 圭 一

総 務 課 長 前 田 農 晴

総 務 課 主 査 丸 山 潔 , 菅 本 宏 明

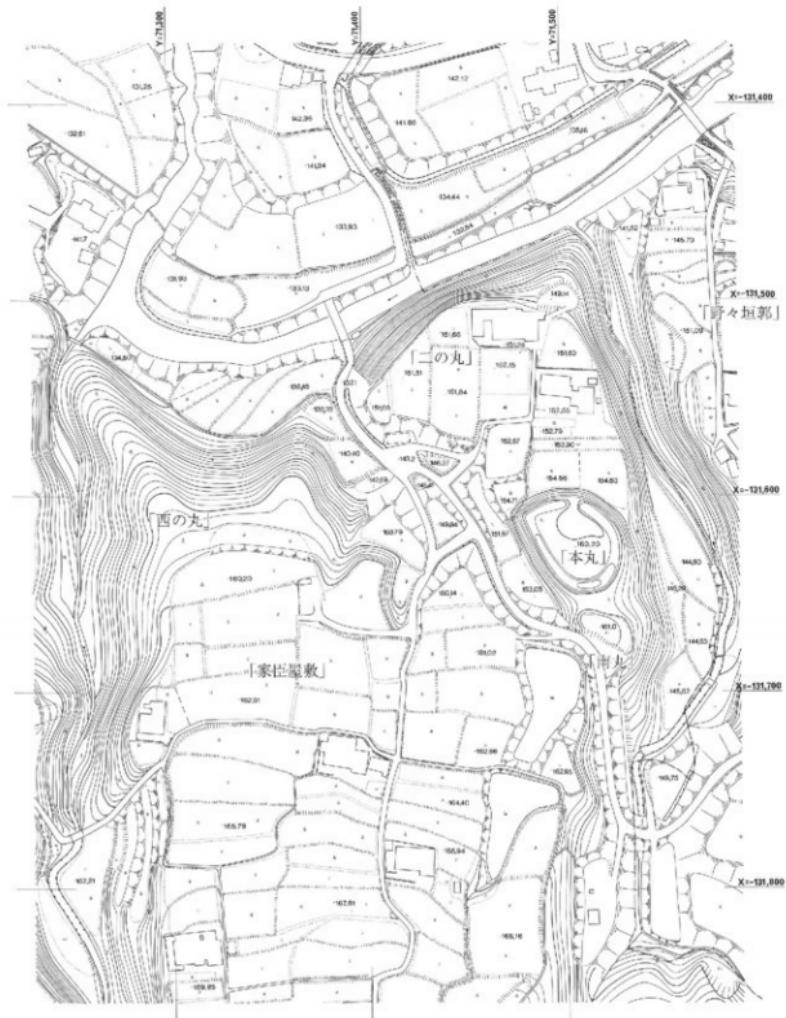
事 務 担 当 学 芸 員 菅 木 巍

II. 遺跡の位置と環境

1 萩原城遺跡がある神戸市北区淡河町は、六甲・丹生山地の北側に位置する。北区八多町屏風に源を発し、西流して三木市に入ると志染川、美嚢川と名を変え、加古川の一支流となり瀬戸内海に注ぐ淡河川の左岸に当遺跡は立地する。城跡は標高約150m～170mの河岸段丘上にあり「本丸」中央での標高は160.2mで、川を挟んだ北側に抜がる谷平野との比高差は、約20mを測る。城跡は、現在同町萩原字野田にある「本丸」「南丸」「二の丸」が乗る台地と、それと小谷を挟んだ西に抜がる「家臣屋敷」「西の丸」地区、及び前者の東側で、現在同町木津にある淡河川の支流、城谷川によって隔てられる「野々垣郭」地区によって構成されると考えられている（図2）。



図1 淡河町位置図



S=1 : 2500

図2 調査地周辺地形図

- 縄紋時代 周辺で現在最古の遺物は、2 萩原遺跡⁽¹⁾で検出された早期の長さ約4 cm の有茎尖頭器である。続く前期の土器は、3 中山大臼池遺跡⁽²⁾で採集されている。4 淡河中村遺跡⁽³⁾では最大幅約5.7m、深さ約0.6mで石凹炉をもつ中期の方形堅穴住居が検出され、石礫、石皿、磨石や石棒が出土している。萩原遺跡⁽⁴⁾では後期の土坑から、土器、石礫、石匕が出土している。この他、縄紋時代と思われる石器が淡河町神田遺跡⁽⁵⁾や同5 淡河木津遺跡⁽⁶⁾、同6 木ノ元遺跡⁽⁷⁾などで検出されている。
- 弥生時代 弥生時代の遺跡は、確認されているものが少なく、昭和51年度に発掘調査した、7 淡河城⁽⁸⁾の下層で検出した後期末の隅円方形の堅穴住居と、8 勝雄遺跡⁽⁹⁾の後期の堅穴住居と土坑が知られるのみである。淡河城下層の堅穴住居は一辺約6.5mで、各四辺に幅約1 m のベッド状造構を持つ。この時代についての資料は限られているが、淡河町北畠の9 宮ノ沢城遺跡⁽¹⁰⁾で中期後半の土器片が、淡河町淡河や中村でも後期の土器が出土しており今後その実態が明確になるものと期待される。
- 古墳時代 淡河中村遺跡⁽¹¹⁾の長辺約4.7m、短辺約3.7mの長方形堅穴住居は5世紀後半と見られるもので竈を持つ。須恵器は検出されなかつたが、土師器壺・甌・高杯と共に軟質の韓式系土器の鉢が出土した。後期の住居址は萩原遺跡⁽¹²⁾や勝雄遺跡⁽¹³⁾でも調査されており、前者では一辺約7 m の堅穴住居が、後者では平成9年度の調査で7世紀代の堅穴住居と掘立柱建物が確認されている。
- なお、淡河地区では古墳の存在は知られていない。
- 奈良時代 奈良時代では、淡河中村遺跡⁽¹⁴⁾で掘立柱建物と土坑が、萩原遺跡⁽¹⁵⁾で土器類が、勝尾遺跡⁽¹⁶⁾で掘立柱建物・溝と土坑が検出されている。
- 平安時代～ 鎌倉時代 淡河中村遺跡⁽¹⁷⁾では、12世紀前半頃の井戸が2基検出され、土器類と共に柄杓、槌の子、箸や種子等が出土した。12世紀末から13世紀の遺構・遺物は、萩原遺跡⁽¹⁸⁾や10行原遺跡⁽¹⁹⁾で確認されている。萩原遺跡では六角形の井戸側を持つ13世紀代の井戸が調査され、後者では掘立柱建物と、底面に敷石を持つ火葬土坑が検出されている。萩原城遺跡に於いて、掘立柱建物と、底面に敷石を持つ火葬土坑が検出されている。萩原城遺跡に於いて、掘立柱建物などが現れるのはこの頃からである。淡河中村遺跡⁽²⁰⁾では13世紀中頃の屋敷地の一部とも考えられる溝や柵列が調査されており、鎌倉時代から室町時代と思われる高麗象嵌青磁の小片が出土した。また、萩原城の所謂「野々垣郭」地区に当たる淡河木津遺跡⁽²¹⁾では、鎌倉時代の掘立柱建物や中国製龍泉窯系青磁碗、全長約32cmの鉄小刀と火打金を伴う墓壙などの他、石組を持つ圍池状造構が検出されている。
- 淡河町神影にある真言宗の11石峯寺は、縁起によれば、孝徳朝の白雉二（651）年の創建と伝えられるが、史料上で把握できるようになるのは、神田谷を寄進された安元年中（1175～76）頃からである。
- 12石峯寺本堂の西側の小山⁽²²⁾からは、12世紀末葉とされる丹波瓜蝶鳥刻文壺や、墨吉法華經残塊入りの絶高21.5cmの鋼板製鍍金經筒が出土している。この小山は經筒が埋納された後墓地化したものと推定されており、12世紀中葉から13世紀代の東播系須恵器甌、瀬戸灰釉四耳壺などが検出されており、藏骨器と考えられている。また、地輪を欠くが鎌倉時代と考えられる陶製五輪塔も同所で出土している。
- 淡河町ではこれ以外に、經塚が多く確認されている。14淡河町神影字北坊では須恵器經

筒が、15萩原字経塚では土師器経筒、鏡と天聖元寶が、そして16萩原字北別僧では土師器経筒と鏡が出土している。

室町時代 14世紀から16世紀の遺跡では、萩原城遺跡、17勝雄経塚や八多町屏風遺跡などが知られている。勝雄経塚は平成6年に、山陽自動車道三木ジャンクション建設に伴う発掘調査で発見された。六十六部廻団型による経塚で、木蓋付きの備前焼と思われる外容器に収納された金銅製経筒に法華経8巻が完存していた。経筒は、総高11.4cm、直径4.7cmで、蓋頂部には露盤と八弁の受花を伴う宝珠摘みがある。経筒外面には「十羅刹女 播州住良円 バク 奉納大乘妙典六十六部 三十番神 享禄三年（1530）今月吉日」の刻字が見られる。

石峯寺本堂西側の墓地は、室町時代にも継続して営まれており、藏骨器として14世紀代の土師器鍋、15世紀後半の丹波広口壺が出土している。同寺には葬送儀礼に関係する応永4（1397）年と推定される五輪塔形曳覆曼荼羅の版本も残されている。この他石峯寺には暦応4（1341）年銘五輪塔、康安2（1362）年銘板碑、「岩巖山明応五（1496年）」銘軒平瓦や永正6（1509）年の「軒大工 彦次郎橋朝臣時□銘の鳥衾瓦などがあり、三重塔北方の13「龍ヶ峯」の頂部には、「大和國西之京住人 瓦大工橋朝臣六郎二郎吉次作天文二（1533）年七月吉日」銘を持つ瓦製龕が安置されていた。

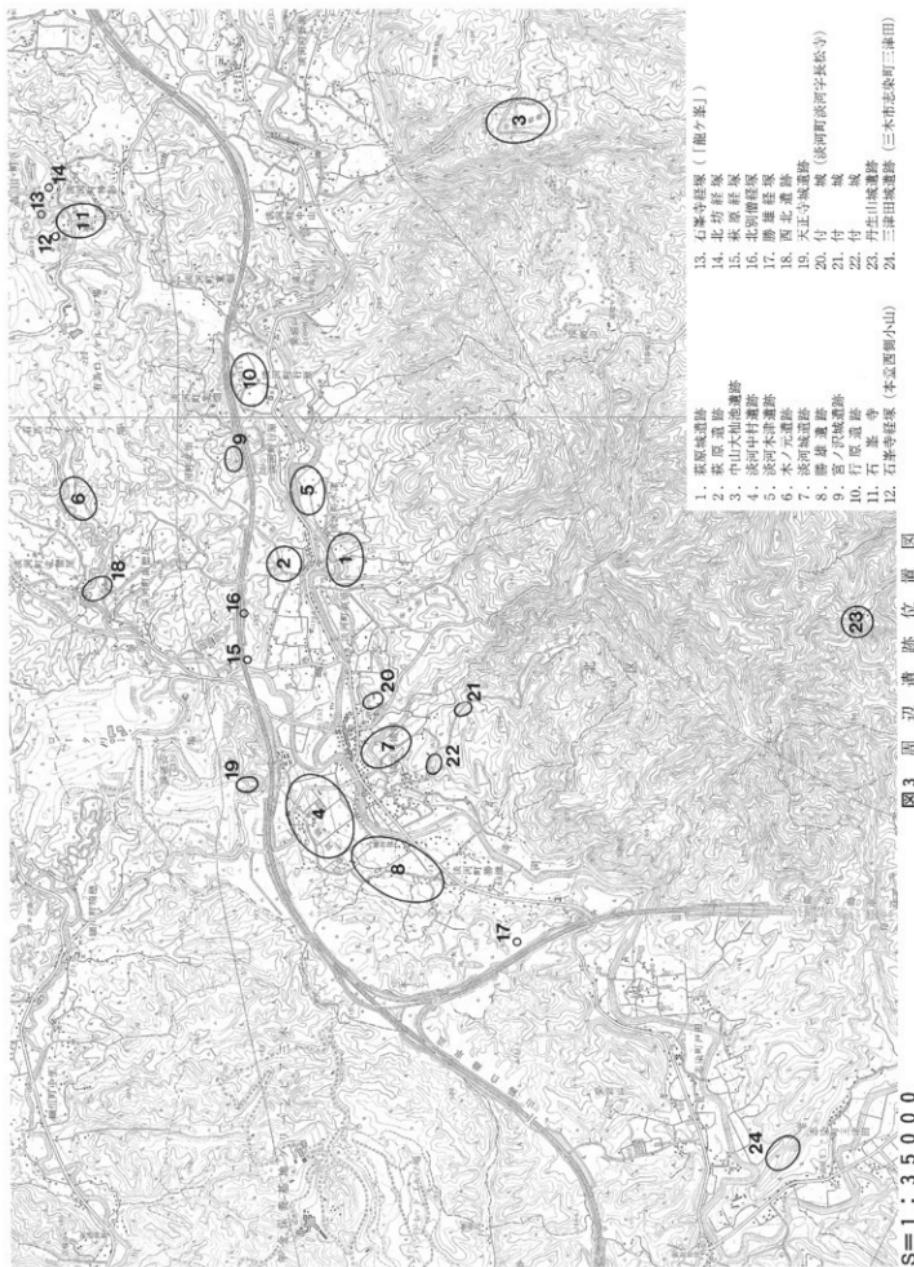
淡河城は昭和51年度の圃場整備事業に伴って、本丸から南東方向の丘陵の一部にトレチが設定され、調査が行われた。調査の結果、中世から近世の遺物は検出されたが、城郭と認められる遺構は確認されなかった。従って当城は、本丸を中心とした限られた範囲が城郭として構築されたものと考えられている。

18西北遺跡では平成10・11年度の調査で、16世紀を中心とする掘立柱建物、水溜め土坑などが検出され、備前、丹波、瀬戸、美濃、土師器すり鉢、同小皿や石臼、五輪塔などの遺物が出土している。

その他の16世紀代の遺跡では、秀吉勢が別所氏に属していた淡河城を攻めた際に築いた付城19~22が知られている。

注

- (1) 「第140図-74」村尾政人・白谷朋世『淡河萩原遺跡-第III・IV・V次発掘調査報告』 淡河萩原遺跡調査團・(株)埋文 1999年3月25日
- (2) 新修神戸市史編集委員会「第九章第三節2北区山田・淡河地区の遺跡」『新修神戸市史』歴史編Ⅰ自然・考古 1989年4月1日
- (3) 村尾政人『淡河中村遺跡 土地改良区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 淡神文化財協会・淡河中村遺跡調査團 1992年6月30日
- (4) 『淡河萩原遺跡-第III・IV・V次発掘調査報告』 前掲書
- (5) 内藤俊哉「神田遺跡」「平成2年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 1993年3月
- (6) 内藤俊哉・中村大介「淡河木津遺跡第1次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」 神戸市教育委員会 2000年3月
- (7) 阿部敬生「木ノ元遺跡第1・2次調査」「南僧尾-淡河地区農業基盤整備事業に伴う埋蔵



S=1:35000

図3 周辺遺跡位置図

- 文化財発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 2000年3月31日
- (8) 宮本郁雄『淡河城跡発掘調査概要』 神戸市教育委員会 1977年3月
- (9) 西岡巧次『勝雄遺跡I-県営圃場整備事業(担い手育成基盤整備事業)勝雄地区に伴う一
第1・2・3・4次埋蔵文化財発掘調査報告書一』 神戸市教育委員会 2000年3月31日
- (10) 多賀茂治『宮ノ沢城跡の調査』高瀬一嘉編『奥遺跡 宮ノ沢城跡 淡河上中遺跡-山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X XI-』兵庫県文化財調査報告第153冊 兵庫県教育委員会 1996年3月29日
- (11) 村尾政人『淡河中村遺跡』 前掲書
- (12) 村尾政人・白谷朋世『淡河萩原遺跡-第III・IV・V次発掘調査報告』 前掲書
- (13) 『勝雄遺跡I』 前掲書
- (14) 谷 正俊『淡河中村遺跡』『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1992年3月
- (15) 丸山 漢・松林宏典『淡河中村遺跡』『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1994年3月
- (16) 村尾政人・白谷朋世『淡河萩原遺跡-第III・IV・V次発掘調査報告』 前掲書
- (17) 須藤 宏『行原遺跡第2次・第4次調査』『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1994年3月
- (18) 丹治康明・阿部敬生『淡河・中村遺跡』『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1994年3月
- (19) 内藤俊哉・中村大介『淡河木津遺跡第1次調査』『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』 前掲書
- (20) 景山春樹『播磨石峯寺経塚遺宝について』『大和文化研究』第2巻第6号 大和文化研究会 1954年12月 同氏『仏教考古とその周辺』 雄山閣出版 1978年2月10日所収。
景山春樹『播磨石峯寺経塚遺宝拾遺』『考古学雑誌』第42巻第4号 日本考古學會 1957年3月15日
- 神戸市立博物館『企画展 石峯寺展』 1990年4月7日
- 森田 稔「[石峯寺経塚]遺物の再検討」『神戸市立博物館研究紀要』第8号 神戸市立博物館 1991年3月31日
- (21) 神戸市教育委員会『神戸市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び地名表』(垂水区・兵庫区第1集) 1973年3月
- 森内秀造『兵庫の経塚』博物館普及資料第10集 兵庫県立歴史博物館 1992年3月31日
- 村木二郎「近畿の経塚」「史林』第81巻第2号 史学研究会 1998年3月1日
- (22) 山下史郎・松岡千寿『勝雄経塚-山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X X V-』兵庫県文化財調査報告第158冊 兵庫県教育委員会 1997年3月31日
- (23) 神戸市教育委員会(担当須藤 宏)が平成3年5月~7月にかけて調査を実施した。石組の井戸の中から呪符木簡、楕、箸、横槌、曲物、櫛、下駄、青磁、青花、土師器小皿、土師器すり鉢のほか錢貨などが出土している。
- (24) 間屋真一「五輪塔形曳覆曼荼羅について-中世版本資料からの考察を中心に-」『神戸市

立博物館研究紀要』第8号 前掲書

- (25) 田村真成「播磨の瓦大工・橋氏」『史迹と美術』第330号 史迹美術同好会 1962年12月 1
H
小林章男「播州で活躍した大和の瓦師たち」『史迹と美術』第514号 史迹美術同好会 1981
年5月28日
- (26) 宮本郁雄『淡河城跡発掘調査概要』 前掲書
- (27) 須藤 宏・佐伯二郎・阿部敬生・阿部功「西北遺跡第1・2次調査」『南僧尾』 前掲書
- (28) 「淡河城付城」『兵庫県の中世城郭・莊園遺跡－兵庫県中世城郭・莊園遺跡緊急調査報告－』
兵庫県教育委員会 1982年3月30日
天正寺城に関しては、三木市の中津田城と共に三木合戦における秀吉方の広域の拠点的性格を持つ陣城であるという見解が出されている。
多田暢久「播磨野村城の繩張りについて－三木合戦における陣城の構造－」『歴史と神戸』
第30卷第6号 神戸史学会 1991年12月 1日

III. 遺構と遺物

1. 調査区の設定

既述のように、発掘調査は3ヶ年の長期にわたっており、総面積も約7,000m²に達する。調査は便宜上、現在の田圃区画をもって調査地区を設定し、全体を下図のようにA～Oの15地区に分けて行った。平成5年度はA～D区、平成6年度はE～H区の一部、そして平成7年度はH区の残りとI～O区を対象に実施した。

遺構番号は、調査年度毎に付し遺物の取り上げもそれに従ったが、本報告では地区毎に説明を加える煩雑さを避けるため、新たに遺構番号を付ける事とした。

以下の記述においては、このA～Oの地区名の使用を避けたが、広範囲の調査を行った関係上、一部この地区名を使用して説明を加えた箇所がある。

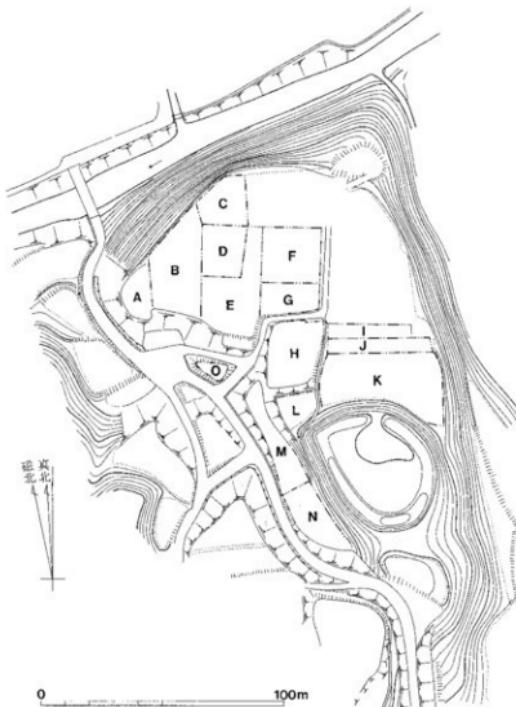


図4 調査地地区割図



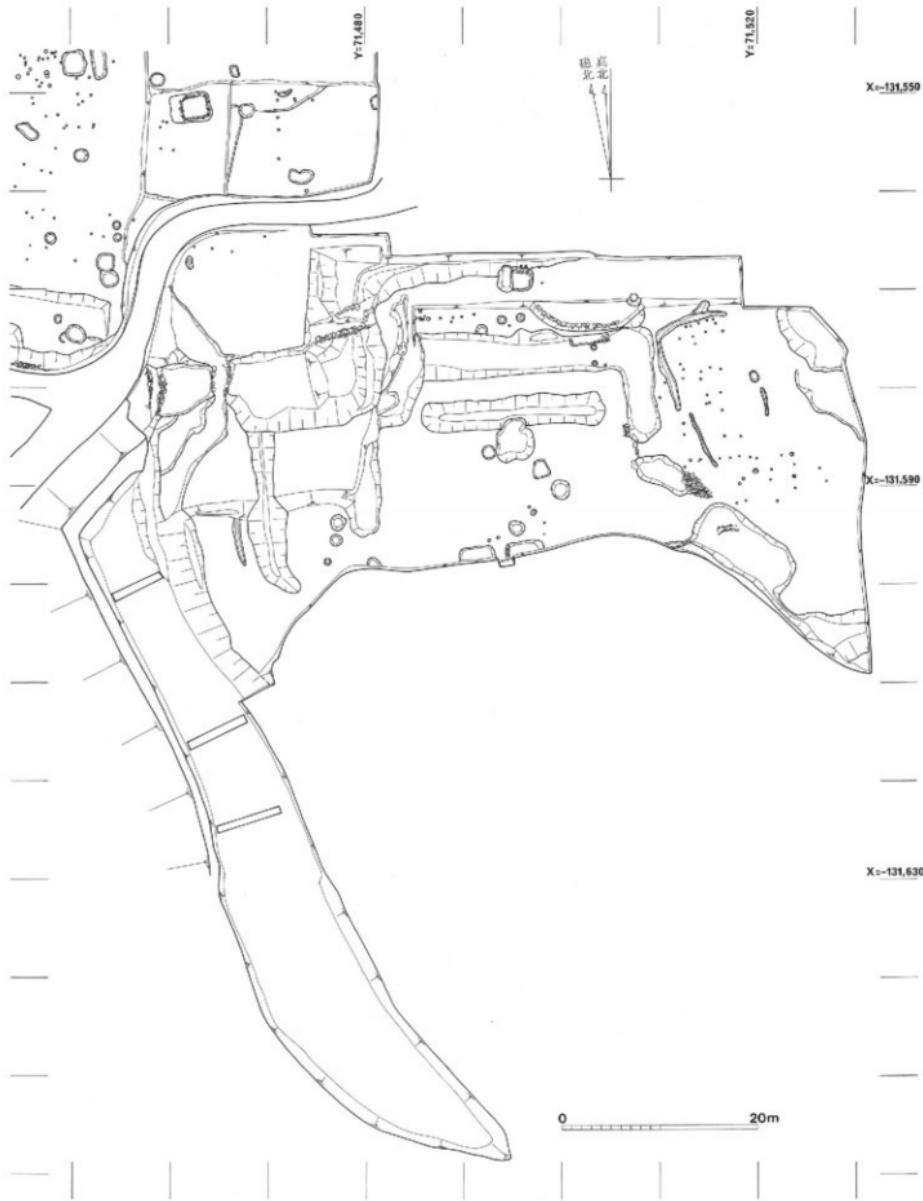


図6 検出遺構全体図

2. 時期の設定

今回の調査で検出した遺構には15世紀以前に属するものと、16世紀以後のものとに大別でき、15世紀以前の遺構はさらに、縄文時代に遡るⅠ期と12世紀から14世前後と見られるⅡ期に細分できる。Ⅲ期は16世紀を中心とする時期で前半と後半の2小期に細分される。この遺跡が城郭として機能したのはこの時期と考えられる。Ⅳ期は江戸時代以降に属し、史料によれば萩原城は既に廃城となっている。

個々の遺構、特に掘立柱建物に関しては、所属時期を確定し得る材料が乏しかった。従つて、その時期決定については問題を残すが…応以下のように推定しておきたい。

3. I期の造構と遺物

堅穴住居 調査地北西部で検出された、長径3.50m、短径3.10m、深さ20cmの不整格円形の堅穴住居である（図8）。埋土中に焼土、炭化材が見られ焼失住居と考えられる。床面中央やや西寄りに直径約1m、深さ20cmの土坑と、その周囲で計5ヶ所の柱穴を検出した。

サヌカイトチップが少量出土した以外、土器類は全くなく時期を決定する根拠に欠けるが、周辺から縄文時代の石器及び土器片が出土していることや、弥生～古墳時代の遺物が全く検出されていない事から、I期に所属するものと推定した。

遺物 （図7・9）1は後述する近世のSX13から出土したもので、縄文時代後期に属する波状口縁深鉢の口縁部片である。外面に太い沈線が巡り、沈線内に突刺文が施される。

2は長さ8.78cm、最大幅4.48cm、最大厚2.0cmの石斧で、刃部の形状及び破損状況から判断して縦斧と見られる。石材は風化が激しく明確ではないが、結晶片岩と思われる。3～12は石鎚、13は石匕である。6・13がチャート製であるほかは、全てサヌカイト製である。4はピット中から、それ以外は包含層などからの出土で遺構には伴わない。また、4についてもⅡ期以降に属すピットの混入品と考えられる。

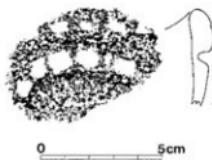
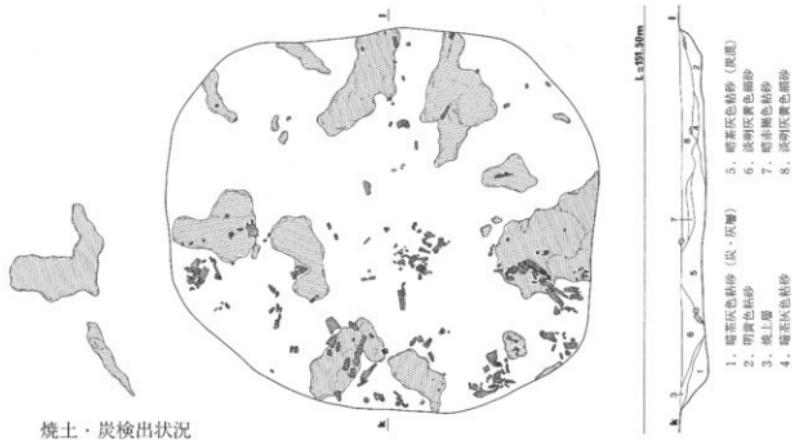
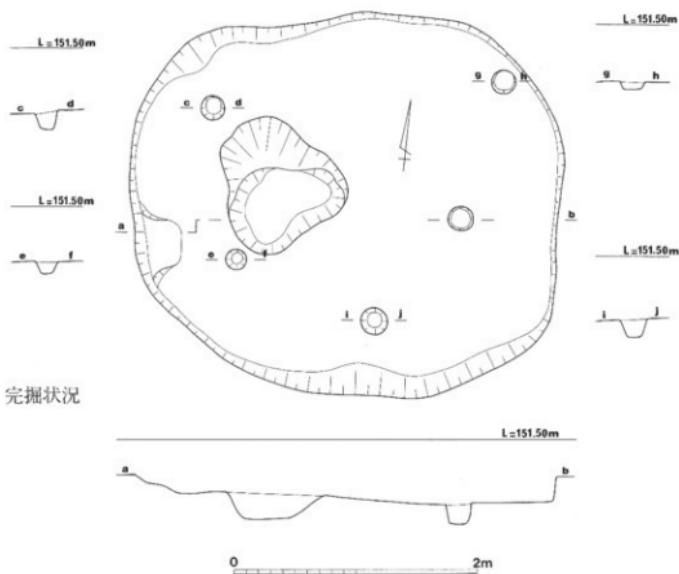


図7 縄紋土器



燒土・炭検出状況



完掘状況

図8 堅穴住居

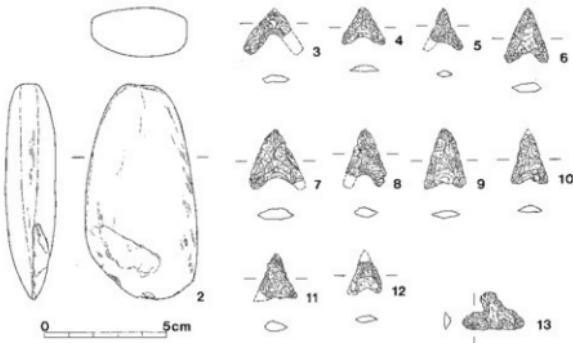


図9 石器類

4. II期の遺構と遺物

II期の遺構には、掘立柱建物・柵列・土坑・集石土坑がある。掘立柱建物はその主軸方位により2群に分かれ、柱穴・土坑等からの出土遺物についても12世紀末～13世紀前半のものと13世紀後半～14世紀を中心とするものが認められるため、IIa期とIIb期に細分した。但し、掘立柱建物の主軸方位について言えば、II期とIII期では大きく異なるが、II期内での変化はそれに比較して小さい。これはIIa期とIIb期の間に断絶がなく、継続的に集落が営まれた事を示しているのかもしれない。

- IIa期(図10) この期に属す遺構には、SB01～06、SA01・02、SK01・02及びSX01がある。
- SB01 (図11) 東西9間(8.84m)、南北4間(4.66m)の掘立柱建物で東柱を持つ。主軸方位はN 8°Wである。面積は約41.2m²である。柱穴からの遺物は土師器細片のみである。
- SA01 (図11) SB01の北側でこれとほぼ平行する柵列で、長さ8.10mである。方位はW 2°Nである。出土遺物はない。
- SB02 (図12) 東西3間(2.8m)以上、南北5間(5.0m)の掘立柱建物で、主軸方位はN 5°30'Wである。面積は14m²以上である。出土遺物はない。
- SB03 (図13) 東西4間(4.00m)、南北3間(3.20m)以上の掘立柱建物で、方位はN 10°Wである。面積は約12.8m²以上である。出土遺物はない。
- SB04 (図14) 東西4間(6.54m)、南北1間(1.90m)の掘立柱建物で、主軸方位はN 6°30'Wである。面積は約12.4m²である。ピット1・2から東播系須恵器塊の小片が出土した(図15)。14～17は12世紀後半から13世紀のものと考えられる。
- SB05 (図16) 東西5間(10.94m)、南北3間(6.80m)の掘立柱建物で、主軸方位はN 5°Wである。面積は約74.4m²で今回検出した建物中最大規模を有する。ピット3・4から東播系須恵器小皿・鉢の細片が(図17-18・19)、また他のピットから土師器小皿、同鍋体部の細片が出土した。



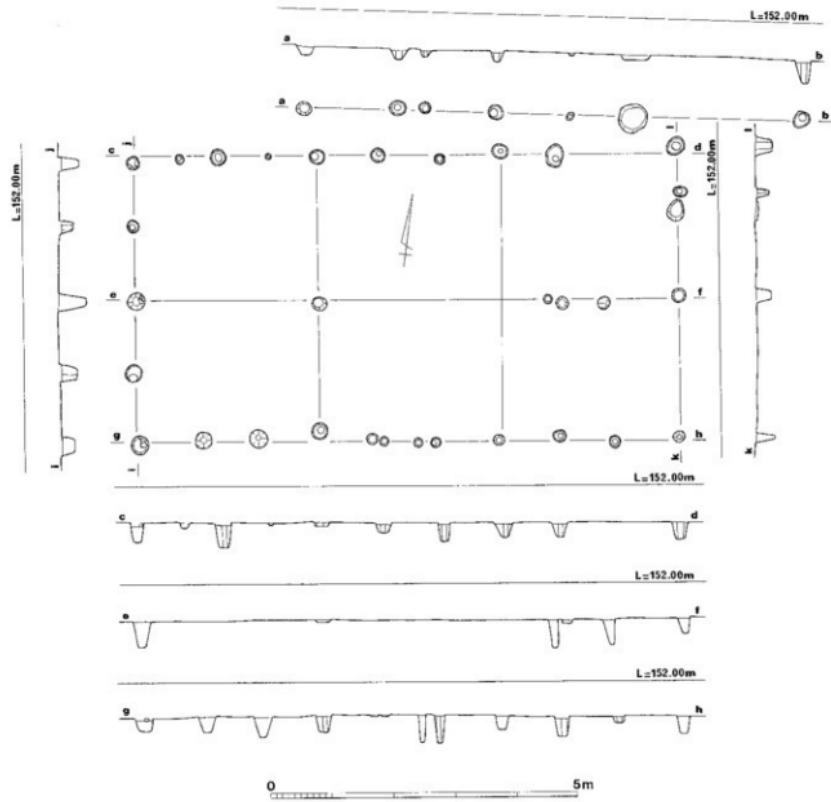


图11 SB01-SA01

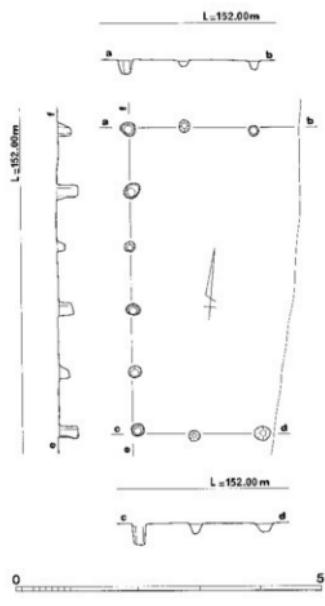


図12 SB02

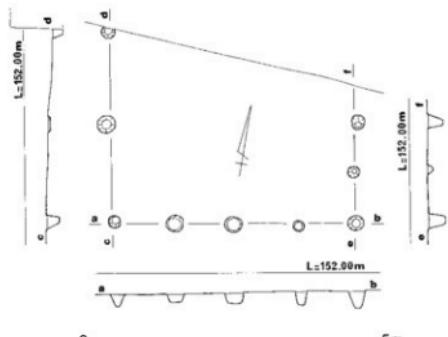


図13 SB03

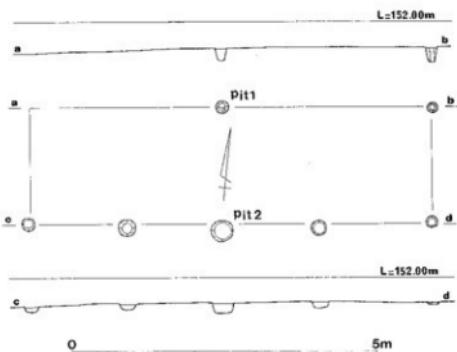


図14 SB04

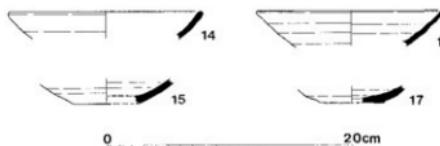


図15 SB04柱穴出土遺物

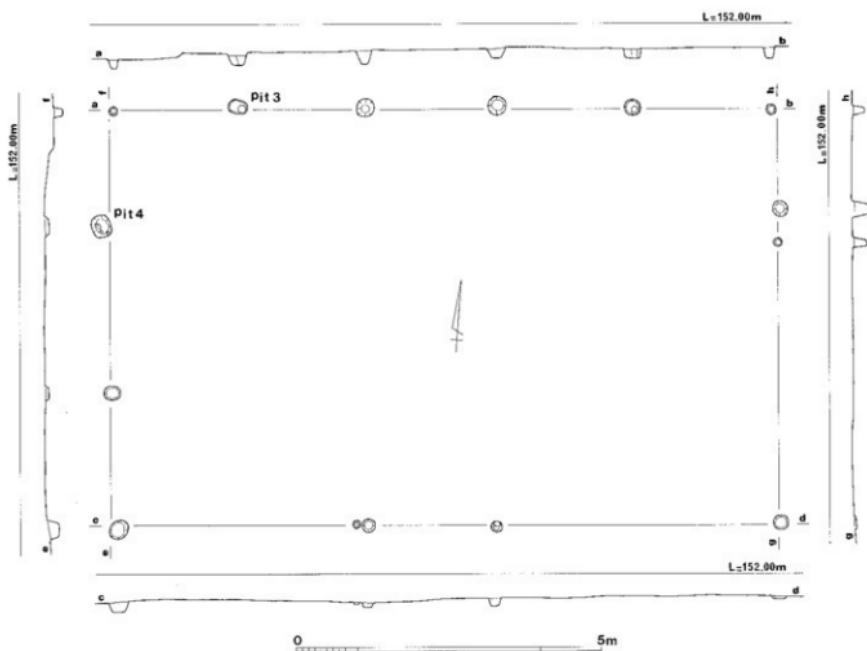


図16 SB05



図17 SB05柱穴出土遺物

SB06 (図18)主軸方位はN17° Eで、SB01～05とは大きく異なり、その位置する場所もそれらとは一定の距離を置いているが、柱穴配置にSB01と共通する点が見られ、また、その規模も東西幅がやや縮小されるが相似している事からⅡa期とした。

東西4間(4.0m)、南北7間(8.94m)で、東柱を持つ。面積は約35.8m²である。北側中央の柱穴はピット5に切られるがこれからは後述する中國製染付碗の底部(図34-47)が出土した。この遺物から判断してSB06は16世紀中頃以前であると考えられる。

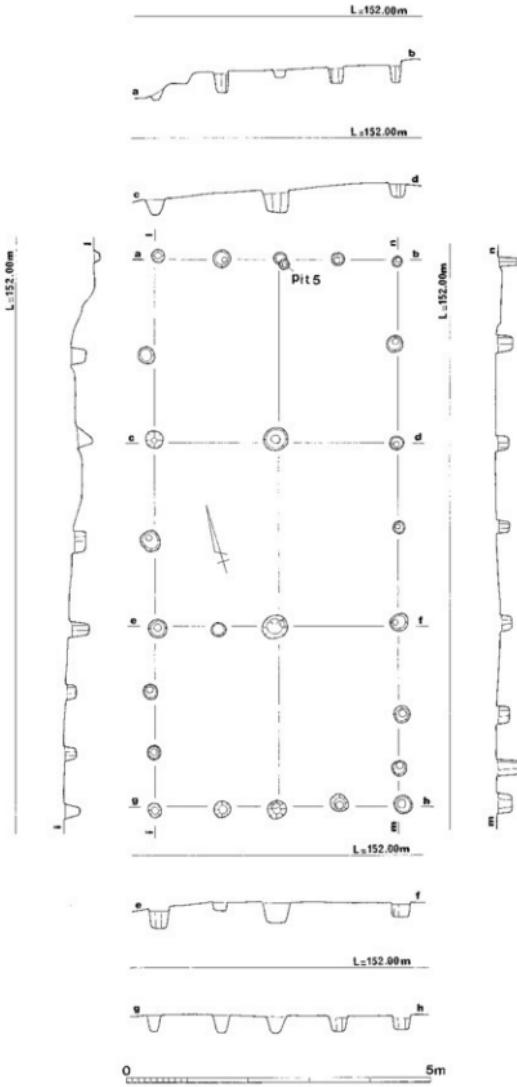


図18 SB06

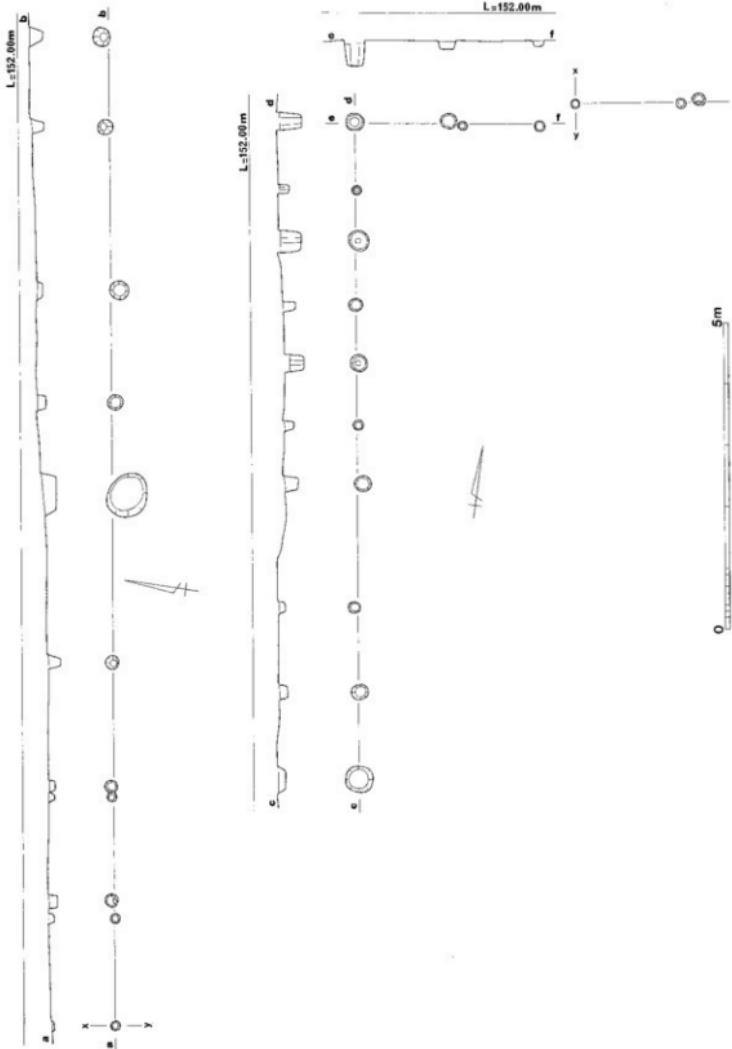


图19 SA02

SA02 (図19) 東西16.1m、南北10.7mのL字状に直交する構列である。SB04・05と重なっており、これらと同時存在ではないのは明らかであるが、前後関係については造構の切り合ひがなく不明である。柱穴の1つから東播系須恵器塊の繙片が出土した。南北方向の方位はN 6°Wである。

SK01 (図20) 土壙墓と考えられるものである。東西0.9m、南北2.0m、深さ28cmの不整長方形の土壤で北西部の底面近くで完形の東播系須恵器塊1、同小皿3が出土した（図21-20～23）。12世紀後半と考えられる。

SK02 SK01の西でこれとほぼ平行してある不整長椭円形の土坑で、これも土壙墓の可能性がある。東西1.0m、南北2.2m、深さ40cmである。出土遺物はないが、SK01との関係でこの時期に属するものと考えた（図20）。

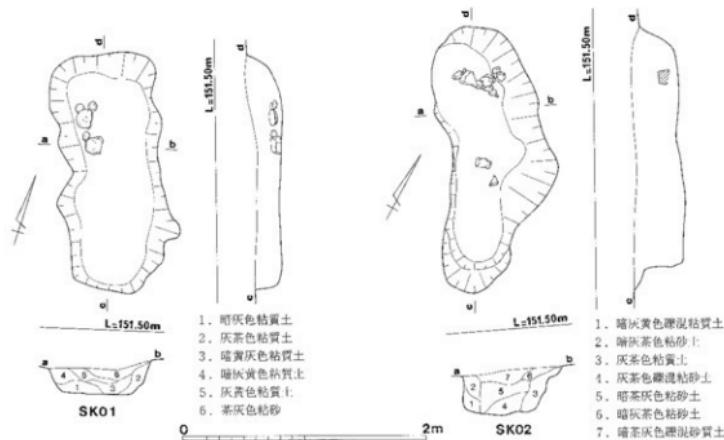


図20 SK01・02

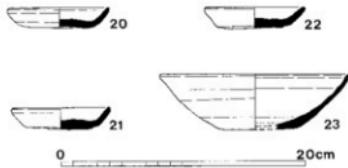


図21 SK01出土遺物

SX01 (図22) 東西2.2m、南北2.5m、深さ20cmの集石土坑である。集石の間から土師器鍋と東播系須恵器鉢が出土している (図23-24・25)。24はその時期を今決定できないが、25は13世紀後半と思われる。

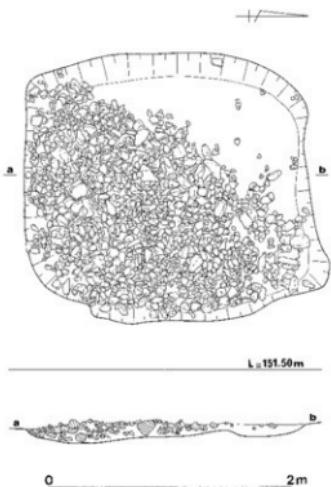


図22 SX01

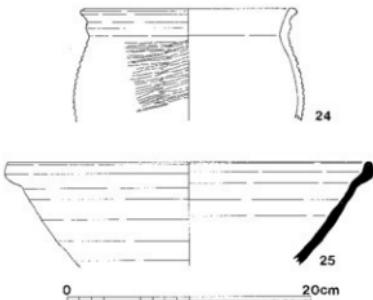


図23 SX01出土遺物

- II b期 (図24) この期に属す遺構には、SB07・08、SA03・04、SK03~10及びSX02・03がある。
- SB07 (図25) 東西4間 (6.8m)、南北4間 (5.4m) の掘立柱建物で、束柱を持つ。主軸方位はN 3°30' Wである。面積は約36.7m²である。遺物は出土しなかった。
- SA03 (図25) SB07の北辺と西辺に平行するL字状の欄列で東西14.7m、南北10.4mを測る。出土遺物はない。南北方向の方位はN 3°30' Wである。
- SB08 (図26) 東西2間 (4.8m)、南北3間 (6.16m) の掘立柱建物で、主軸方位はN 4°Wである。面積は約29.6m²である。柱穴の1つから13世紀~14世紀代と思われる土師器鍋の口縁部小片が出土した。
- また、建物の南西隅で東西1.35m、南北0.95m、深さ20cmの長方形土坑が検出され (図24)、建物に伴う施設乃至墓壙とも思われたが、時期を特定する事ができなかったため、図面等は省略する。
- SA04 (図27) 東西3.6m、南北5.9mのL字状に直交する欄列である。出土遺物はない。南北方向の方位はN 2°Wである。

Y-71480

Y-71480

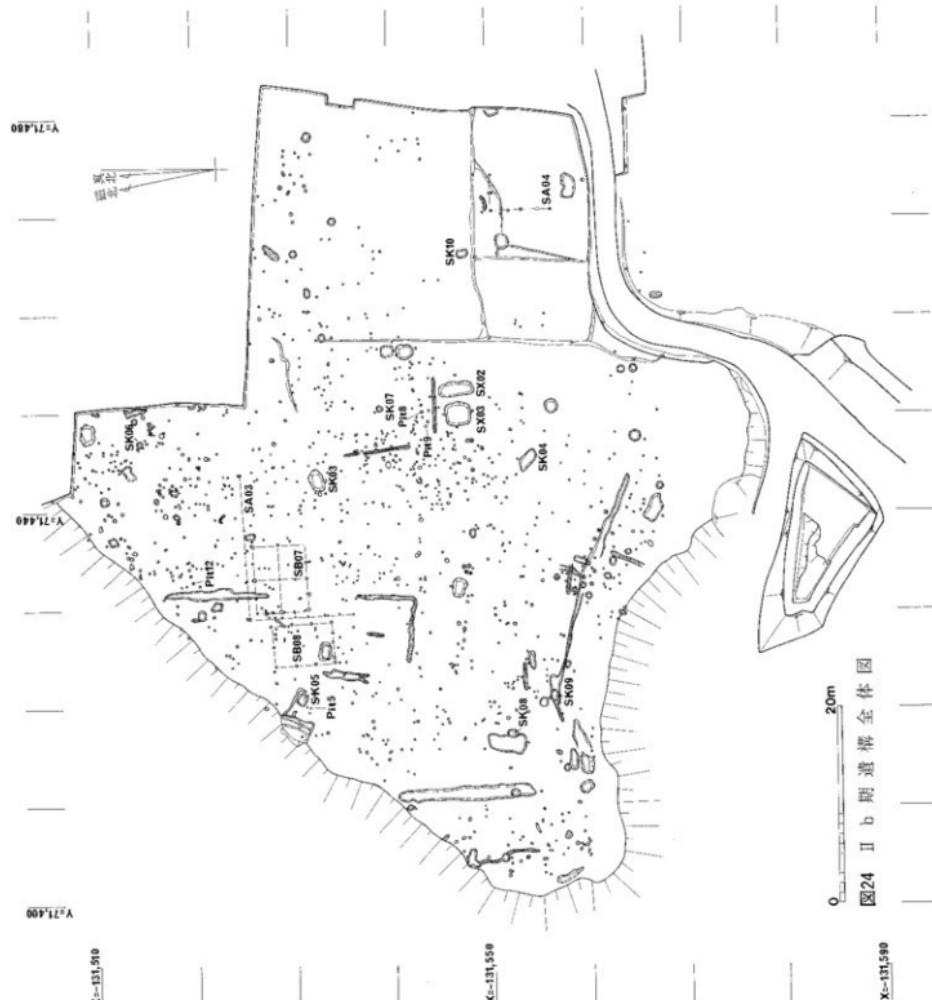
Y-71480

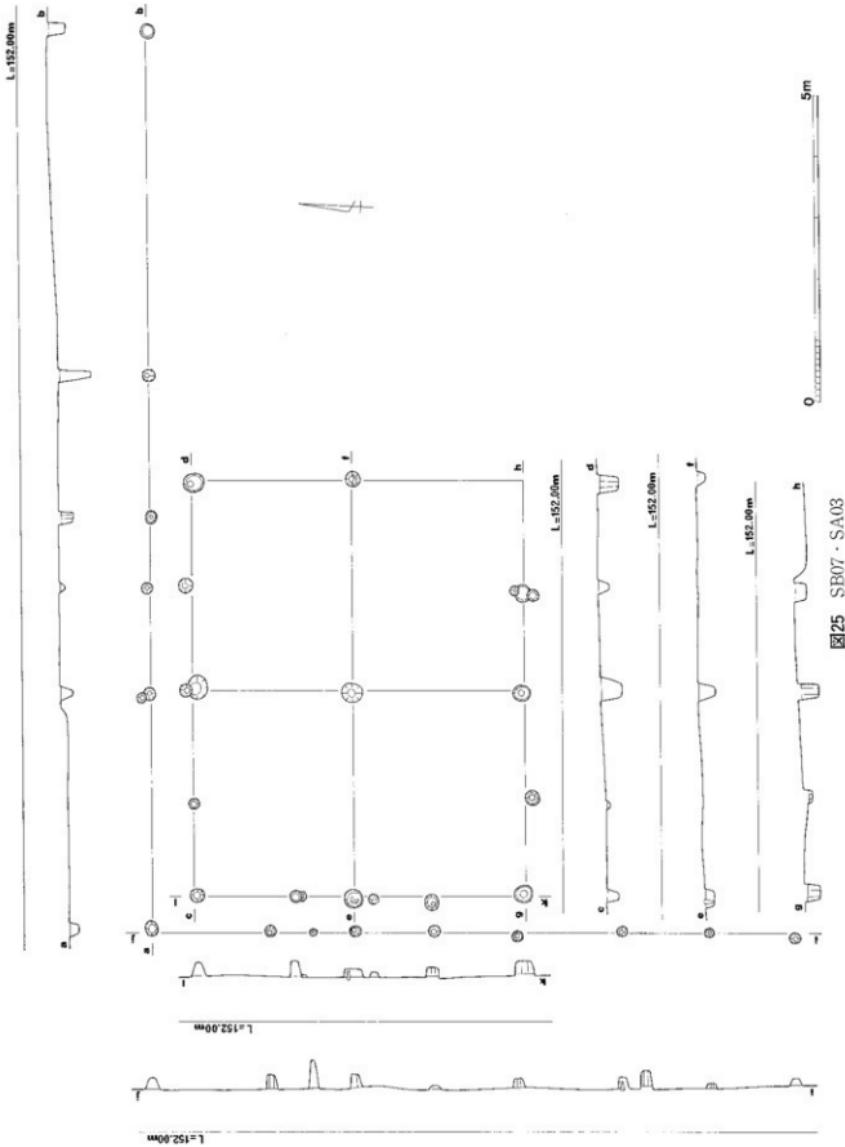
X=131,510

X=131,550

X=131,590

图24 II b 财造構全体圖
20m





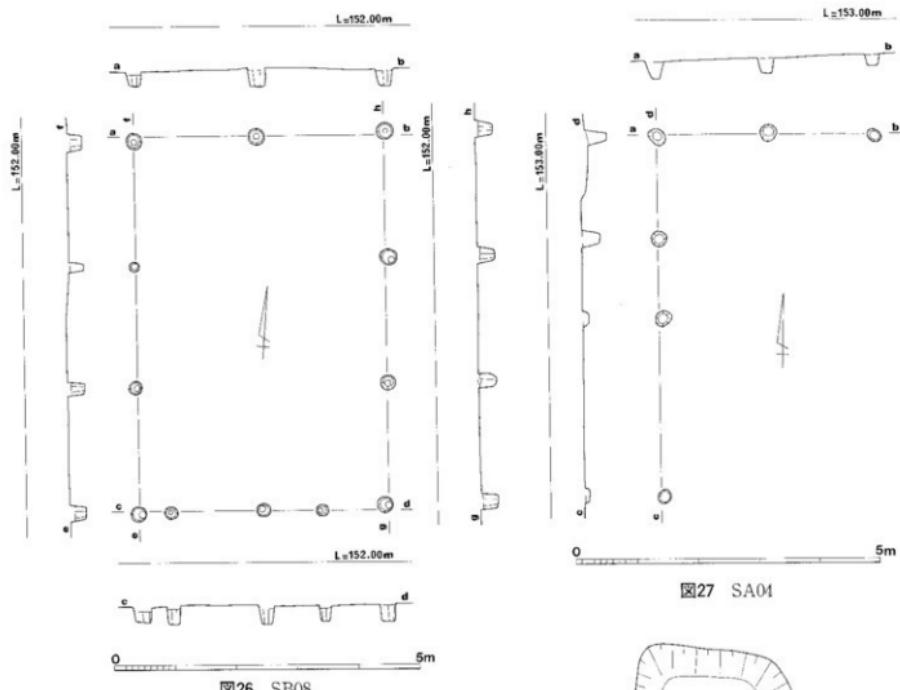


図26 SB08

SK03 (図28) 東西2.25m、南北1.35m、深さ30cmの長方形土坑で、東播系須恵器鉢の口縁部(図29-31)と土師器細片が出土している。14世紀代と思われる。

SK04 (図29) SK04~08 (26~30)についてはⅡa~09期乃至それをやや遡る可能性があるが小片のため明確ではないため、ここに図示しておく。

SK09の土師器筒形容器32については時期を明確にできず、16世紀以降の遺物を伴っていない事から15世紀以前のものと判断した。丹波・丹後の出土例を検討された杉原氏によれば、12世紀後半~14世紀代の土師器筒形容器(土筒)は経筒、経筒外容器の他、骨蔵器の用途があると指摘されている。⁽²⁾淡河地域ではこの他に、淡

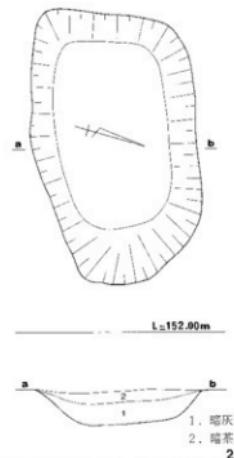


図28 SK03

河町字經塚と字北別僧で鏡などと共に出土し、経筒または外容器と考えられている。また、⁽³⁾勝尾經塚の周囲で須恵質・土師質の破片が出土しており、勝尾經塚以前に、經塚または墓地が営まれていたものと推察されるが、当遺跡のものはその用途が明確ではない。

SK10 SK10は、東西0.8m、南北1.2m、深さ10cmの小土坑で、小石と丹波壺の口縁部（図29-33）が出土した。33は14世紀代で、他に13世紀後半と見られる同口縁部の細片がある。

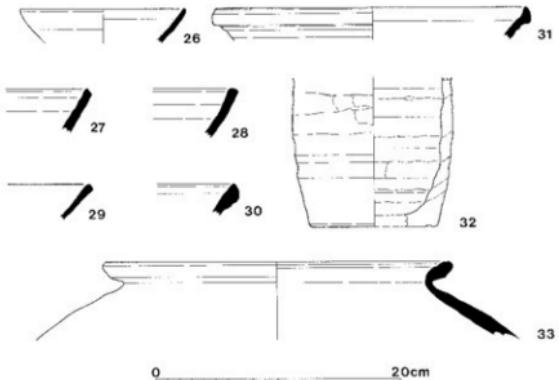


図29 土坑出土遺物

SX02 （図30）東西1.4m、南北3.5m、深さ15cmの長楕円形の集石土坑で、集石の間から土師器鍋、須恵器鍋（図32-34-36）の他、東播系須恵器甕体部（綾杉タタキ）片、同鉢片と滑石片が出土した。14世紀代と考えられる。

SX03 （図31）東西2.5m、南北2.6m、深さ20cmの隅円方形の集石土坑で、集石の間から土師器鍋、東播系須恵器鉢底部（図33-37-39）の他、東播系須恵器甕の体部片（綾杉タタキ）と同塊片が検出された。

この他、少量の遺物を出土した小土坑、ピットがいくつかある。以下15世紀以前と考えられるものについて記述する。

ピット 図34-40-47はII期に属すピットからの出土遺物である。東播系須恵器塊、同小皿、同鉢、中国製青磁碗、同白磁皿と同染付碗の小片がある。東播系須恵器鉢の内41は13世紀代、42は14世紀代と思われる。ピット11出土の45は、横田・森田分類の龍泉窯系青磁碗I-2-a類で12世紀中頃～後半である。ピット5出土の47は小野分類の染付碗C-I類で（以下、中国製染付の分類と編年は同氏に従う）、見込に法螺貝を表す。15世紀末～1554年に編年されている。ピット5はII-a期のSB05の北辺中央の柱穴を切っている。

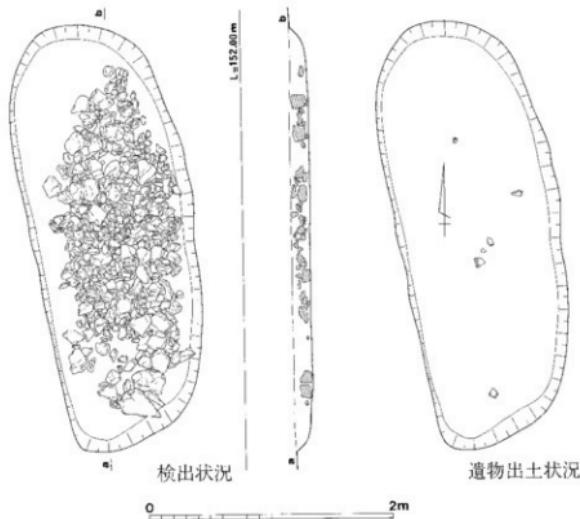


図30 SX02

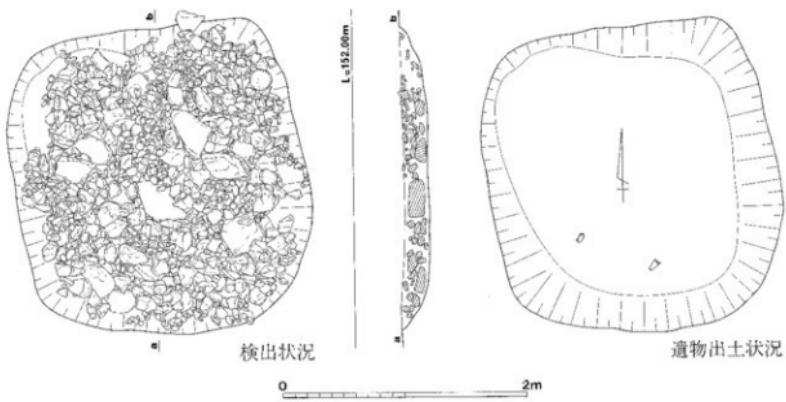


図31 SX03

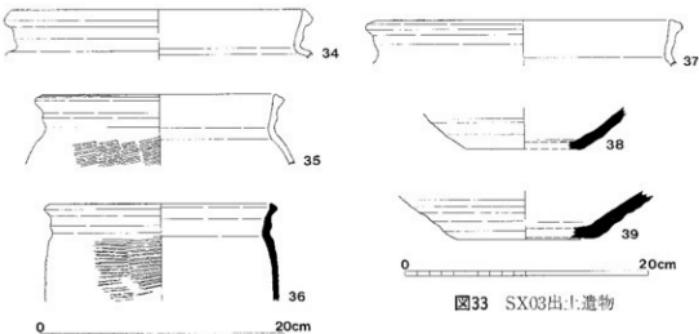


図32 SX02出土遺物

図33 SX03出土遺物

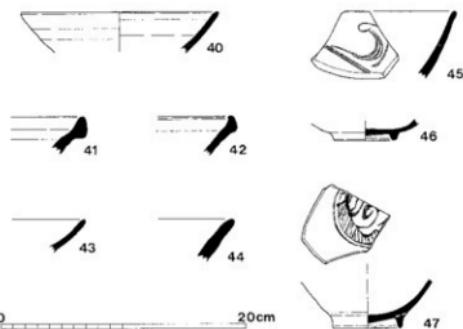


図34 Pit出土遺物

包含層 図35は15世紀以前と考えられる包含層からの出土遺物である。土師器鍋（48～50）、同小皿（52）、東播系須恵器塊（55・56）、同鉢（51・57～59）、中国製青磁碗の底部（53）及び同白磁皿口縁部（54）等がある。

土師器鍋48は14世紀代のものである。同49・50は13世紀～14世紀代と考えられる。同小皿52は12世紀後半～13世紀代と思われるが明確ではない。東播系須恵器塊55は、12世紀後半、56は13世紀前半であろう。同鉢の内51は小片のため明らかではないが12世紀以降のものではなかろう。57は12世紀後半、58は13世紀後半～14世紀代、そして59は14世紀～15世紀前半と考えられる。青磁碗53は龍泉窯系で外面に蓮弁文がある。上出分類のB-II類と考えられ、14世紀～15世紀とされているものである。⁽⁷⁾ 白磁皿54は森田分類のD群（以下、白磁の分類は主に同氏に従う）、小野分類のB群で14世紀後半から15世紀前半のものである。⁽⁸⁾

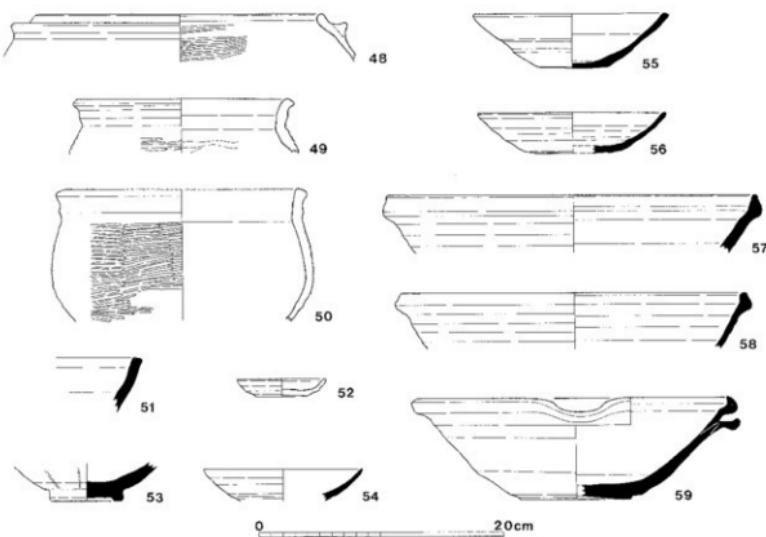


図35 包含層出土遺物

注

(1) 以下、東播系須恵器の編年は主に下記の文献による。

丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会 1985年10月

森田 稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986年3月31日

(2) 杉原和雄「経塚と墳墓—丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡についてー」『考古学雑誌』第74巻第4号 日本考古学会 1989年3月31日

京都府立丹後郷土資料館『経塚 丹後とその周辺』 1997年7月1日

(3) 森内秀造『兵庫の経塚』 前掲書

(4) 山下史郎・松岡千寿『勝雄経塚』 前掲書

(5) 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心としてー」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978年3月

(6) 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会 1982年8月28日

(7) 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 前掲書

(8) 森田 勉「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 前掲書

(9) 注6に同じ

5. III期の造構と遺物

III期の造構には、掘立柱建物・横列・土坑・集石土坑・集石造構・石室・石組造構・横矢及び堀がある。III期は16世紀代と考えられるものである。掘立柱建物は主軸方位及び柱穴出土遺物から、その他の造構は伴出遺物等から大きく前半、後半の2小期に細分しそれぞれIIIa期、IIIb期とした。

IIIa期（図36） この期に属す造構には、SB09～12とSK11・12がある。



SB09 (図37) 東西2間(5.04m)、南北2間(3.88m)の掘立柱建物で、主軸方位はN13°Wである。面積は約19.6m²である。出土遺物はない。

SB10 (図37) 東西2間(5.32m)、南北2間(4.32m)の掘立柱建物で、主軸方位はN11°W

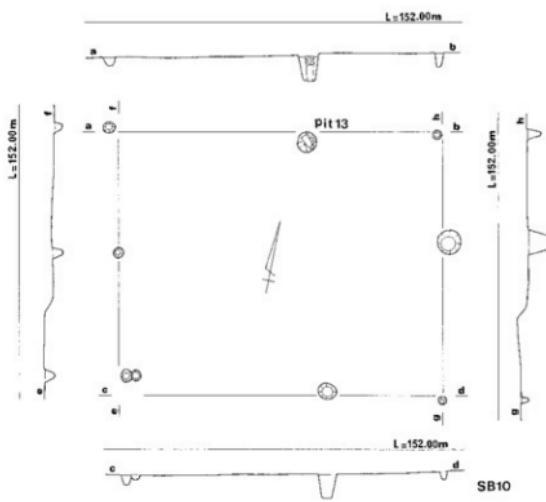
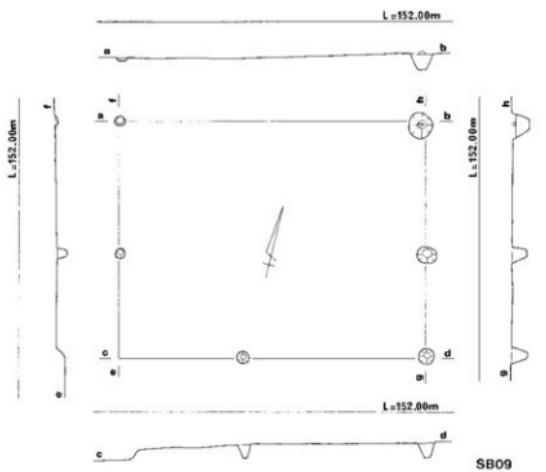


図37 SB09・10

である。面積は約 23m^2 である。北辺中央の柱穴（ピット13）から丹波すり鉢の口縁部片が出土した。丹波すり鉢（図38）は岡崎分類のa類で16世紀前半と考えられる（以下、16世紀代の丹波すり鉢の分類と編年は同氏に従う）。

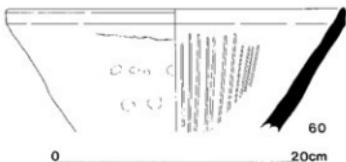


図38 SB10柱穴出土遺物

SB11 （図39）東西2間（6.6m）、南北1間（2.84m）の掘立柱建物で、主軸方位はN11°Wである。面積は約 18.7m^2 である。柱穴から須恵器の細片が出土した。

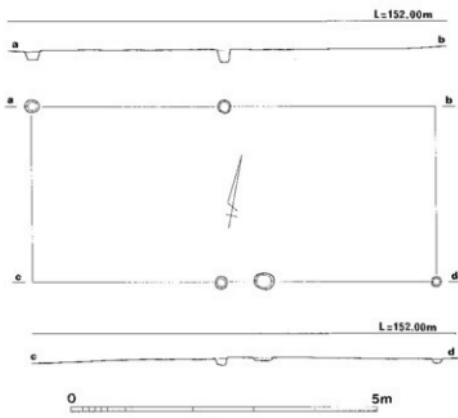


図39 SB11

SB12 （図40）東西4間（11.24m）、南北2間（5.88m）の掘立柱建物で、主軸方位はN13°Wである。面積は約 66.1m^2 である。柱穴から須恵器の細片が出土した。

SK11 （図41）東西1.6m、南北1.8m、深さ0.55mの隅円方形土坑で、中国製白磁皿が出土した（図42）。61は皿D群で、小野編年で14世紀後半～15世紀前半、62は皿E群で15世紀末～16世紀第3四半期である。

SK12 （図43）東西1.95m以上、南北0.7m、深さ10cmの長楕円形土坑で、土師器小皿と瀬戸・美濃灰釉丸皿が出土した（図44）。土師器小皿は磨滅が激しく、調整が明瞭ではない。63・64の底部外面は回転条糸と思われる。瀬戸・美濃灰釉丸皿66は内外全面に施釉が見られ、内ハゲがなく口縁部がやや外反することから見て、藤澤編年の第2段階で1520年～1555年（以下、瀬戸・美濃の編年は同氏に従う）、井上編年の大窯I期～II期前半で1530年～1550年と思われる。底部外面に輪トチン痕がある。

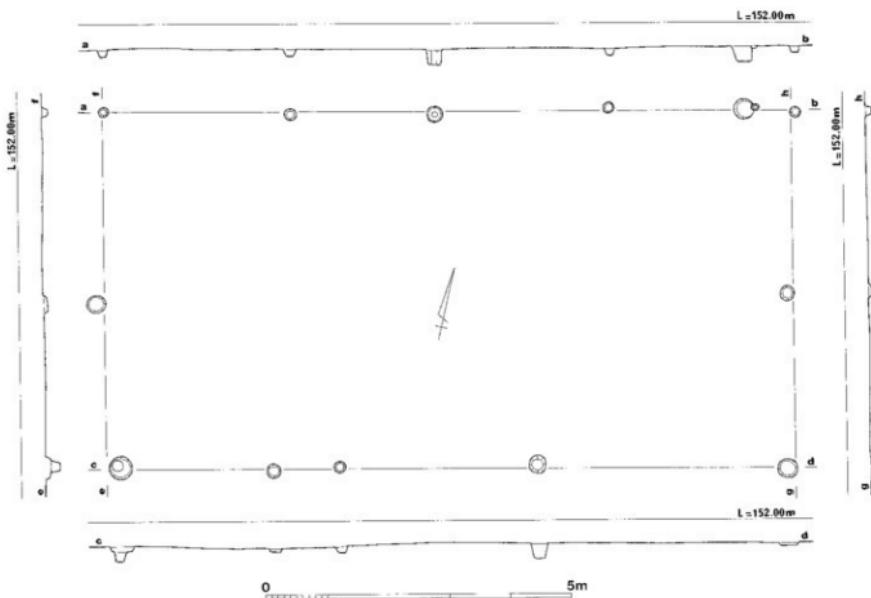


图40 SB12

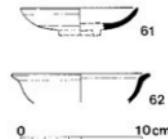
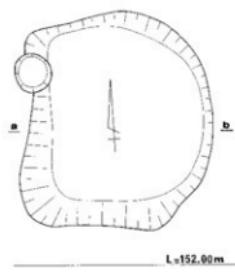


图42 SK11出土遗物

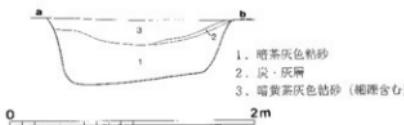


图41 SK11

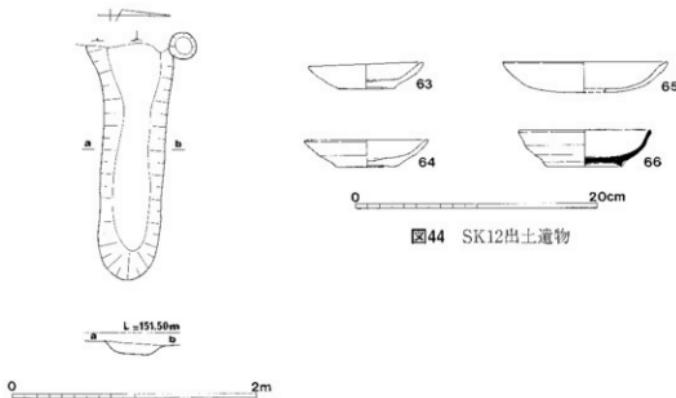


図43 SK12

図44 SK12出土遺物

Ⅲ b 期（図45・46）この期に属す遺構にはSB13～18、SA05、SK13～20、SX04～08、SD01～10、ピット及び横矢がある。

掘立柱建物ではその方位がⅢ a 期と大きく異なるのが注意される。これはⅢ a 期とⅢ b 期の間に、ある程度の時間的空白が存在することを示すものかもしれない。

SB13 （図47）東西4間（8.0m）、南北3間（6.2m）の東柱を持つ掘立柱建物で、東側に半間分の庇がある。主軸方位はN 1°Wである。面積は約55.6m²である。柱穴から須恵器の細片が出土した。

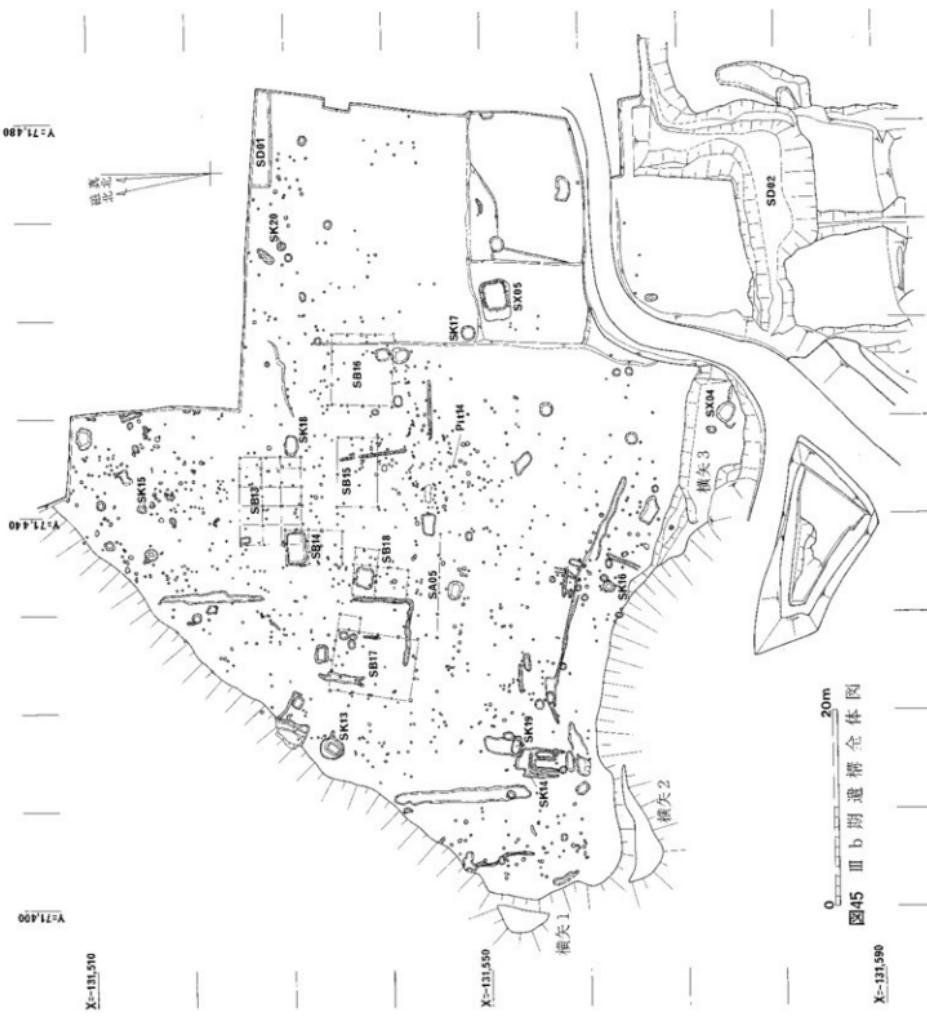
SB14 （図48）東西2間（3.5m）、南北4間（5.56m）の掘立柱建物で、内部北側に東西3.2m、南北2.0m、深さ20cmの長方形土坑を伴う。主軸方位はN 30°Wである。面積は約19.5m²である。土坑から土師器細片と鉛製鉄炮玉が1点出土した（図49）。

67は土師器すり鉢c類と考えられる（土師器すり鉢の分類と編年については後述する）。鉄炮玉68は直径1.25cm、重さ8.38gである。

SB15 （図50）東西2間（7.36m）、南北3間（4.12m）の掘立柱建物で、主軸方位はN 30°Wである。面積は約30.3m²である。柱穴から須恵器の細片が出土した。

SB16 （図50）東西4間（7.2m）、南北4間（6.36m）の掘立柱建物で、主軸方位はN 1°30' Wである。面積は約45.8m²である。出土遺物はない。

SB17. （図51）東西3間（6.2m）、南北4間（8.3m）の掘立柱建物で、主軸方位はN 9°Eである。北東隅の外側に1間分の張出部がある。面積は約54.7m²である。また北東隅に直径約0.8m、深さ約25～45cmの3基の円形土坑があり、埋壟設置遺構とも思われるが、遺物が小片の状態でも出土せず、性格が明確ではない。



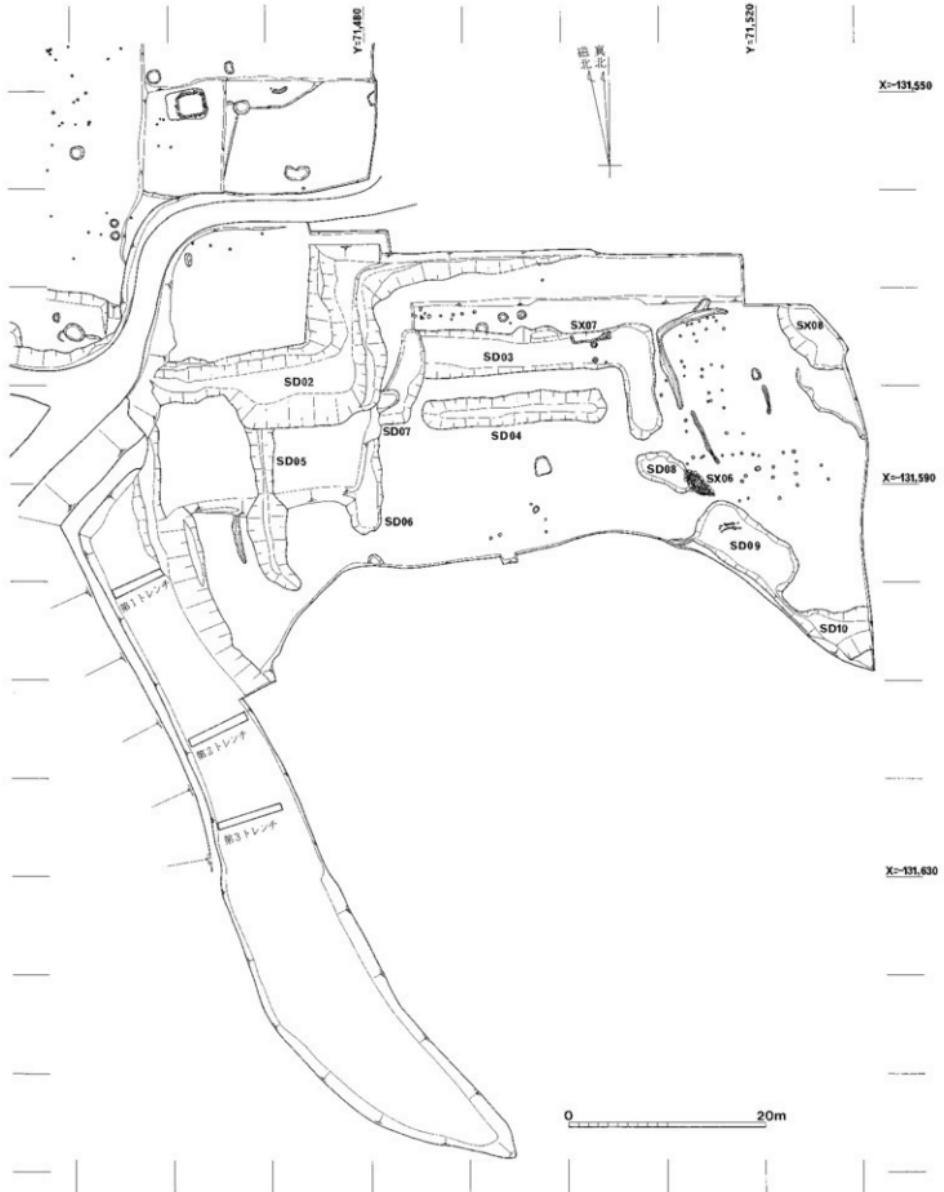


図46 III b期 遺構 全体図

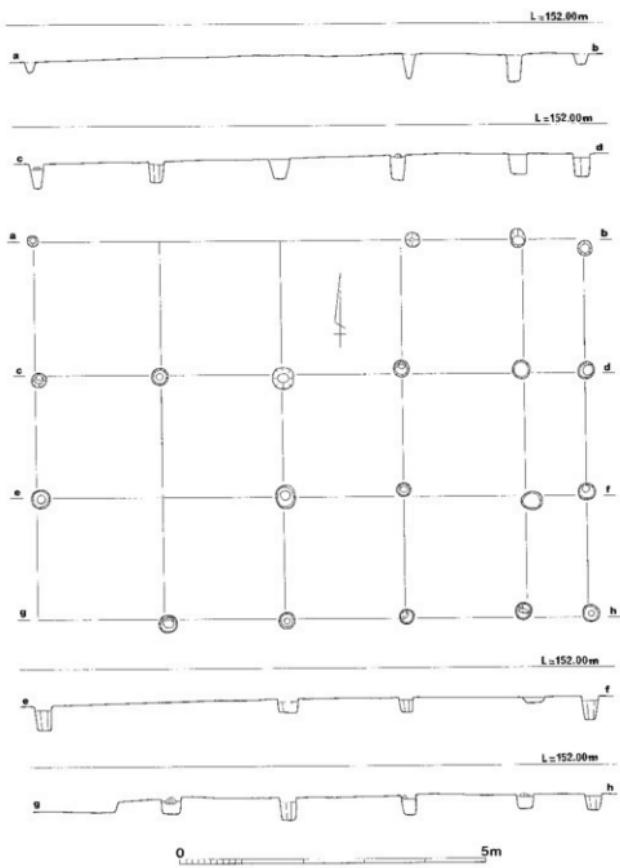


図47 SB13

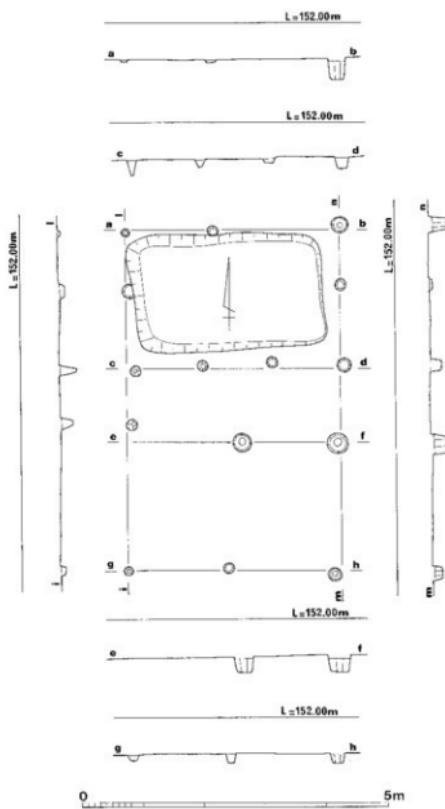
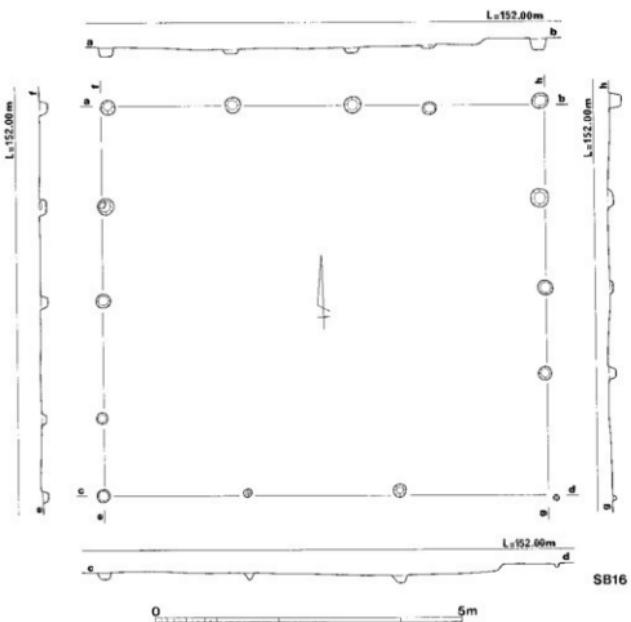
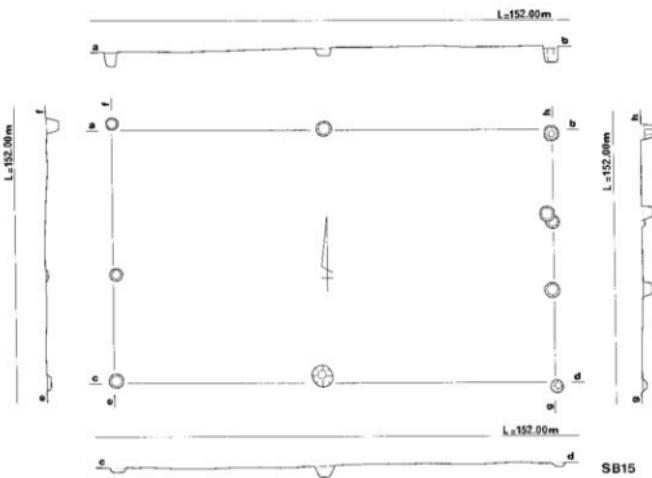


図48 SB14



図49 SB14出土遺物



■50 SB15 · 16

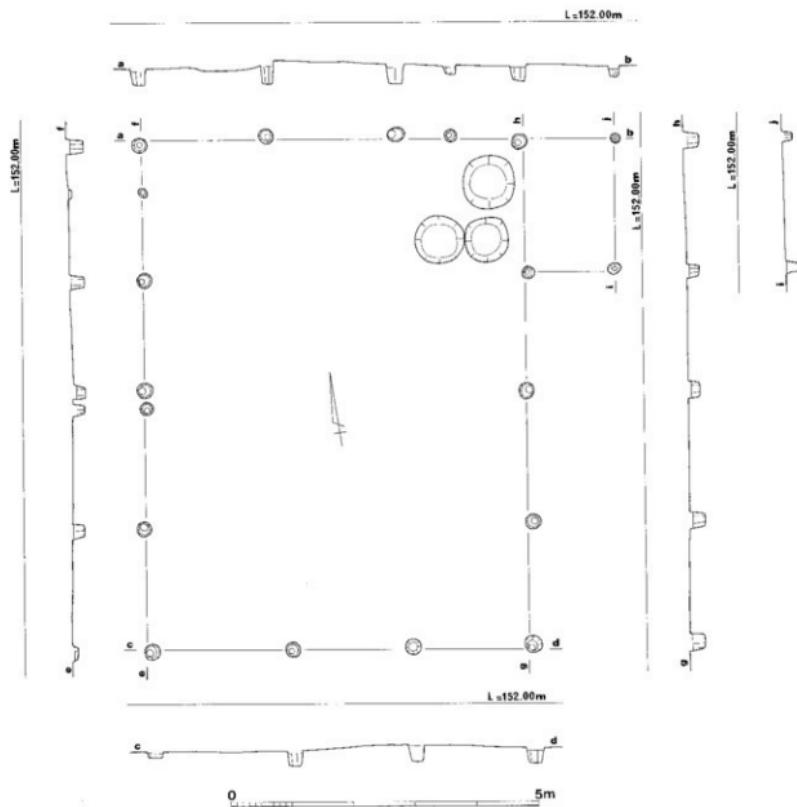


図51 SB17

SB18 (図52) 東西4間(3.2m)、南北6間(5.56m)の掘立柱建物で北東隅の外側に1間分の張出部がある。内部北側に東西2.1m、南北1.8m、深さ10cmの長方形土坑を伴う。また、建物南半に直径50cm、深さ4cmの円形土坑があり、その中央に20cm×30cm、厚さ約4cmの焼土が残存していた。主軸方位はN 6° Eで、面積は約22.0m²である。

土坑からE群の中国製白磁皿(図53-69)と底部外面系切の土器器小皿片が出土した。

SB17・18は16世紀代と考えられるが、前半のⅢa期の建物とは大きく方位が異なるため、Ⅲb期に属するものと仮定しておく。

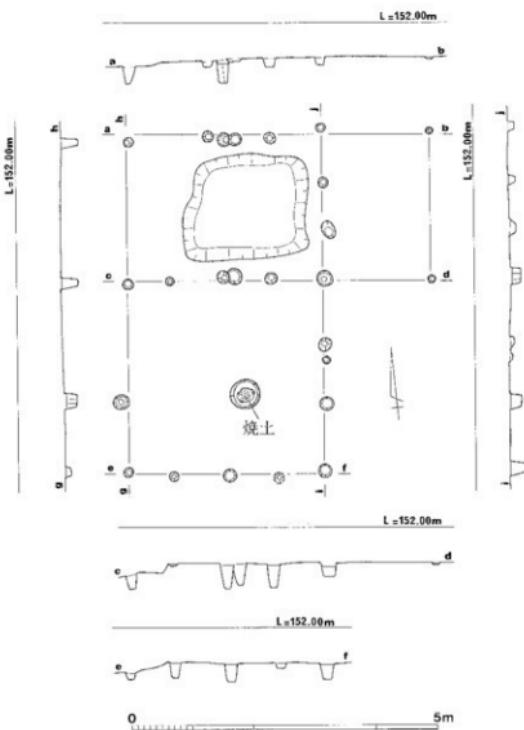


図52 SB18

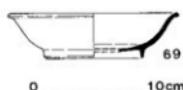


図53 SB18出土遺物

SA05 (図54) 東西10.6mの柵列で、SB15・16と平行するため当期と考えた。出土遺物はない。主軸方位はW2°Nである。

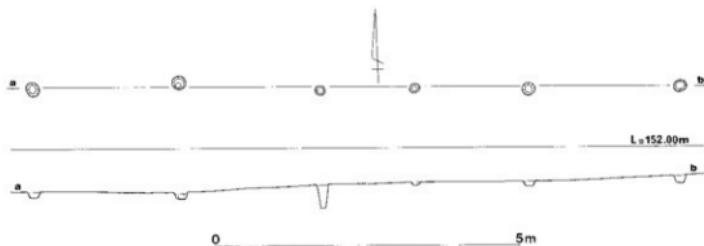


図54 SA05

SK13 (図45) 長径2.5m、短径2.2m、深さ10cmの楕円形土坑の中に、長辺1.3m、短辺0.7m、深さ30cmの長方形土坑が検出されたもので、棺の可能性もあるが明確ではない。

土師器小皿片が2個体出土し、内1つ(図57-70)は底部外面の調整が不明であるが、他方は回転系切痕が見られる。

SK14 (図45) 東西3m、南北4.5m、深さ10cmの不整形土坑で、土師器小皿(図57-71)の他、同すり鉢片や中国製白磁碗の底部片などが出土した。

SK15 (図45) 東西0.9m、南北0.8m、深さ35cmの不整形土坑で、c類の土師器すり鉢(図57-72)が出土した。16世紀後半と思われる。

SK16 (図55) 東西1.05m、南北1.3m、深さ40cmの隅円方形土坑で、埋土上層には自然石が投棄されていた。炭と焼土がこの土坑の北側に南北長1.4m、東西幅0.7mの範囲で拡がっていたが、SK14はこの焼土を切って作られている。開壁編年でV期に属す備前鉢(図57-73)が出土した。16世紀後半以降のものである。

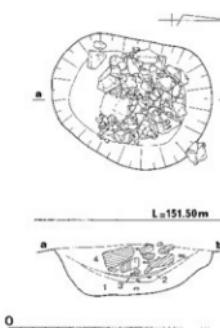


図55 SK16

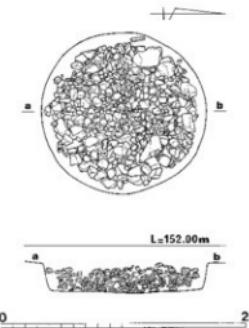


図56 SK17

SK17 (図56) 直径1.35m、深さ20cmの円形集石土坑で丹波壺と土師器すり鉢片が出土した。丹波壺（図57-74）は14世紀～15世紀と考えられるが、土師器すり鉢片が伴う事から、投棄されたのは16世紀に入ってからと思われる。

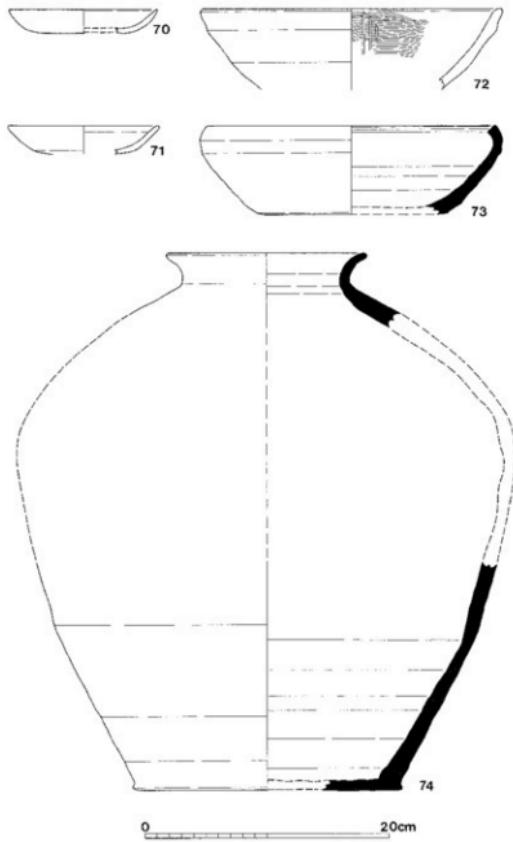


図57 土坑出土遺物

SK18 (図58) 東西2.05m、南北1.3m、深さ30cmの隅円方形土坑で、埋土上層から一石五輪塔8個体と土師器小皿、瀬戸・美濃灰釉丸皿及び丹波すり鉢片が出土した（図59～61）。土師器小皿75は底部外面が回転糸切のもので16世紀代であろう。瀬戸・美濃灰釉丸皿76は第2段階のものである。丹波すり鉢片はヘラすり目で、後述のSD03出土のものと接合した（図81～124）。

一石五輪塔には安置式と埋立式があるが、77は安置式、図61の地輪は埋立式である。これ以外のものについては地輪欠損のため明らかではない。いずれも砂岩製である。77は総高52cm、地輪の高さ16cm、幅は15cmである。梵字・銘文ともに見られない。地輪の高さ：幅の比（1.07）、及び各輪部の形状から見て16世紀の前半と考えられる。⁽⁵⁾ 81の空・風輪の形態は77のそれに近いが、その他に関しては、風輪・水輪が偏平化している事や、全体の調整が粗い事から、前2者より時期的に下るものかと思われるが断定は避けたい。

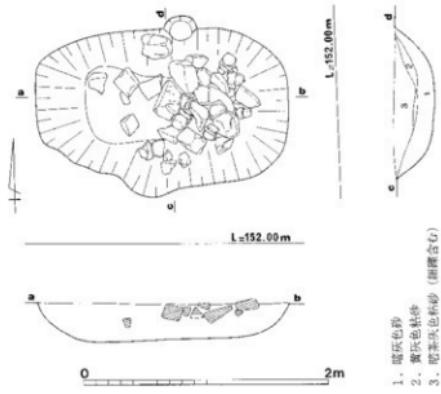


図58 SK18

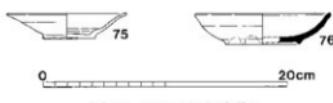
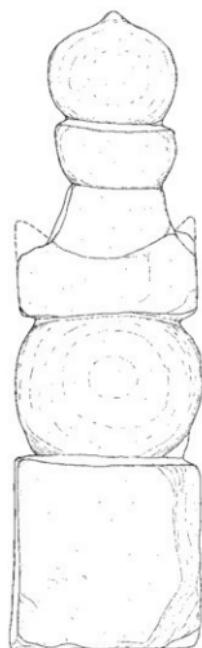
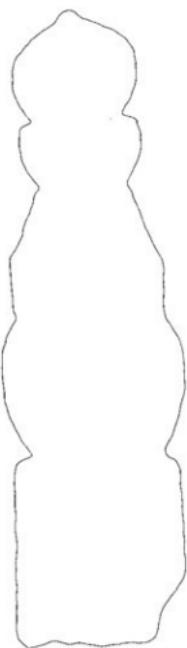


図59 SK18出土遺物



77



78



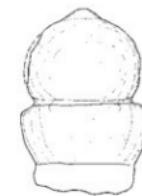
79



80



81



82

0 20cm

図60 SK18出土一石五輪塔

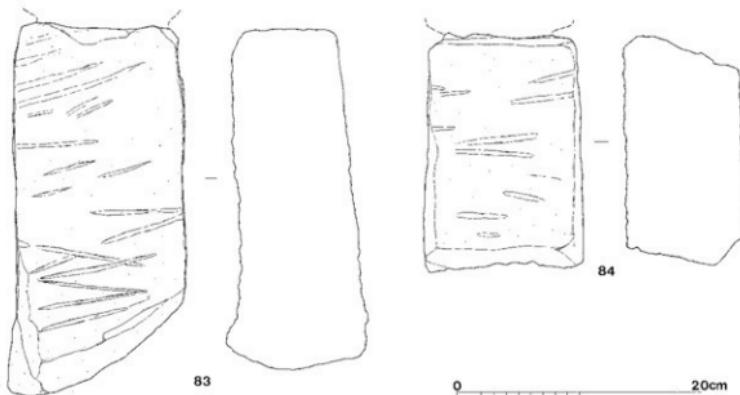


図61 SK18出土一石五輪塔

SK19 (図45) 東西1.6m、南北1.0m、深さ5cmの長方形土坑で、土師器小皿、須恵器小皿(図62)が出土した。須恵器小皿87は12世紀後半と思われる。土師器小皿85・86は16世紀でも後半と思われるが明確ではない。

SK20 (図45) 東西0.8m、南北0.9m、深さ30cmの円形土坑で、土師器小皿(図63)が出土した。88の底部外面は回転糸切であるが、89は磨滅により不明である。

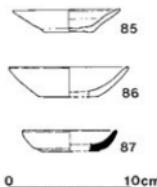


図62 SK19出土遺物

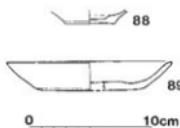


図63 SK20出土遺物

横矢1～3 (図45) A区西・南辺部とE区南辺部には上面から一段下がった箇所に小規模な平坦面が付加されている。この部分は「横矢掛け」を意図した施設と考えられる。以下この小平坦面を横矢1～3と仮称しておく。

横矢1～3の内、E区南端の虎口に近い場所に設けられた横矢3が最も広い。南辺と西端に後世の破壊を被っているため、本来の規模は不明であるが、残存部分で東西6.0m、南北1.5mで、北側の平坦面との比高差は約1.8mである。調査前にはここに農家の作業道具小屋が建っており、平坦化していることは疑いないが、昭和35年の航空写真から作成した地形図でもこの平坦面を確認することができ、かつ後述するSX04が上面から検出されたことからも、古い平坦面の可能性がある。

横矢は千田氏によれば、永祿から天正初年には出現するものであり、萩原城の歴史を考える上で重要な遺構である。

SX04 (図64) 横矢3の上面で検出した東西2.2m、南北1.7m、深さ30cmの不整梢円形の集石土坑で南半が一段深くなる。底面近くから土師器鍋、東播系須恵器鉢、丹波すり鉢と陶器壇が出土した (図65)。土師器鍋90・91、東播系須恵器鉢92・93は14世紀から15世紀、丹波すり鉢94はc類で16世紀中頃と考えられる。95は胎土・焼成等からみて丹波すり鉢と思われるが口縁端部の形状や、浅く細いヘラすり目など特徴的なものである。陶器壇96・97については、肥前系と見られ16世紀でも末頃のものであろう。この他、土師器すり鉢片や平瓦片も出土している。

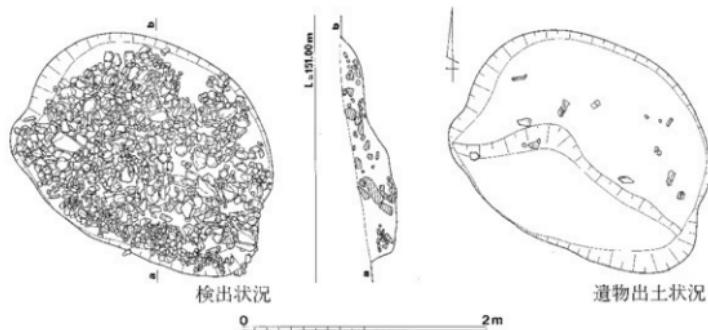


図64 SX04

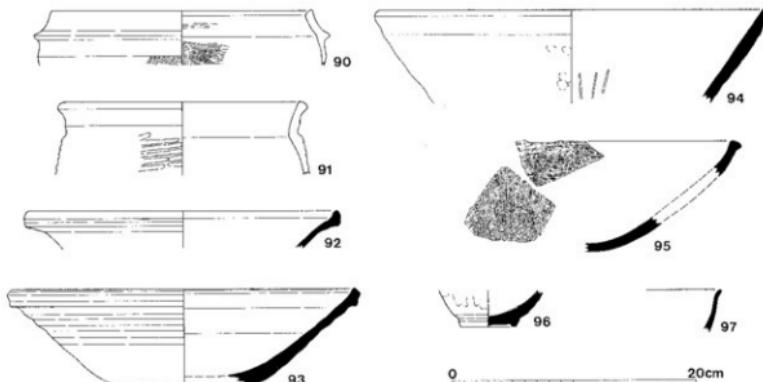


図65 SX04出土遺物

SX05 (図66) 東西4.2m、南北3.0m、深さ0.5mの長方形土坑の東に偏して構築された石室である。石室は自然石を用い、残存状態の最も良い箇所で4段を残している。内法での東西長2.4m、南北長1.9mである。石室床面から一石五輪塔と鉄器が、石室埋土から土師器すり鉢、丹波すり鉢、土師器鍋片や東播系須恵器碗片が出土し、石室裏込め土からE群と思われる中国製白磁小皿を検出した（図67・68）。

土師器すり鉢98はb類である。丹波すり鉢99は後述のSD01出土のものと接合する。c類で16世紀中頃と考えられる。中国製白磁小皿100は、小野編年で15世紀末から1573年頃で、これらから見てSX05構築時期は16世紀中頃～後半頃と考えられる。

砂岩製の一石五輪塔101は地輪の長い埋立式で、完存するが出土時は空輪～氷輪と地輪とに割れて前者は石室の床面北東隅で、後者は石室の床面中央で確認された。空～氷輪の偏平化が進んでいることや、地輪の調整が粗く、各輪間に弊痕を残すことなどから見て、SK18の五輪塔より新しいものとも考えられる。総高51.5cm、地輪の高さ28cm、幅は上端で14.7cm、下端で15.8cmである。

鉄器102は鑿と考えられる。現存長16.2cmで、刃部幅は1.6cmである。

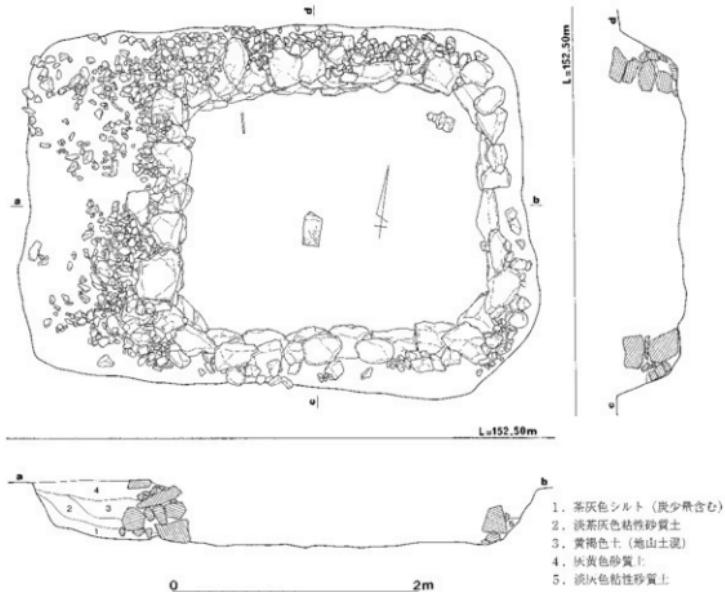


図66 SX05

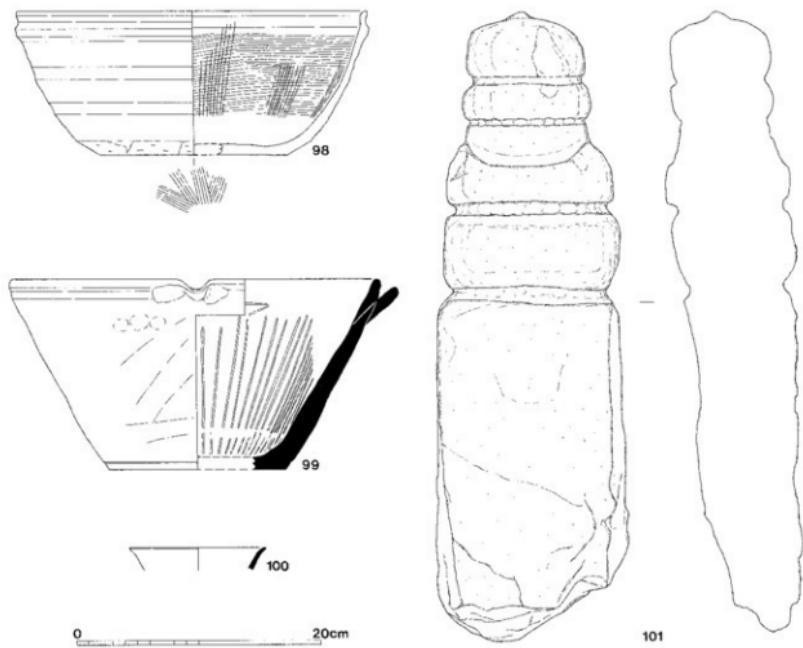


図67 SX05出土遺物

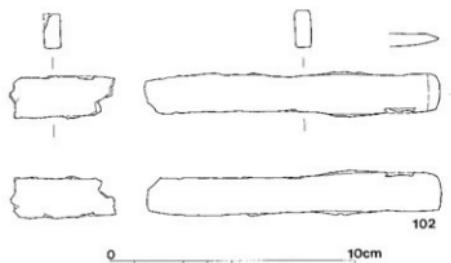


図68 SX05出土遺物

SX06 (図69) SD08埋没後に構築された集石遺構で東西4.5m、南北1.9mである。北・西と南辺に40~50cm大の自然石をコの字形に配置し内部に小石を2~3重に敷いている。小石敷を除去した段階で土師器炮烙、備前壺片と小柄 (図70)、一石五輪塔の地輪部を検出した。土師器炮烙103は十河分類のB-II類 (以下、炮烙の分類と編年は主として同氏に従う)、吉識氏の小田城編年で、16世紀第3~第4四半期である。備前壺104は肩部外面に縱方向のクシ描き沈線がある。小柄105は柄部が銅製のもので、全長21.93cm、柄部長9.15cm、同幅1.5cm、同厚さ0.67cm、刃部長12.78cmである。

SX06は埋葬遺構とも考えられるが、調査段階では人骨などそれを裏付ける資料は得られなかった。

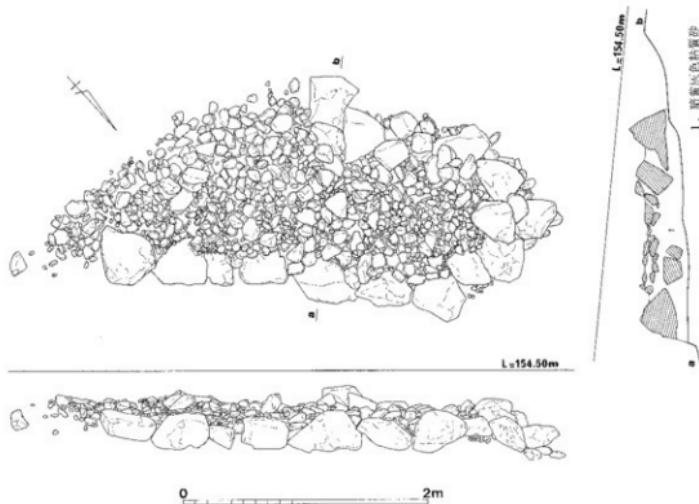


図69 SX06

SX08 (図46) 本丸北側地区の北東で検出された東西幅4.0m以上、南北長7.0m以上、深さ1.2mの落ち込みである。14世紀代の土師器鍋 (図71~106) と b類の土師器すり鉢 (同図-107) が出土した。

ピットト (図72~108) E区にある直径22cm、深さ26cmのピット14から出土した青磁碗で、後述するJ・K区の近世集石部から出土したものと同一個体と考えられるため、図上で復元した。口縁端部外面は肥厚し、厚い底部を持つ。底部外面を除く全面にオリーブ灰色の釉が施される。胎土はやや粗く、灰白色だが底部下部は浅黄橙色を呈している。内面に8弁の蓮華文が印花で表現される。明代以降のものと思われるが明確でなく類例の増加を待ちたい。

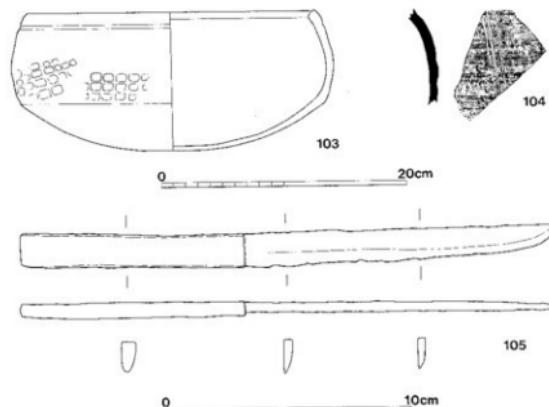


図70 SX06出土遺物

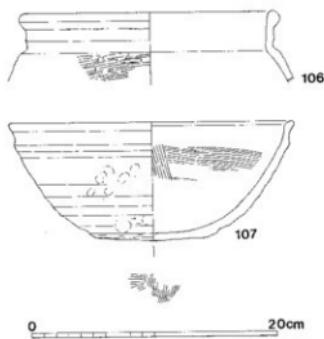


図71 SX06出土遺物

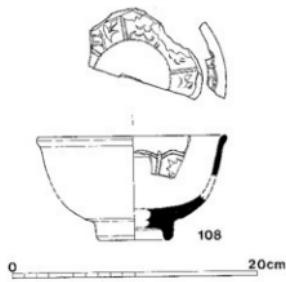


図72 Pit14出土遺物

SD01 (図73) F区北側で検出された断面箱形と考えられる堀で、東西10.0m以上、南北2.0m以上で深さ30cmである。遺物は細片が多いが土師器鍋、回転糸切底の同小皿、東播系須恵器壇、同鉢や丹波乗り鉢（図74-109）が出土した。丹波乗り鉢はc類で16世紀中頃のものである。SX05のもの（図67-99）と接合する丹波乗り鉢片が出土している。

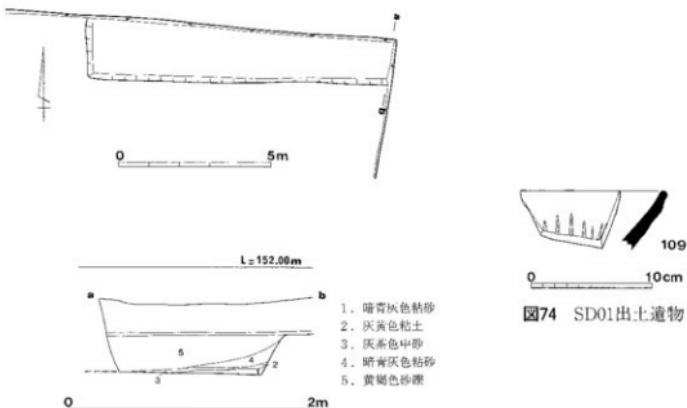


図73 SD01

図74 SD01出土遺物

SD02 (図75・80) 今回調査を行った堀の内、最大規模のもので西端は開口している。西端より7.0mまでは上端幅3.5m、深さ2.3mの断面V字形を呈する。後述する近世の石橋SX11から東側は上端幅8.0m、下端幅3.5m、深さ3.0mの断面箱形の広い堀となる。その東端ではほぼ直角に屈曲して北側に延びるが、近世の石橋SX12が築かれる付近では堀の断面下半は再びV字形となっている。この付近での深さは約2.4mである。

SX12の南側で、この石橋構築前の土層中から柄穴を持つ柱の一部が出土した。柱は現存長2.02m、直径35cmで、2ヶ所柄穴が確認出来る。柄穴の間隔は58cmである。柄穴は柱の主軸に平行して穿たれており一方は縦11cm、横9cm、深さ8cmで他方は縦11cm、横5cm、深さ9cmである。出土状況から萩原城に関係する可能性がある。

SX12から北約4.0mでさらに東へ折れ曲がり堀は続くが、調査区外になり確認できた東西長は約20mである。

なお、SD02の深さに関しては、この部分が後世の櫓台造成によって段状に削平を受けている事が明らかで、本来は1~2mこれより深かったものと推定される。

(図77) はSD02が幅を広げる部分から出土したもので、110・111は埋土上層、112はSX12の南側でその構築面より下の層で出土した。110は土師器鍋で16世紀前半頃と思われる。111は須恵器のすり鉢で時期などは不明である。体部内面にクシによるすり日を施している。112は中国製と思われる白磁碗で、内面中央に浅い段があり、口端部はやや外反する。SD

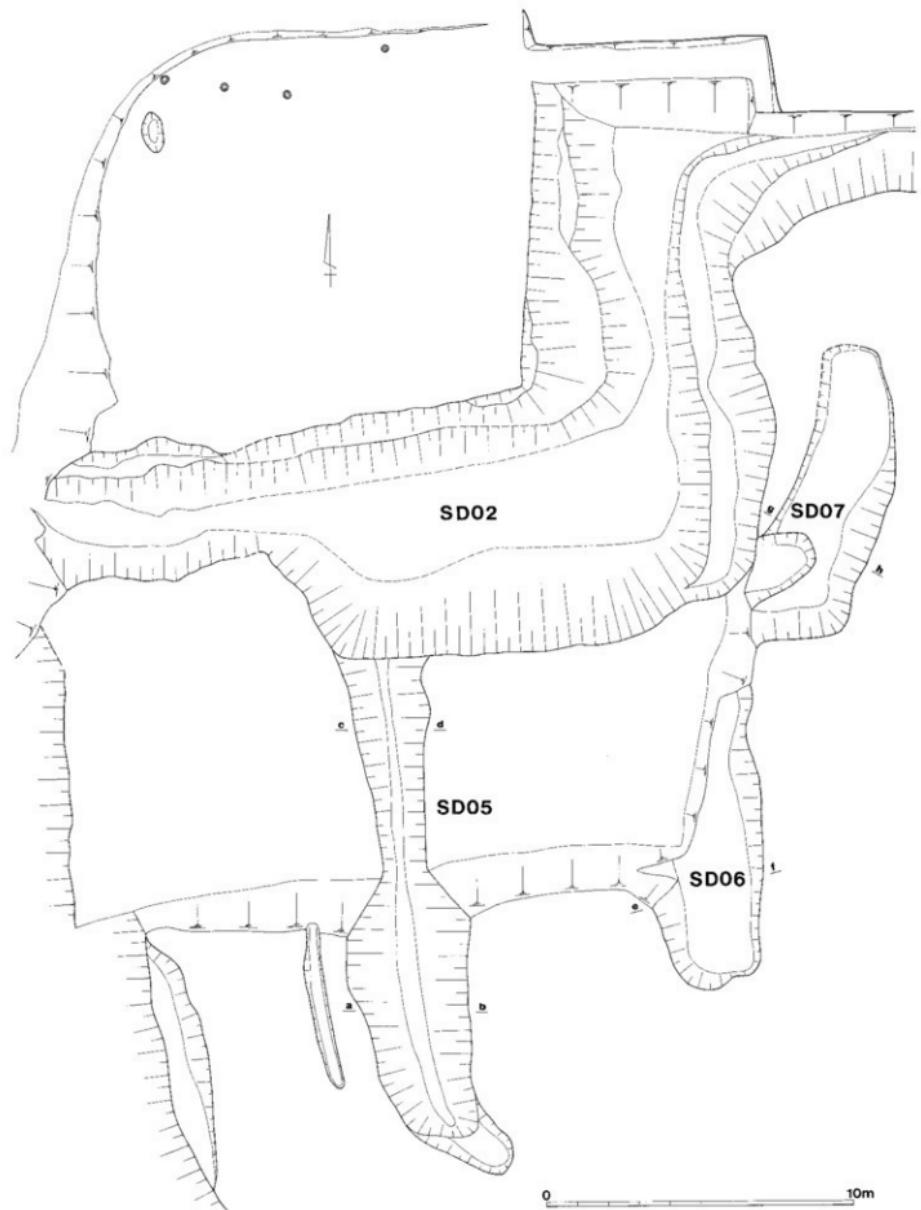


図75 SD02・05～07

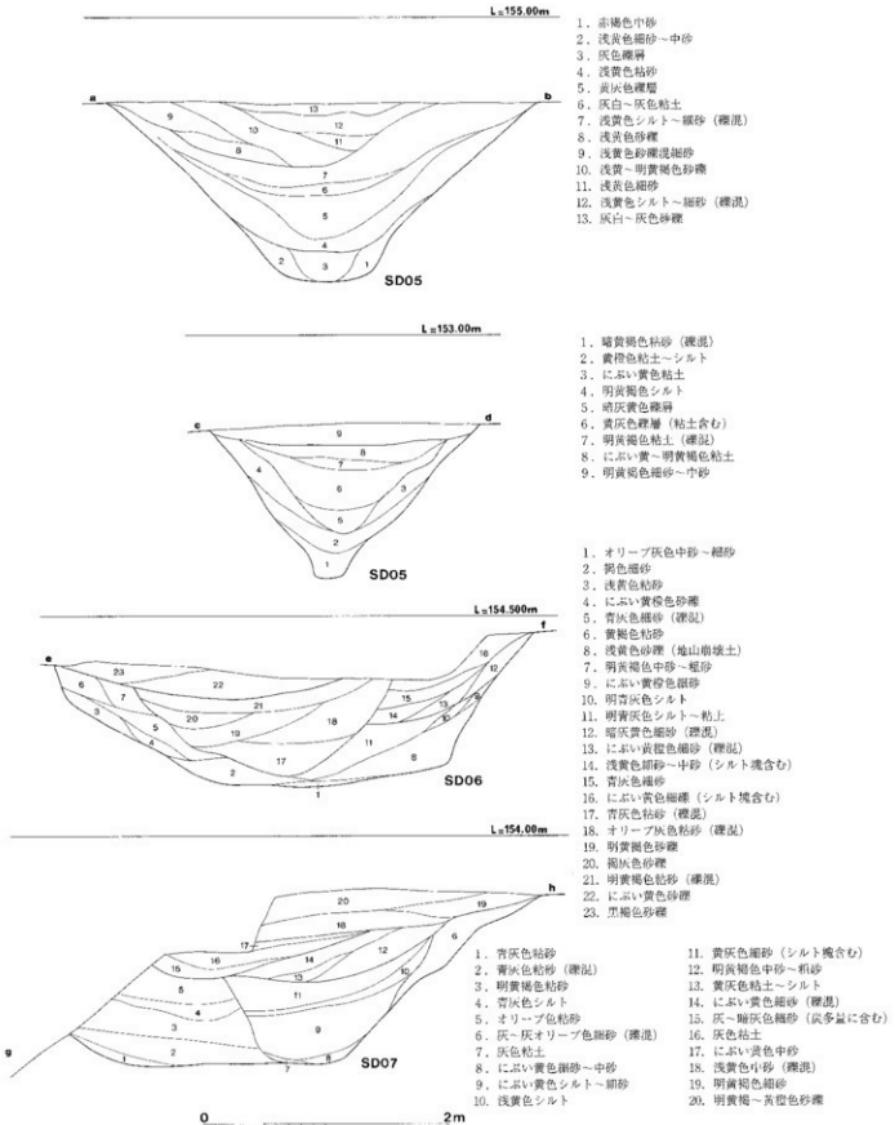


図76 SD05～07土層断面図

02の北辺部の埋土上層からはこの他、瀬戸・美濃鉄釉天目碗や丹波すり鉢（図78）が出土している。瀬戸・美濃鉄釉天目碗113は、第2段階のものと思われる。丹波すり鉢115はa類、114は分類不明だが16世紀でも前半であろう。

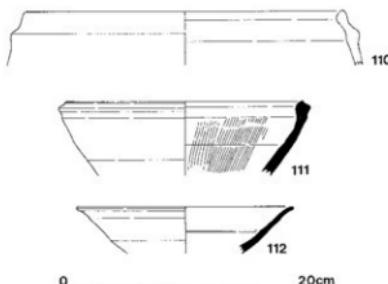


図77 SD02出土遺物

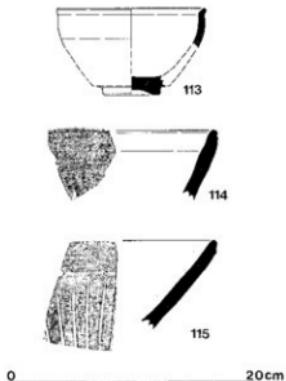


図78 SD02出土遺物

SD03 （図79・80） SD02と後述するSD04との間にあるL字状の堀である。東西長約26m、南北幅約12mである。西端での上端幅4.8m、下端幅3.5m、東南端での上端幅3.4m、下端幅3.0mで断面は箱形を呈する。土層断面から少なくとも1回の掘り直しが認められるが、明確に分離して調査できる所は西端付近に限られていた。西端をSD07によって破壊されている。

土師器鍋、同小皿、同炮烙、同すり鉢、丹波すり鉢、備前すり鉢、陶器壺や中国製白磁皿等が出土した（図81）。備前すり鉢はSD04埋土中～最上層出土の破片（図83-134）と接合した。116の土師器鍋は16世紀初め前後、同炮烙117はB-II類である。丹波すり鉢123はa類で16世紀前半、同124はSK18出土のものと接合した。土師器すり鉢118・119はc類で16世紀でも後半であろう。同小皿120の底部外面は回転糸切で、SD04出土例と相似する。121は白磁の小皿で輪花の表現がある。122は陶器の壺で外面に黄色の釉が掛かる。

SX07 （図79・82） SD03の東半区でその北辺に接して構築された石垣遺構である。SD03底面に若干の粘土層が堆積した段階で作られている。東西長4.15m、南北幅1.0m、現存高0.7mで、3段分が確認できる。SX07の南側で堀底に直径48cm、深さ31cmと、直径30cm、深さ43cmの柱穴が見られる。また、各柱穴の東に直径10cm、深さ5cmの小ビットが伴う。SX07とこれら柱穴から考えてSD03に掛かる橋状の施設が存在した可能性がある。

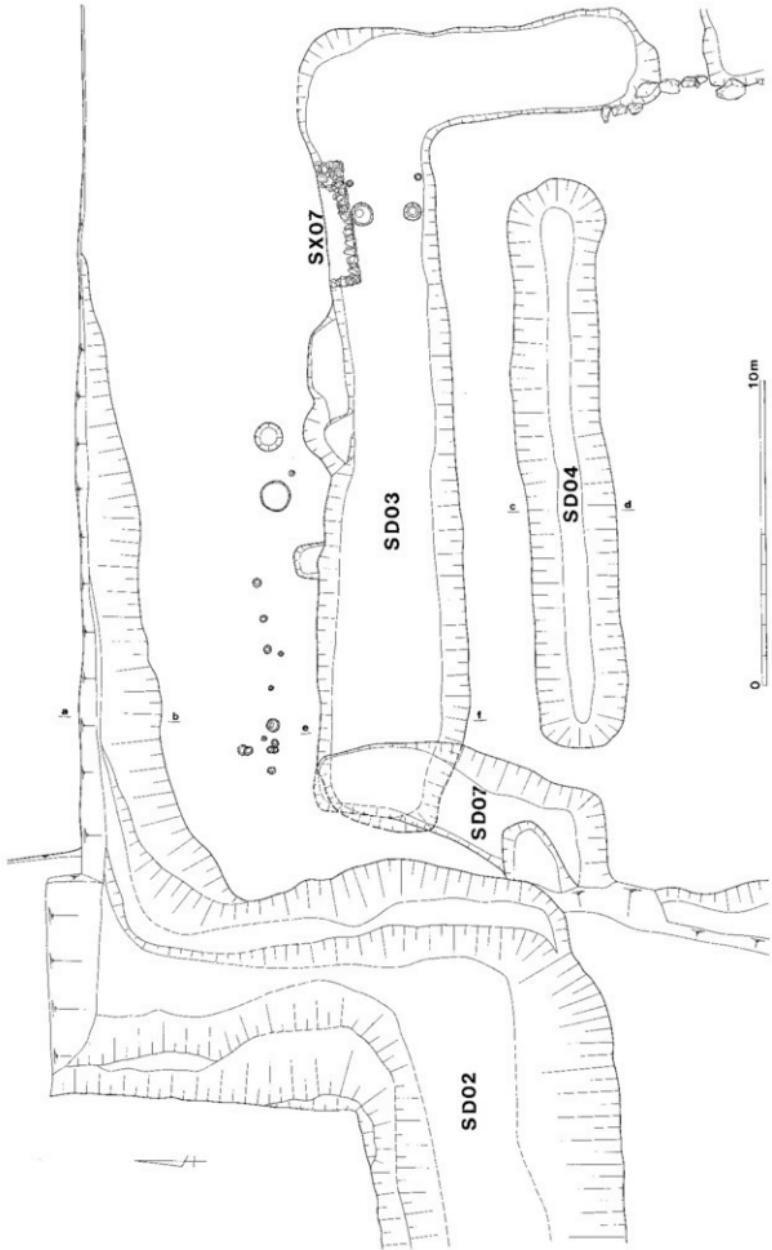
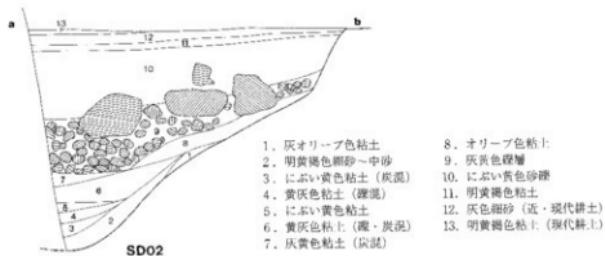


図79 SD02~04・07

L = 153.00m



L = 154.50m



L = 154.00m

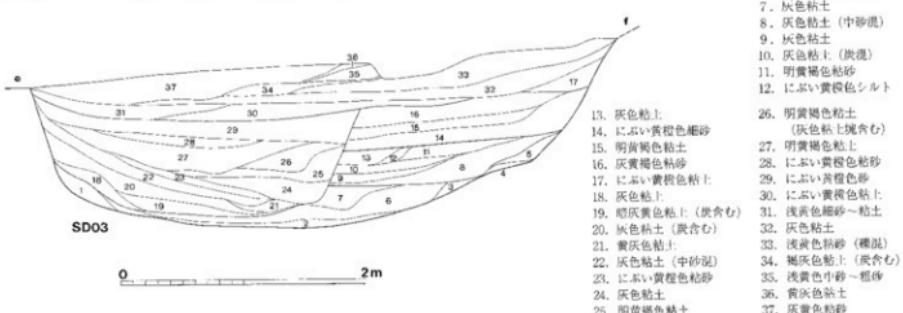


図80 SD02～04上層断面図

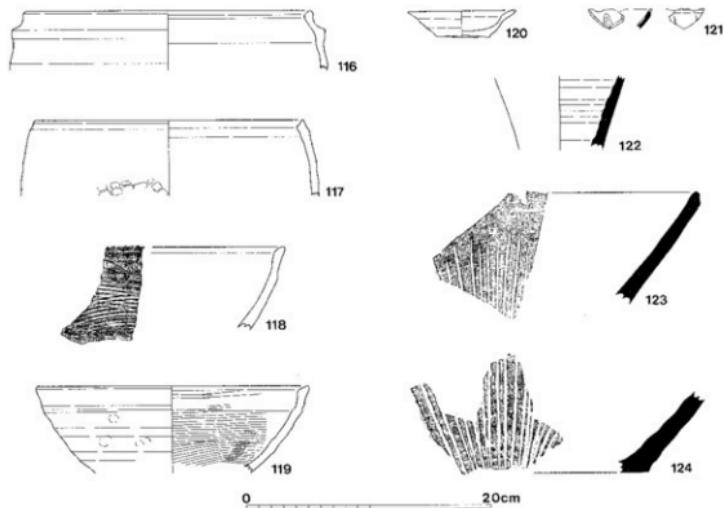


図81 SD03出土遺物

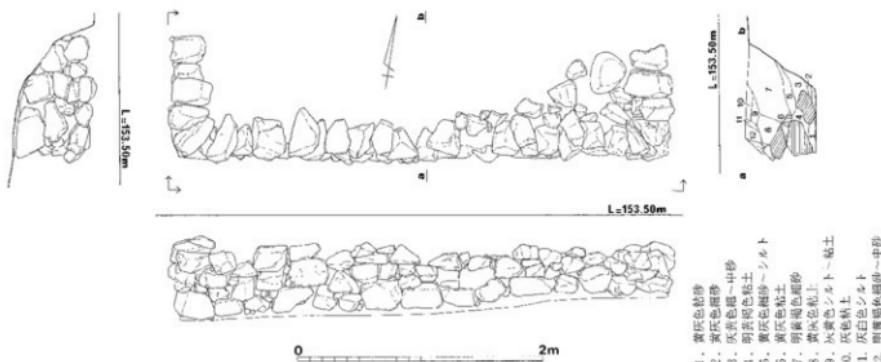


図82 SX07

SD04 (図79・80) SD03の南で、これに平行して走る東西方向の、幅3.0m、長さ16.8m、深さ1.3mの断面U字形の堀である。埋土最上層に炭と小石の層が見られた。

土師器小皿、同鍋、同すり鉢、陶器すり鉢、丹波すり鉢、備前窯、同すり鉢、中国製青磁碗、同白磁皿、同染付小皿や同染付碗が出土した (図83)。

土師器小皿125～127は回転糸切底のものである。同鍋129は姫路市加茂遺跡分類の土鍋Ⅲ類、炮烙A～V類で16世紀中頃のものである。同すり鉢130はb類である。陶器すり鉢131は土師器すり鉢と同形のもので調整・成形方法なども共通している。土師器の分類に従うとb類に属する。最上層出土の土師器すり鉢片は、SD09最下層出土のものと接合した(図88～150)。

丹波すり鉢128はa類で16世紀前半のものである。139はc類で最上層から出土し、SD07出土の破片と接合した。備前壺133は、3片を図上で接合したものである。肩部に3本のクシ描波状文がある。間壁縦年のV期に属し、16世紀後半以降のものである。同すり鉢134はSD03下層出土のものと接合する。SD04の中～最上層から検出された。佐野縦年のIV期B(古)で15世紀後葉～末に位置づけられる。

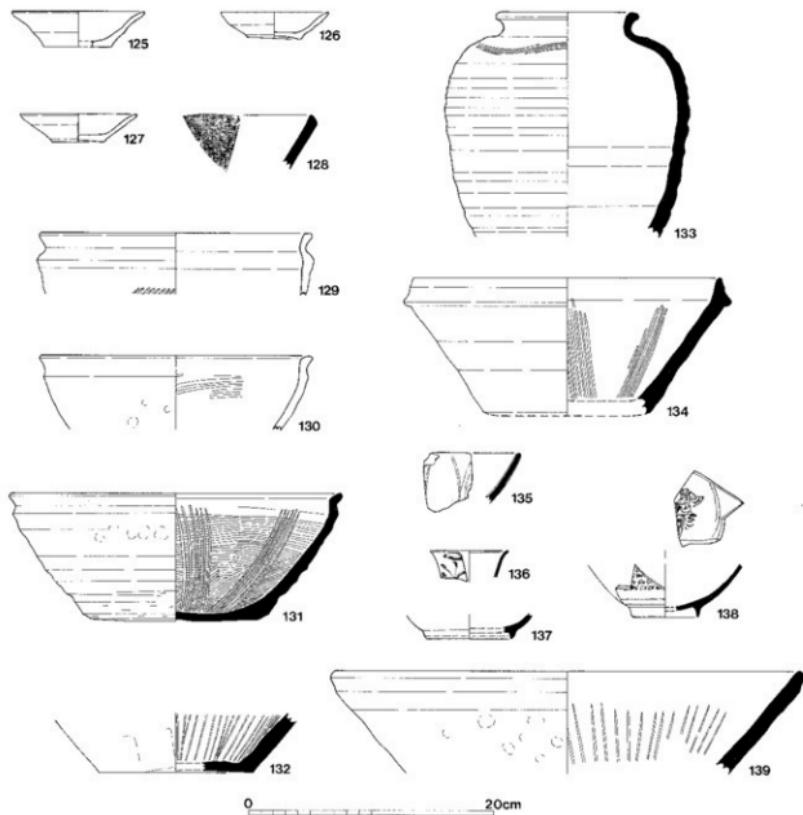


図83 SD04出土遺物

中国製青磁碗135は外面に蓮弁文をもつ上田分類のB-II類で14世紀末~15世紀初めのものである。同白磁皿137は底部のみだが、E群と思われる。同染付碗138はC-III類で15世紀末~16世紀前半である。見込みに十字花文、外面に逆ハート形の小文を密に描く。染付小壺136の外面は草花文と見られるが、小片のため明確ではない。最上層からの出土である。

また、下層から「皇宋通寶」と思われる腐食の激しい銭貨が1枚出土している。

- SD05 (図75・76) SD02に直行して南に延びる堀で、SD02に切られている。また、北半は後世の棚田造成時に削平を受けている。南半部の最大幅4.0m、深さ1.5mで南北長16.8mである。南端は東に短く折れ曲がり、浅くなつて終わる。出土遺物はない。
- SD06 (図75・76) SD05の東約6m離れて平行して掘られた堀である。最大幅4.0m、深さ1.3mで南北長10.0m以上である。出土遺物はない。
- SD07 (図75・76) SD06北側で南端が西に屈曲する堀である。屈曲して更に南に曲がるものと思われ、SD06と繋がっていた可能性が高い。北端部はSD03の西端部を切っており、SD03の埋没後に掘削された事が判明している。屈曲部付近はSD02によって切られている。南北長9.6m、最大幅3.6m、深さ1.4mである。
- 土師器小皿 (図84-140・141) とSD04出土のもの (図83-139) と接合する丹波すり鉢片が下層から出土した。

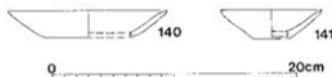


図84 SD07出土遺物

- SD08 (図85) 東西長6.4m、南北幅3.0m、深さ0.7mの深い堀である。回転糸切底の土師器小皿やSD10出土のもの (図87-152) と接合する丹波すり鉢片が出土した。
- SD09 (図85・86) SD08の南東にある。東西長11.2m、南北幅4.8m、深さ50cmの深い堀である。南西隅から西へ幅0.6m、深さ11cmの小溝が延びる。また、南東隅からも幅0.6m、深さ40cmの小溝が延びてSD10と繋がっている。回転糸切底の土師器小皿 (図88-142~146)、同炮烙 (同図-148)、同すり鉢 (同図-149・150) と瀬戸・美濃灰釉丸皿 (同図-147) が出土した。148は、加茂遺跡分類の土鍋Ⅲ類、炮烙A-VI類で16世紀第4四半期を中心とする時期である。土師器すり鉢149はb類、150はc類である。149のすり目はヘラによるもので底部内面は木の葉状に施されている。兵庫県多紀郡丹南町の初田館跡に類例がある。150は最下層出土で、SD04最上層出土のものと接合した。瀬戸・美濃灰釉丸皿は小片のため詳細不明である。
- SD10 (図85・86) SD09と小溝によって連結する東西方向の堀である。南北幅5.2m、東西長7.0m以上で最も深い所で1.8mを測る。B-II類の土師器炮烙 (図87-151) と、SD08出土のものと接合する丹波すり鉢 (同-152) が出土した。

以上のほか、遺構に伴わない遺物が包含層や流土中などから出土している。そのうち16世紀代と見られるものについて以下記述する（図89）。

土師器小皿、同すり鉢、丹波すり鉢、備前壺、唐津焼、瀬戸・美濃灰釉丸皿、中国製白磁皿と同染付皿がある。土師器小皿は、磨滅のため調査不明の157を除いて、回転糸切底である。同すり鉢158はc類である。丹波すり鉢159はa類である。備前壺160は短い頸部と鋸部外面が肥厚する口縁を持つ水屋壺で、開墾年V期に属する。161は口縁端部がやや外反する唐津の壺である。162は見込に圓線と菊文を押印する、基筒底の瀬戸・美濃灰釉丸皿である。

163～165はE群と思われる中国製白磁皿である。165は全面施釉で、壺付部に釉剥ぎがある。また163と共に漆雜ぎの痕が残る。166は染付碗C群と考えられる。見込に二重圓線とSD04出土磁器碗の外面文様と共通するハート形の小文様が見られる。



図85 SD08～10

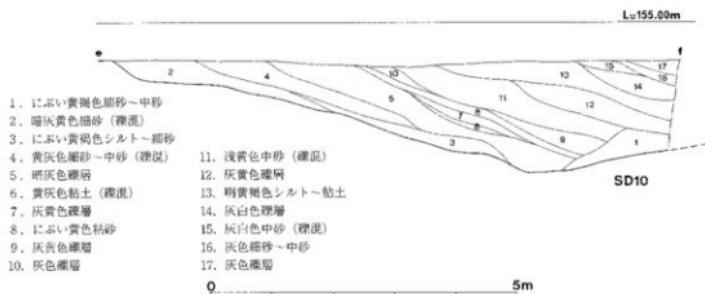
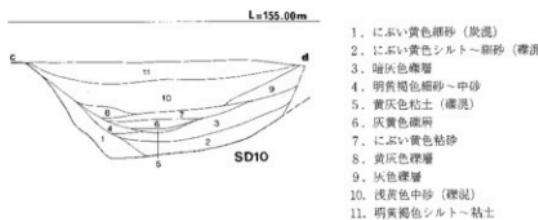
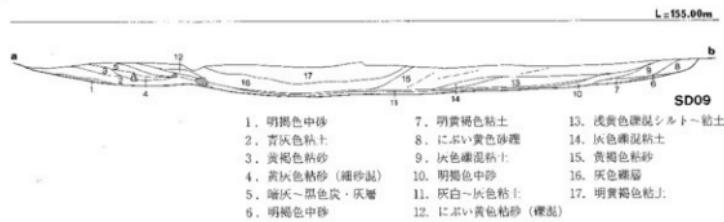


図86 SD09・10土層断面図

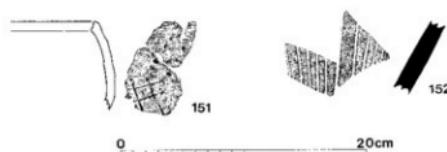


図87 SD10出土遺物

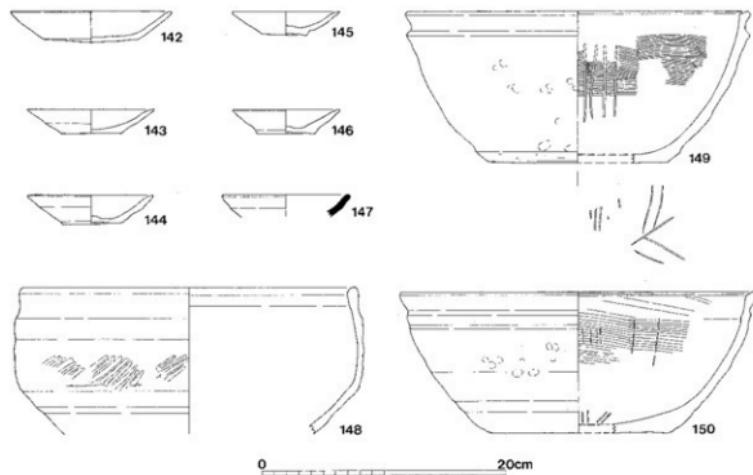


図88 SD09出土遺物

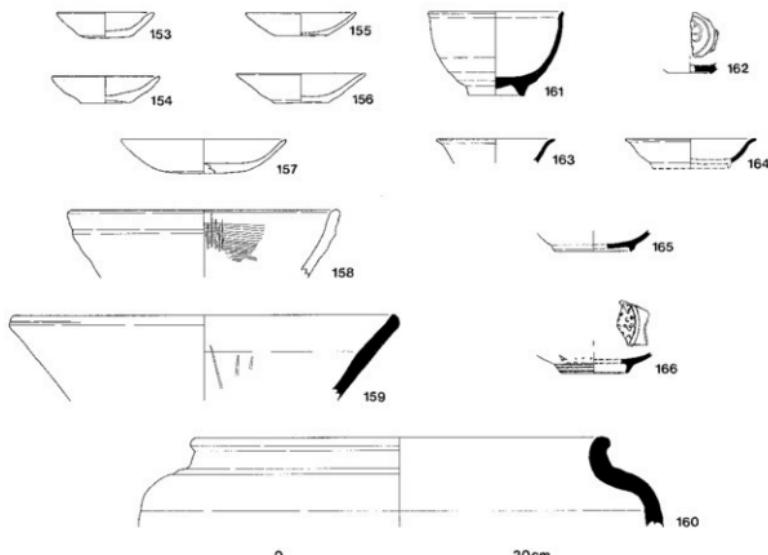


図89 包含層出土遺物

注

- (1) 岡崎正雄『中尾城跡－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告X I－』兵庫県文化財調査報告書第67冊 兵庫県教育委員会 1989年3月31日
- (2) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」V 瀬戸市歴史民俗資料館 1986年3月31日
藤澤良祐「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」「中世の城と考古学」(株)新人物往来社 1991年12月25日
- (3) 井上喜久男「美濃窯の研究（一）－十五～十六世紀の陶器生産－」「東洋陶磁」第15・16号 東洋陶磁学会 1988年8月20日
- (4) 間壁忠彦・間壁蘋子「備前焼研究ノート（2）－中世備前焼の推移－」「倉敷考古館研究集報」第2号 (財)倉敷考古館 1966年11月30日
間壁忠彦「備前焼」考古学ライブラリー60 ニュー・サイエンス社 1990年1月20日
伊藤 晃「15世紀から17世紀の備前焼」「中近世土器の基礎研究」日本中世土器研究会 1985年10月25日
- (5) 安置式一石五輪塔の地輪の高さ：幅の比が年代が下るにつれて大きくなる事については、田岡香逸・赤松秀雄・天岸正男・奥村隆彦の各氏によって既に指摘されている。

表1は兵庫県と大阪府で知られている年号が刻まれた安置式一石五輪塔の内、地輪部の法量が公表されているものの中で、手元にある資料を集計したものである。縦軸は15世紀から17世紀までを四半世紀毎に分け、横軸は地輪の高さ：幅の比を表現している。15世紀代の資料が少なく、様相が明確ではないが、資料数が増加する16世紀以降で四半世紀ごとにその第1位と第2位（表中二重線で示す）に注目すると年代が下るに従って、段階的に2.0に近づく事は明らかである。従って15世紀代ではこれとは逆に、高さ：幅の比の中心は0.99以下になる事が想像できる。

安置式一石五輪塔の地輪の高さ：幅の比が1.0を越える（高さが幅を凌駕する）のは、例外を除き、集計表を見れば明らかなように16世紀以降である。16世紀第1四半期では比0.9～1.09が大半を占め、第2四半期になると比1.10～1.19に中心が移っている。

従って、萩原城遺跡出土の安置式五輪塔はこの比率のみで判断すれば、16世紀でも前半に属す可能性が高いものと判断される。

田岡香逸「金石文資料調査記録」「西宮市史」第7巻資料編4 西宮市役所 1967年3月25日
赤松秀雄「一石五輪塔雑感（上）（下）」「史迹と美術」第431・432号 史迹美術同好会 1973年1月1日・2月1日

天岸正男・奥村隆彦「大阪金石志－石造美術」 1973年6月1日

表1 兵庫県・大阪府の一石五輪塔集計表

年代	比	0.70	0.80	0.90	1.00	1.10	1.20	1.30	1.40	1.50	1.60	1.70	1.80	1.90	2.00	2.10	2.20	2.30	計
		0.79	0.89	0.99	1.09	1.19	1.29	1.39	1.49	1.59	1.69	1.79	1.89	1.99	2.09	2.19	2.29	2.39	
1401～ 1425			2																2
1426～ 1450		2	3	1															6
1451～ 1475			3	1		2													6
1476～ 1500			1	2	2														5
1501～ 1525	1	3	9	6	2	1													22
1526～ 1550		1	1	7	20	6	1												36
1551～ 1575		1	2	11	18	19	7	3	1	1									63
1576～ 1600			3	1	15	10	31	16	11	2	1	1							91
1601～ 1625				1	4	5	6	12	12	13	17	4	3	2		1	1		81
1626～ 1650																1			1
1651～ 1675													1	1					2
1676～ 1700															2	1			3
計		3	14	20	31	62	42	51	31	25	20	6	5	2	2	3	1	318	

・石五輪塔集計表作成に当たっては下記の文献を参照した。

田岡香逸「美濃郡史料採訪」『みなぎの通信』創刊号 美濃野郷土会 1961年11月

藤原良夫「三木市内中世在銘石造遺品」『三木史談』第43号 三木郷土史の会 2000年1月20日

鈴木 武「摩耶山の石五輪塔群資料」『歴史考古学』第9号 歴史考古学研究会 1982年9月

田岡香逸「金石文資料調査記録」『西宮市史』第7巻 前掲書

田岡香逸・福沢邦夫(協力)「第2章」『尼崎市史』第10巻 尼崎市役所 1974年12月25日

田岡香逸「尼崎市円愛寺の在銘一石五輪塔」基—尼崎市史の補遺ー」『地域史研究』第9巻第1号 尼崎市立地域研究史料館 1979年6月30日

福澤邦夫「尼崎市中世石造美術の現況—阪神・淡路大震災後の調査結果ー」『地域史研究』第29巻第1号 尼崎市立地域研究史料館 1999年10月31日

田岡香逸「川西の中世石造美術」「かわにし」川西市史第7巻文化遺産編 川西市史編集専門委員会 1977年3月30日

田岡香逸・福沢邦夫「第2章第1節」『伊丹市史』第6巻 伊丹市史編纂専門委員会 1970年3月31日

田岡香逸「石造美術編」『宝塚市史』第7巻別編I (文化遺産編) 宝塚市史編集専門委員会 1980年12月10日

増田重信「別章二・三節」『御津町史』第4巻 御津町史編集専門部委員会 1999年9月30日

田岡香逸「四一」『姫路市史』第15巻中 別編文化財編1 1995年3月28日

田岡香逸「第4章石造美術」『加古川市史』第7巻別編I (民俗・文化財編) 加古川市史編さん専門委員 1985年6月15日

五色町教育委員会「五色町の石造文化財」五色町文化財資料第1集 1995年3月31日

岡本 秃「第二編第四章第七節」『一宮町史』一宮町史編集委員会 1999年12月1日

福沢邦夫「石造文化財・美術工芸品(梵鐘・鰐口)」『能勢町史』第4巻 (資料編) 能勢町史編纂委員会 1981年12月20日

藤井直正「第1章石造遺物」『寝屋川市史』第2巻 寝屋川市史編纂委員会 1993年3月
土山健史『堺市環濠都市遺跡・翁橋遺跡発掘調査報告』堺市文化財調査報告第46冊 1990年1月31日

野田芳正・張 洋一『堺市環濠都市遺跡発掘調査概要報告—堺市梅屋町東2丁20・21番地SKT359・362地点—』堺市文化財調査概要報告第31冊 堀市教育委員会 1992年3月31日

野田芳正『堺市環濠都市遺跡発掘調査概要報告—堺市材木町東1丁 SKT361地点』堺市環濠都市遺跡発掘調査概要報告第40冊 堀市教育委員会 1993年3月31日

土山健史『堺市環濠都市遺跡発掘調査概要報告』堺市文化財調査概要報告第55冊 堀市教育委員会 1996年3月31日

鶴谷和彦「第3章SKT663地点の調査」『堺市環濠都市遺跡発掘調査概要報告 平成8年度水道管布設工事に伴う立会調査』堺市文化財調査概要報告第73冊 堀市教育委員会 1998年

3月31日

小谷正樹『堺市環濠都市遺跡発掘調査概要報告—SKT655地点・戎之町西1丁30』 堺市文化財調査概要報告第77番 堺市教育委員会 1998年10月30日

梅田正之・三好慶和・南川孝司『熊取町の石造物』 熊取町教育委員会 1981年3月1日

揖河泉地域史研究会『貝塚市橋本斎場墓地遺跡の現状と踏査報告』『揖河泉』第20号 揖河泉地域史研究会 1992年5月1日

福澤邦夫『千早赤坂の石造文化財 I』 千早赤坂村文化財調査報告第4集 千早赤坂村教育委員会 1994年3月

富田好久「第9章第4節」『新修池田市史』第1巻 池田市史編纂委員会 1997年3月31日

池田市史編纂委員会『池田市史』史料編1原始・古代・中世 1967年3月31日

また、安置式と埋立式でいざれがより古い形態であるのかに關しては、まったく異なった2つの見解が提出されている。1つは藤沢典彦氏の安置式から埋立式へ主流が移っていくとする意見で、他方は木下浩良氏の埋立式（埋込式）が早期における型式であるとするものである。今回の調査では両氏の見解を検討する資料に恵まれず、両氏とも安置式と埋立式が並び行われる期間の存在を否定しているものでもないので、SK18出土の2型式の五輪塔の時期差を論じるのは避けておきたい。

藤沢典彦「第1章第4節石造遺物」『高野山発掘調査報告書』考古学研究室調査報告第3冊 (財)元興寺文化財研究所考古学研究室 1982年3月21日

木下浩良「高野山最古の在銘一石五輪塔」「史迹と美術」第557号 史迹美術同攷会 1985年8月28日

木下浩良「高野山一石五輪塔の概要について」『関西近世考古学研究』II 関西近世考古学研究会 1991年11月30日

(6) 千田嘉博「中部・近畿地方の歴状堅堀」「第3回全国城郭研究会セミナー資料」城郭談話会・中世城郭研究会 1986年 未見。

千田嘉博「中世城郭から近世城郭へ—山城の繩張り研究からー」『月刊文化財』305号 第一法規出版株式会社 1989年2月1日

多田暢久氏も「播磨における横矢掛けの使用は、永禄末から天正初年にかけて一般化するであろう。」と述べられている。

多田暢久「播磨野村城の繩張りについて」『歴史と神戸』第30巻第6号 前掲書

村田修三氏は「横矢掛け」に伴う「折れ」の導入と展開は天文・永禄期とされている。

村田修三「戦国期の城郭—山城の繩張りを中心にー」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 国立歴史民俗博物館 1985年12月20日

(7) 十河良和「堺環濠都市遺跡出土の土師質土器・炮烙について」『関西近世考古学研究』IV 関西近世考古学研究会 1996年11月9日

(8) 吉識雅仁「第5章第1節小田城関係の遺物」吉識雅仁・甲斐昭光編『小田城跡発掘調査報告書—中小河川(東条川)改修事業に伴う発掘調査報告—』兵庫県文化財調査報告第145冊

兵庫県教育委員会 1995年3月31日

- (9) 16世紀代の小柄出土例は余り管見に触れないが、兵庫県初田館跡、広島県薬師城跡や同吉川元春館跡などで検出されている。また、17世紀代以降の小柄と比較すれば、戦国時代のものは柄部の長さが10cmを越えるものがないことが判る(表2・3)。
- 小柄の大きさは、長さ三寸二分(約9.7cm)、幅約四分五厘(約1.4cm)ほどで古いものは大抵小形であるとされている。
- 桑原羊次郎『日本装劍金工史』日本文化史叢書 (株)藤森書店 1982年7月22日
- 福永醉剣『日本刀大百科事典』第2巻 雄山閣出版株式会社 1993年11月20日
- (10) 秋枝 芳・山本博利「第4章第2節遺物の検討」『加茂遺跡一小寺・太ノ前地区』姫路市文化財調査報告V 姫路市教育委員会 1975年3月31日
- (11) 佐野 元「備前窯」「六古窯の時代」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 1998年11月28日
- (12) 岡崎正雄「第5章第4節」岡崎正雄編「初田館跡-近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XIX)」兵庫県文化財調査報告書第116冊 兵庫県教育委員会 1992年3月31日

表2 各地遺跡出土の小柄柄部一覧表(16世紀代)

(法量の単位はcm)

遺跡名	法量			注	遺跡名	法量			注
	長さ	幅	厚さ			長さ	幅	厚さ	
初田館跡	9.6	1.4	0.5	(13)	吉川元春館跡	8.4	1.4	0.4	(16)
薬師城跡	8.7	1.7	0.5	(14)		8.7	1.4	0.5	(16)
吉川元春館跡	9.3	1.6	不明	(15)		8.3	1.3	0.45	(17)

- (13) 岡崎正雄「第5章第4節」岡崎正雄編「初田館跡」前掲書
- (14) 松井和幸「V遺物」渡邊昭人編『薬師城跡』広島県埋蔵文化財調査センター報告書第142集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター 1996年3月29日
- (15) 武知秀樹「IV-4-(5)金属製品類」小都 隆・尾崎光伸編『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡-第1次発掘調査概要-』中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告6 広島県教育委員会 1996年3月29日
- (16) 沢元保夫「II-3-(5)金属製品類」小都 隆・尾崎光伸編『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡-第2次発掘調査概要-』中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告7 広島県教育委員会 1997年3月31日

(17) 沢元保夫「II-4-(3) 金属製品類」小都 隆・平川孝志編『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡-第5次発掘調査概要-』中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告10 広島県教育委員会 2000年3月31日

表3 各地遺跡出土の小柄柄部一覧表 (17世紀代以降)

(法量の単位はcm)

遺跡名	法量			注	遺跡名	法量			注
	長さ	幅	厚さ			長さ	幅	厚さ	
府立城	13.6	2.1	0.6	(18)	名古屋城	10.0	1.4	不明	(23)
小倉城	11.0	1.45	0.65	(19)		9.9	1.6	不明	同上
	9.9	1.4	1.0	(20)		9.7	1.5	不明	同上
	9.8	1.5	1.0	同上		9.45	0.9	不明	(24)
	10.4	1.4	1.5	同上		9.75	1.4	不明	同上
	9.75	1.3	0.7	同上		6.95	1.25	不明	同上
	7.3	1.2	0.7	同上		10.3	1.3	不明	同上
	10.0	1.2	1.0	同上		10.0	1.5	0.5	(25)
	9.8	1.3	不明	(21)	南山伏河遺跡	9.46	1.38	0.58	(26)
名古屋城	9.8	1.6	不明	(22)	尾張藩上屋敷	9.6	1.4	0.3	(27)
	9.8	1.6	0.6	同上		9.8	1.4	0.4	同上

(18) 吉田 寛『府立城三ノ丸北口跡一大分中央警察署本部別館廈新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』大分県教育委員会 1996年3月31日

- (19) 前田義人『小倉城跡 1 - 勝山公園地下駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 1 -』北九州市埋蔵文化財調査報告書第150集 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1994年4月30日
- (20) 山手誠治「第3章第6節」川上秀秋編『小倉城御藏跡 - 小倉城跡第2地点の発掘調査報告 -』北九州市埋蔵文化財調査報告書第228集 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1999年3月31日
- (21) 高山京子『小倉城跡 V - 下屋敷跡の調査 -』北九州市埋蔵文化財調査報告書第85集 北九州市教育委員会 1999年3月31日
- (22) 小澤一弘「III - 2」梅本博志編『名古屋城三の丸遺跡 (II)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第16集 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990年3月31日
- (23) 八木佳素実「III - 3」金子健一編『名古屋城三の丸遺跡 (III)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第37集 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992年3月31日
- (24) 古橋圭子「III - 4 - 3 - (2)」松田訓編『名古屋城三の丸遺跡 (V) - 旧名古屋営林支局の調査』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第60集 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1995年3月31日
- (25) 小嶋廣也「IV - 2」小嶋廣也編『吉田城遺跡 II - 愛知県東三河事務所地点の調査 -』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第59集 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1995年3月31日
- (26) 桐木真他編『南山伏町遺跡 - 警視庁中込警察署改築に伴う緊急発掘調査報告書 -』警視庁・新宿区南山伏町遺跡調査団 1997年3月31日
- (27) 並木仁「IV - 4 - g」(財)東京都教育文化財団編『尾張藩上屋敷遺跡 III』東京都埋蔵文化財センター調査報告第53集 東京都埋蔵文化財センター 1998年3月31日

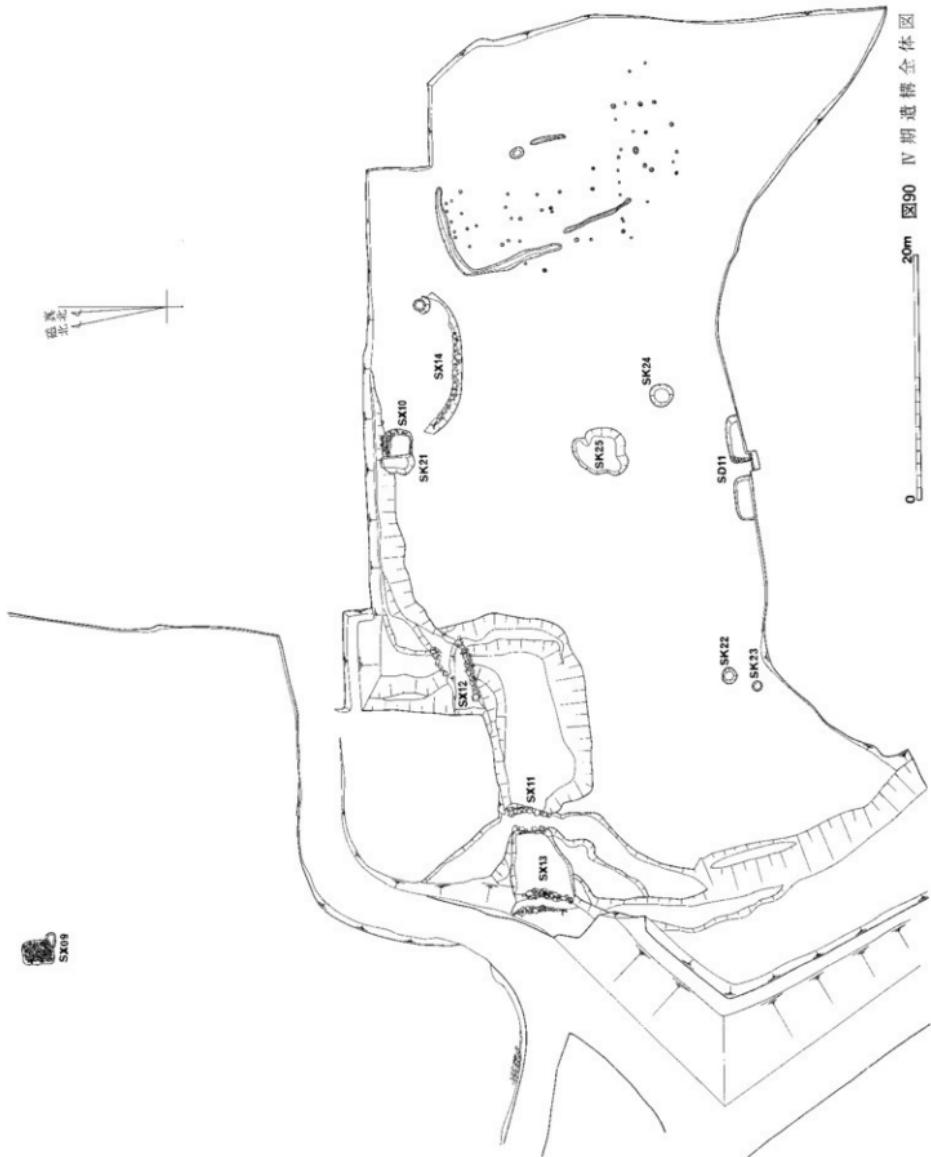
6. IV期の造構と遺物

江戸時代以降のものをIV期とした。IV期の造構には、土坑・集石土坑・石室・石橋・石垣及び溝がある。

- SK21 (図90・91) 東西の最大幅1.5m、南北2.7m、深さ0.55mの長方形土坑で、SX10を切って作られている。北端の床面近くから寛永通寶が7枚銛着した状態で検出された。墓壙の可能性がある。寛永通寶の内1枚は新寛永、1枚は背「元」の新寛永であるが、他は不明である(図92)。錢貨から1697年以降のものと判断される。
- SK22 (図90・93) 直径1.5m、深さ0.85mの円形土坑で底面から唐津片口鉢が出土した。唐津片口鉢(図94-171)は家田編⁽¹⁾のIV期(1690~1780年代)、長谷川編⁽²⁾では17世紀後半でも末頃とされるものである。底部に穿孔が1ヶ所ある。
- SK23 (図90) 直径0.75m、深さ15cmの円形土坑で底面から備前徳利形瓶の体部のみ出土した(図95-172)。体部外面の下半にハラケズリが見られる。間壁編年⁽³⁾のV期で16世紀後半に遡る可能性もあるが確定が困難で、この期に含めた。
- SK24 (図90) 長径1.0m、短径0.9m、深さ0.8mの円形土坑で、丹波壺の底部片と共に丹波すり鉢片が検出された。丹波すり鉢(図96-173)は長谷川分類のIVA類で17世紀末から18世紀中頃のものである(以下、17世紀以降の丹波すり鉢の分類と編年は同氏に従う)。

図90 IV期遺構全体図

20m



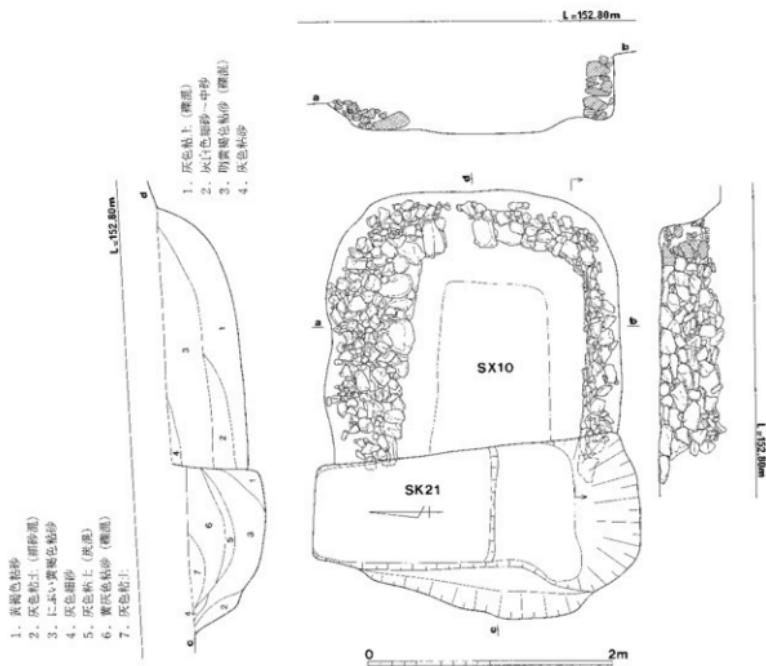


图91 SK21・SX10

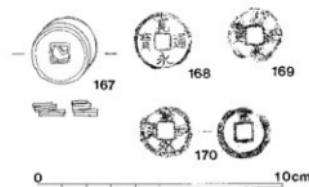


图92 SK21出土钱货

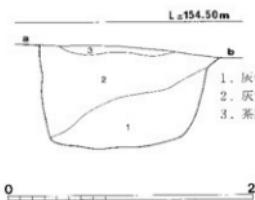
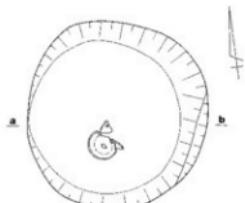


図93 SK22

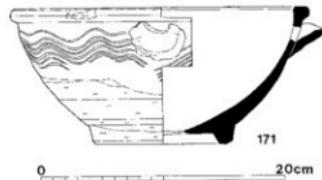


図94 SK22出土遺物

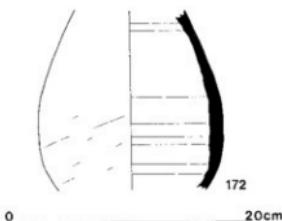


図95 SK23出土遺物

SK25 (図90) 東西1.8m、南北2.3m、深さ0.7mの不整形土坑である。土師器鍋、丹波すり鉢、肥前系磁器の紅皿と同皿が出土した(図97)。土師器鍋174は、14～15世紀代、丹波すり鉢175はa類で16世紀前半のものである。肥前系磁器の紅皿176は野上編年⁽⁴⁾で1780～1820年代、同皿177は内面蛇ノ目釉剥ぎで、二重斜格子文を描く。波佐見窯産のものとすれば、中野編年⁽⁵⁾のV-2期(1750～1770年代)である。



図96 SK24出土遺物

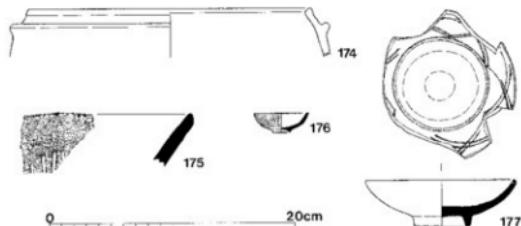


図97 SK25出土遺物

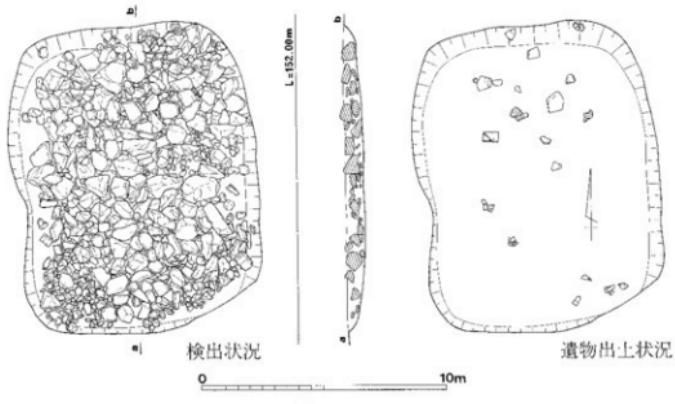


図98 SX09

SX09 (図90・97) 東西2.0m、南北2.6m、深さ15cmの集石土坑である。底面近くから丹波すり鉢、同盤、唐津皿と平瓦片が出土した(図99)。丹波盤180は17世紀代であろう。同すり鉢181は、I B 1類で17世紀中頃までもので、大坂城で文禄3(1594)年の木簡が出土したSE520出土例と同じ型式と思われる。唐津皿178・179は同一型式の溝縁皿で見込み砂目が3ヶ所残る。外面は口縁端部以下を露胎とし、高台内に兜巾を残す。盛綬年⁽⁶⁾のII期で1610~1650年代のものである。平瓦片は小片で焼し焼きされたものである。

SX10 (図90・91) 東西2.2m以上、南北2.4m、深さ0.5mの長方形土坑内に、自然石による石室を構築している。西半部は、SK21によって破壊されている。北半は後世の削平のため2段程度しか残らないが、南半は4段が残る。石室内法長は東西1.8m以上、南北1.4mである。

埋土から二重網目文の肥前系磁器碗(図100~182)、土師器小皿(同図~183)とキセルの雁首(同図~184)が出土した。磁器丸形碗は波佐見窯産とすれば、中野編年のV~2期(1750~1770年代)である。キセルは古泉編年の第6段階で、18世紀後半のものである。

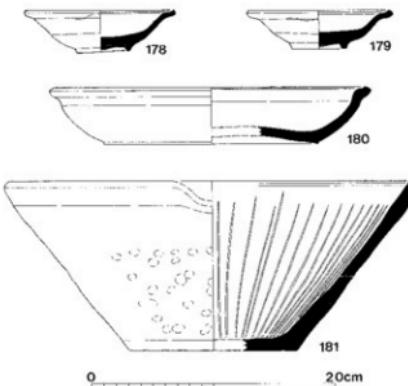


図99 SX09出土遺物

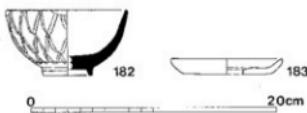


図100 SX10出土遺物

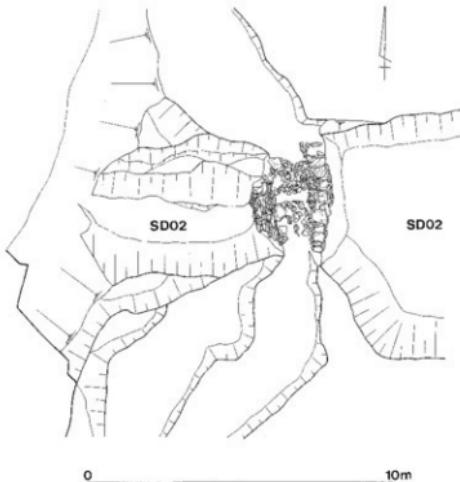


図101 SX11

SX11 (図101・102) 堀SD02がその幅を拡張する変換点に築造された、石橋である。東西幅約2.7m、南北長約3.6mである。西側と東側でSD02の深さが異なっており、そのため右垣の高さが異なる。SX11を挟んで、その西側で約2.3m、東側で約1mである。

SX11はその東側の堀が埋められた後に構築されたものと思われる。石橋の上面から京焼塊（図104-186）と丹波すり鉢（同図-187）はIV A類で17世紀末から18世紀中頃とされるものである。

SX12 (図90-103) SD02の下半部が埋まつた段階で作られた石橋である。北側の右垣が大きく崩れSD02内に落ち込んでいた。南北の幅約3m、東西の長さ約5.7m、高さ1.5mである。右垣の裏込め土から肥前系磁器の筒型湯飲み碗（図104-185）が出土した。外面は七宝文、口縁部内面に四方捺文がある。18世紀第2四半期以降のものである。

SX13 (図90) 石橋SX11の西側は、近世になって埋め立てられ、平坦面は耕作地として利用されていた事が土層観察から明らかとなった。この部分をSX13とした。造成土中の出土遺物が図105である。図7-1の繩紋土器片もここから出土した。

土師器炮烙、東播系須恵器鉢、陶器鉢、肥前系の京焼風陶器塊、肥前系磁器の紅皿、中國製染付皿と寛永通寶がある。土師器炮烙188は外面に格子タタキのある、B-II類である。東播系須恵器鉢189・190は13世紀～14世紀代のものである。陶器鉢191は外面に墨褐色釉が掛かるものであるが、時期等の詳細は不明である。京焼風陶器塊192は17世紀後半～18世紀と思われる。紅皿193は野上編年で1780～1820年代のものである。中國製染付皿194はB I群で、15世紀末から16世紀前半に位置付けられる。

寛永通寶195は、新寛永で1697年以降のものである。

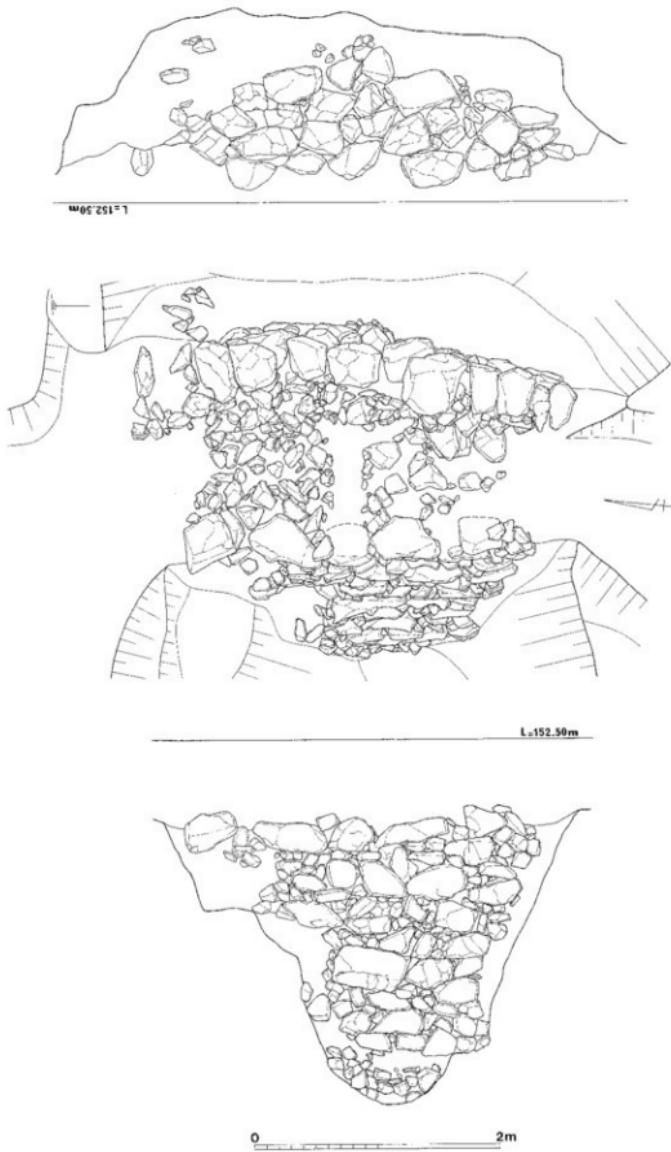
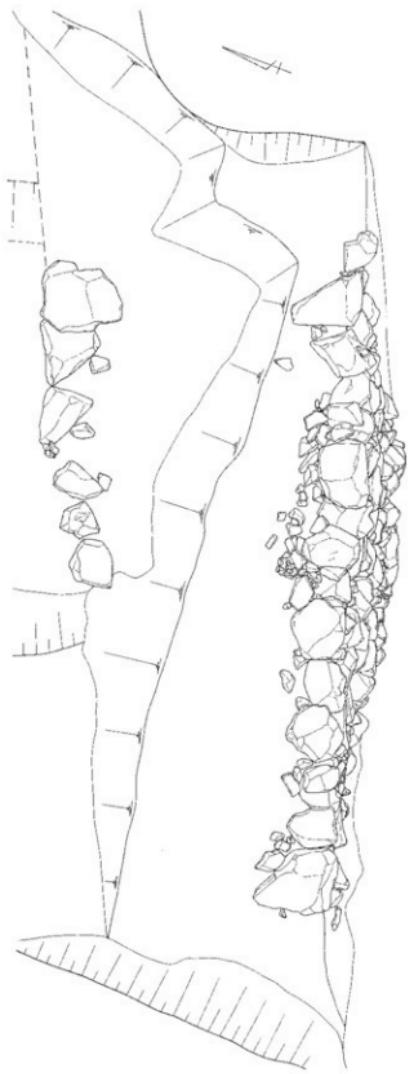


図102 SX11



1-152.40m

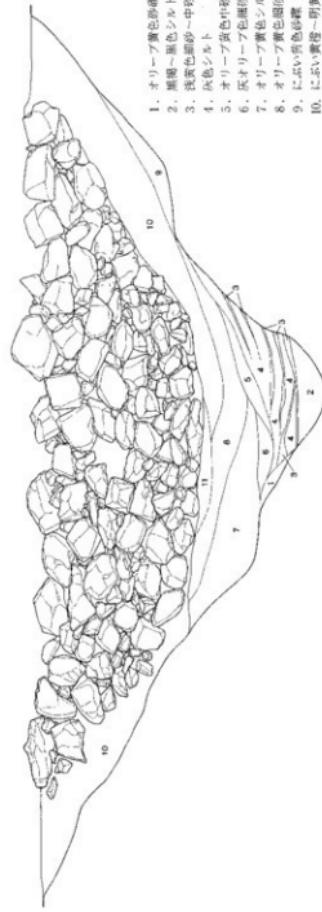


図103 SX12

0 2m

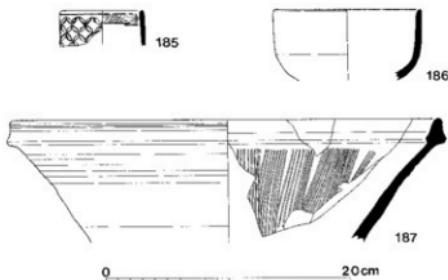


図104 SX11・12出土遺物

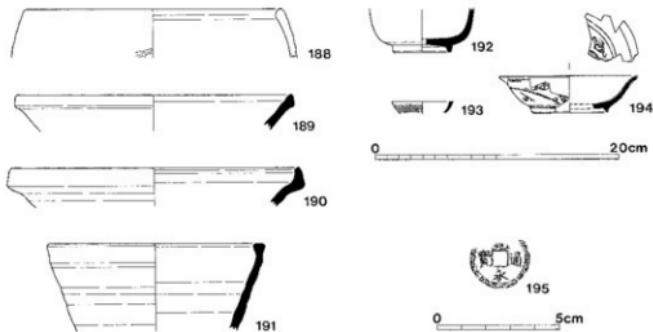
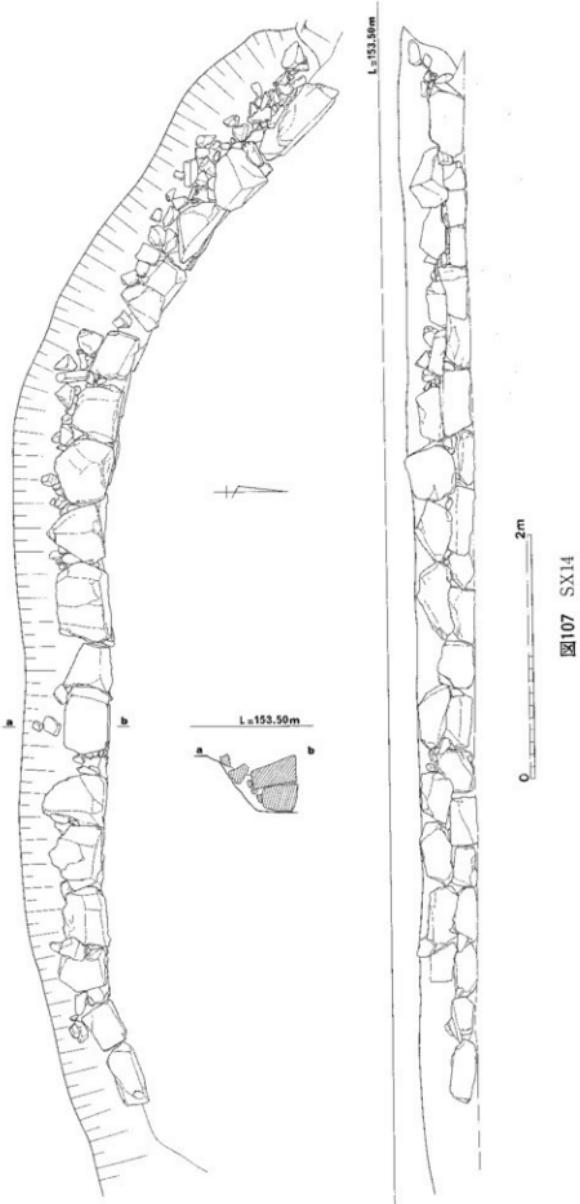


図105 SX13出土遺物

SX14 (図90・107) SD03の北側で検出した弧状の石垣である。東西の現存長8.7m、現存の高さ0.5mで2段分が残る。石垣北側の床面から、丹波すり鉢片が出土した（図106-196）。I B 2類で、17世紀中頃から17世紀末のものである。この石垣の性格は不明であるが、棚田造成に関係するものとも考えられる。



図106 SX14出土遺物



SD11 (図90・108) 本丸の周縁部には、幅約8m、高さ約3mの土塁が良好な状態で残っており、北と南の2ヶ所に開口部を設けている。現在、北側の開口部から北西方向に斜めに下つて行く細い道がある。この道を降りきって北の二の丸（K区）に出る地点の両側に掘られた溝がSD11である。東西長8.5m、南北幅1.5mである。SD11は東西に分かれその中间、幅1mが通路となっている。東の溝の西面には石垣が残る。本丸から下る小道の北面にも石垣が築かれており、その石垣とSD11との関係を把握するためにその一部を調査した。その結果、SD11内の石垣と、本丸開口部に取りつく小道の北面に見られる石垣とは一連のものであると判断された。

SD11からは肥前系磁器碗・同皿と、丹波と思われる壺の底部片などが出土した（図109）。197は外面に青磁釉を施す丸形碗で、口縁内面に四方摺文、見込に二重圓線と、コンニャク印判による退化した五弁花文がある。野上編年のIV期で1750～1780年代である。198は外面に二重網目文を描く。1680年以降のもので、おそらく18世紀後半と思われる。199は仏飯器である。外面にコンニャク印判による葦の葉様の文様がある。高台内の削り込みは浅く、無釉である。川福編年のIV期（1690～1780年代）に属する。200は内面蛇ノ目釉剥ぎで、177より崩れた二重斜格子文を描く。波佐見窯産であれば、中野編年のV-2期（1750～1770年代）である。

SD11内の石垣とそれと一体的に構築された本丸北側の石垣、及び出土遺物から考えると、二の丸と本丸を繋ぐ小道も、18世紀後半以降に何らかの手が加えられた可能性が高い。

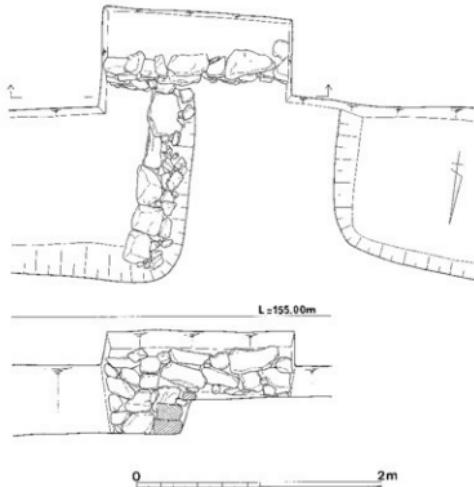


図108 SD11

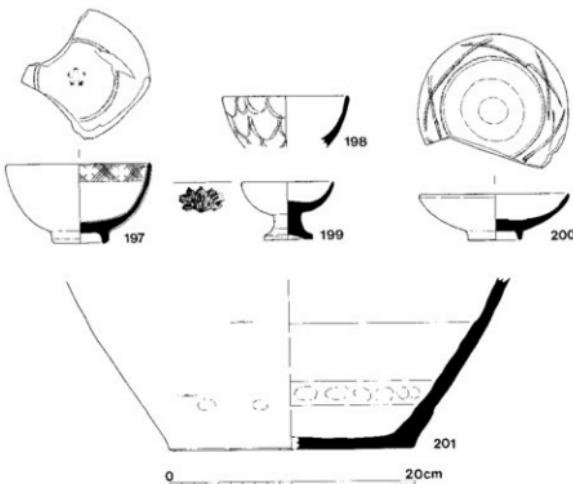


図109 SD11出土遺物

7. その他の遺構と遺物

J・K区 J・K区の東半、SD03・08・09及び10より北東部分は一段低くなっており、SX14に類似する弧状の石垣がみられ田地と判断された。旧耕作土除去後に小溝とピット、土坑を検出した。ピットはほぼ一面に分布し、横列と考えられるものは認められたが建物としては纏まらなかった。16世紀代に遡る可能性もあるが、この段状地によってSD03の東辺部が削られているものと考えられる事や、遺構に伴う遺物もないため遺構の詳細については割愛する。17世紀末以降この地区は、拳大～直径5、60cm大的多量の自然石と土砂で埋められるが、この自然石の集積部分で出土した遺物が図110でこれ以外のものが図111である。

202は瀬戸・美濃灰釉丸皿で見込みに菊文の印花がある。全面施釉で底部外面に輪トチン痕が残る。第2段階のものである。203はE群の中国製白磁皿で、小野編年で15世紀末から1573年のものである。204は丹波入り鉢で、I B 2～B 3類に属し17世紀中頃から17世紀末頃のものである。

205は加茂遺跡分類の土鍋II類、炮烙B-I類である。206は瀬戸・美濃灰釉丸皿で第2段階のものと思われる。207はE群の中国製白磁皿である。208は初期伊万里の皿で、簡略化された松と鳥と思われる文様を描く。高台付部分を釉剥ぎ処理し、沙目積みで焼成されている。野上編年のII-1期で1610～1630年代のものと考えられる。

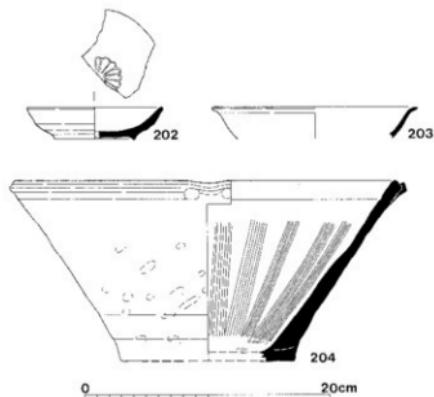


図110 K区北東部出土遺物

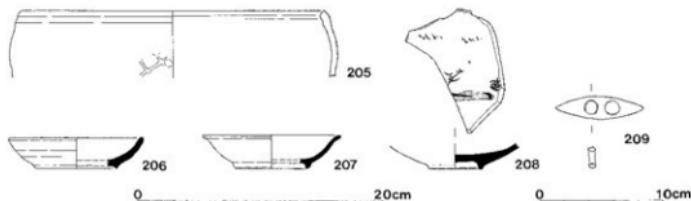


図111 K区北東部出土遺物

209は、鎧の胸板の高紐に取り付け、肩上の高紐に取り付けた責鉗が作る輪部を通して両者を連結させるための笠鉗である。長さ3.44cm、幅0.90cm、厚さ0.34cm、孔径0.49cmである。平面形は両端の尖る紡錘形で、南北朝期以後のものである。青銅製で鍍金・文様などは確認できない。笠鉗と責鉗はこれ以外に脇板と立挙、肩上と籠手や弓具の空穂蓋の連結など様々な用途があるが、その具体的な大きさの差異が報告者には不明のため鎧の付属品と考えておく。笠鉗はこの他、京都府長岡京市勝龍寺城遺跡、大阪府大阪市大坂城遺跡、同堺市堺環濠都市遺跡⁽¹²⁾、和歌山県那賀郡岩出町根来寺坊院遺跡⁽¹³⁾、福井県福井市一乗谷朝倉氏遺跡⁽¹⁴⁾、同勝山市平泉寺遺跡⁽¹⁵⁾、広島県広島市有井城遺跡⁽¹⁶⁾、鳥取県米子市尾高城遺跡⁽¹⁷⁾、福岡県北九州市小倉城遺跡⁽¹⁸⁾、千葉県光市猿本城遺跡⁽¹⁹⁾などで出土している。

図112-210は、近世以降の棚田造成土中から出土した土師器炮烙である。18世紀代の物と思われる。

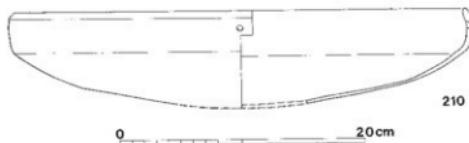


図112 K区出土遺物

M～O区　本丸西側には、東西幅約20m、南北長約250mの谷があり、本丸・南丸・二の丸地区とその西側の家臣屋敷地区を分けている。現在南半は溜池に、北半は田地になっている。田地の部分（M・N区）は耕土下に約1m～1.5mの盛土があり、南半は盛土下が地山面となっていたが、北半については更に多量の砂礫によって谷を埋めていた。

旧地形を把握する目的で、北半（M区）に3本のトレーナーを設定し調査を実施した（図46）。その結果、南端の第3トレーナーでは既に地山面に達していたことが確認されたが、第2トレーナーでは約1m掘削したが地山に達せず、第1トレーナーではL=147.8mまで掘り下げたが地山面を確認できなかった。これよりこの谷は、北端近くで急激に深くなり、おそらく横矢3の南側で開口していたものと推定される。

谷が埋められ田地になった時期については、第2トレーナーで少量の中野編年でV-1～2期と思われる肥前系磁器碗や同皿などが検出されたので18世紀以降と考えられるが、それ以前は本丸西側の堀の機能を果していたものと考えられる。

O区は後世激しい削平を受けており、明確な遺構や遺物は検出されなかったが、北辺部に地山の落ち込みが検出され、横矢3の南側の東西方向の小道の南肩部とも考えられる。

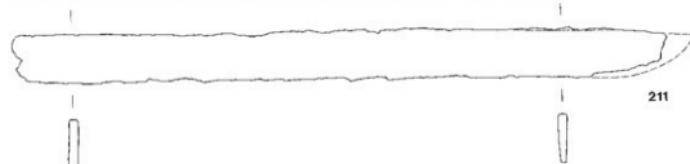


図113 金 屬 器

金属器 鉄器には刀、釘、円錐形品があり、鉛製品には鉄炮玉がある。銅製品としてはキセル、錢貨と板状品がある。これらはいずれも包含層ないし表土層中からの出土で、一部を除いて時期の決定は困難なものが多い。刀211は現存長26.7cmで柄部を欠いている。釘212~215は、全て断面が方形乃至長方形のものである。円錐形品216は用途不明で頭部中央が円形にやや窪んでいる。鉄炮玉217は直径1.19cm、重さ7.64g、218は直径1.25cm、重さ10.01gでSB14に伴う土坑から出土したものとほぼ同大である。²¹⁹ キセル219・220は古泉分類の第5~6段階で18世紀から19世紀のものである。221は北宋の「元豊通寶」で1078年の初鋳である。222は古寛永で1668年以前のものである。223~227の銅製板状品は容器の破片とも思われるが詳細不明である(図113・114)。

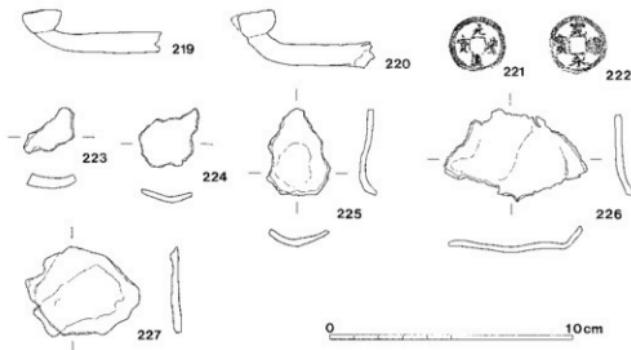


図114 金 属 器

板碑 (図115~228) 近世以降の棚田の石垣に転用されていた板碑である。高さ1.17m、最大幅0.65m、厚さ0.36mの平面三角形に近い板状の石の上半に、種子を4ヶ所彫り込んでいる。最上のものは「キリーク」、その下右が「サ」左が「サク」で阿弥陀如来・觀音菩薩・勢至菩薩の阿弥陀三尊を表現する。最下は「タラーケ」で、どの仏尊を示すか不明である。阿弥陀三尊のみの板碑は多くみられるが、それにもう一仏尊を加えるのは、県下では掛保郡御津町室津の淨運寺の阿弥陀三尊と「バイ」を刻む、曆応二年銘の板碑以外余り管見に触れない。

種子は小さく月輪がなく、彫りも浅いので室町時代のものと考えられる。

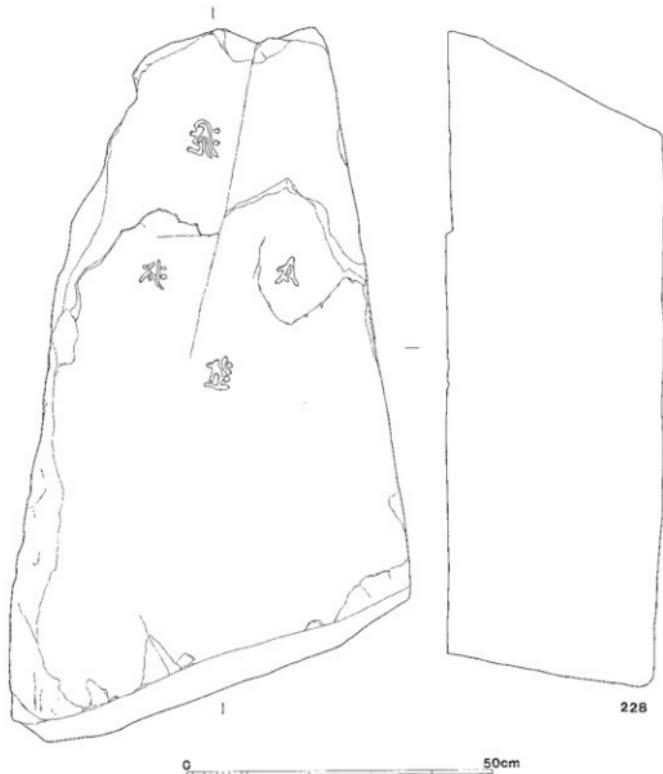


図115 板 碑

注

- (1) 家田淳一「陶器の編年2、擂鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念 九州近世陶磁学会 2000年2月11日
- (2) 長谷川眞『伊丹郷町発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第123冊 兵庫県教育委員会 1993年3月31日
- (3) 長谷川眞『伊丹郷町発掘調査報告書』 前掲書
- (4) 野上建紀「磁器の編年(色絵以外) 1. 碗・小壺・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』前掲書
- (5) 中野雄二「波佐見」『九州陶磁の編年』 前掲書
- (6) 森 敏「第Ⅲ章第7節豊臣氏大坂城期の遺構と遺物」八木久栄編『難波宮址の研究』第9 (財)大阪市文化財協会 1992年6月15日

- (7) 盛 峰雄「陶器の編年1、碗・皿」『九州陶磁の編年』 前掲書
- (8) 古泉 弘「江戸の街の出土遺物—その展望—」『季刊考古学』第13号江戸時代を掘る 雄山閣出版株式会社 1985年11月1日
キセルの編年についてはこの他、小川望「出土遺物からみた江戸の喫煙風習」「考古学と江戸文化」江戸遺跡研究会第5回大会発表要旨 江戸遺跡研究会 1992年2月1日を参照した。
- (9) 盛 峰雄「陶器の編年1、碗・皿」『九州陶磁の編年』 前掲書
- (10) 川副麻理子「磁器の編年（色絵以外）4、伝飯器・水滴・人形・灯火具・緒縛玉・戸車」『九州陶磁の編年』 前掲書
- (11) 山上八郎『日本甲冑の新研究』（株）歴史図書社 1972年11月20日
笠間良彦『日本甲冑大鑑』（株）五月書房 1987年7月31日
山岸素夫・宮崎真澄『日本甲冑の基礎知識』雄山閣出版株式会社 1990年7月20日
上記書によれば、南北町期以前は両端を切った形であるという。獸骨製ではあるが、広島県草戸千軒町遺跡SD1290出土の13世紀後半の笠鉢は、両端の切れたタイプで、これが南北町期以前の形態であることを証明している。
- 福島政文「第IV章 5 骨角製品」平林国治・岡邊洋一編『草戸千軒遺跡発掘調査報告 北部地域南部の調査』II 広島県草戸千軒遺跡調査研究所 1994年3月30日
- (12) 後に提示している「笠鉢一覧表」を参照しても知られるように、各地の遺跡から出土した笠鉢は最小長2.6cm（紐穴径0.3cm）から最大長6.3cm（紐穴径0.8cm）まで、その大きさにはかなりの差異が見られる（表4）。
- 山岸・宮崎『日本甲冑の基礎知識』前掲書によれば、「肩上と胸板をつなぐ高紐に設ける鉢は、甲冑に設ける鉢中、一般に最も大きく」く、鎌倉時代頃までは長さ4.5~5cmであったが時代が下ると小形化し、室町時代頃は長さ4cm前後となると言われている。
- 「笠鉢一覧表」中、南北町期以降の形態であるB形式についてみると、長さ2.6~3.2cmの小型、長さ3.4~4.0cmの中型、長さ5cm代の大型に分類でき、萩原城例は中型に属している。
- (13) 岩崎 誠「第3章 1勝龍寺城期の遺物」岩崎 誠編『勝龍寺城発掘調査報告』長岡京市埋蔵文化財調査報告第6集（財）長岡京市埋蔵文化財センター 1991年3月30日
- (14) （財）大阪府文化財調査研究センター『大阪府警察本部桜新築工事に伴う大阪城跡の発掘調査』 1999年11月
- (15) 鶴谷和彦「第3章」鶴谷和彦編『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告—堺市中之町東1丁SKT200地点—』堺市文化財調査概要報告第13冊 堀市教育委員会 1991年3月31日
- (16) 佐伯和也『根来寺坊院跡—広域營農園地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』和歌山県教育委員会・（財）和歌山県文化財センター 1994年3月
- (17) 「第31次調査報告」「第36次調査報告」藤原武二他編『特別史跡—乘谷朝倉氏遺跡 県道鈴江・美山線改良工事に伴なう発掘調査報告書』福井県教育委員会・福井県朝倉氏遺跡資料館 1983年3月31日
南洋一郎「III-3」吉岡泰英編『特別史跡—乘谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』III 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1990年3月31日

- 水村仲行「Ⅲ-3」佐藤 圭編『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』VI 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1997年3月31日
- (18) 宝珍伸一郎・笠松雅弘・山形裕之・中原義史『よみがえる平泉寺 中世宗教都市の発掘』特別展図録 勝山市 1994年8月12日
- (19) 稲葉瑞穂「IV遺物」稲葉瑞穂編『有井城跡発掘調査報告』(財)広島市歴史科学教育事業团調査報告書第8集 (財)広島市歴史科学教育事業團 1993年3月
- (20) 小原貴樹「IV章6」小原貴樹編『尾高城址-鳥取県米子市尾高城址発掘調査報告-』尾高城址発掘調査団・米子市教育委員会 1978年3月30日
- (21) 谷口俊治「遺物編第1章第8節」谷口俊治・川上秀秋編『小倉城跡2-勝山公園地下駐車場建設に伴う埋蔵文化財調査報告2-』北九州市埋蔵文化財調査報告書第196集 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1997年3月31日
- (22) 道澤 明『篠本城跡の調査成果』『シンポジウムよみがえる篠本城跡-戦国動乱期城郭の謎にせまる-(篠本城に見る房総の中世)』(財)東総文化財センター・光町教育委員会 1995年10月14日
- (23) なお、2つのリングが連結したような形態の貴賎は堺環濠都市遺跡、一乗谷朝倉氏遺跡、平泉寺遺跡や大分県安岐町安岐城遺跡などで検出されている。
堺環濠都市遺跡と朝倉氏遺跡第31次例が長さ1.4cm~1.6cm、1つのリングの内径が0.5cm。朝倉氏遺跡第36次例は長さ3.3cm、リングの内径は1.0cm。安岐城例は長さ2.0cm、リングの内径は0.8cmを測る。萩原城出土の中型の笠鉗の紐穴径は0.5cmで、これからすれば長さ1.4cm~1.6cmの貴賎とセットになるものと考えられる。
- 鶴谷和彦「第3章」鶴谷和彦編『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告-堺市中之町東1丁SKT200地点-』前掲書
「第31次調査報告」「第36次調査報告」藤原武二他編『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡』前掲書
- 吉岡泰英・岩田 隆「Ⅱ-3」岩田 隆編『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』V 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1995年3月31日
- 宝珍伸一郎他『よみがえる平泉寺』前掲書
- 小林昭彦「Ⅲ-2」玉永光洋・小林昭彦編『安岐城跡下原古墳 一般国道213号線安岐バイパス関係埋蔵文化財報告』大分県文化財調査報告第76号 大分県教育委員会 1988年3月
- (24) 218は戦国時代の可能性があるが、217については不明で近世以降の可能性もある。葉山植作氏によれば秀吉の刀狩りを経て江戸時代になんでも、農業生産の安定を目的に害獣の被害をさけるため、鉄炮所持は幕府取締りのもと方百姓に許されていたとされる。
- 葉山植作「鉄砲の伝来とその波紋」葉山植作編『日本の近世』4 生産の技術 中央公論社 1992年1月25日
- (25) 「金石文-石造物 摂磨揖西地区 73板碑 摂保郡御津町窪津淨運守『兵庫県史』史料編 中世4 兵庫県史編集専門委員会 1989年3月31日

表4 笠 索 一 覧 表

(法量の単位はcm)

遺跡名	法量			組穴 直径	形 式	遺跡名	法量			組穴 直径	形 式
	長さ	幅	厚さ				長さ	幅	厚さ		
勝 龍 寺	2.9	0.8	0.2	0.4	B	一乘谷朝倉氏	3.0	0.9	0.3	0.5	B
堺環濠都市	2.6	0.8	0.4	0.3	B		6.3	1.8	0.6	0.8	A
	2.8	0.9	0.5	0.4	B		5.2	1.5	0.5	0.7	B
	2.8	0.9	0.4	0.4	B		4.0	1.0	0.4	0.5	B
	3.2	1.2	0.4	0.5	B		2.9	0.9	0.6	0.5	A
	3.8	1.0	0.5	0.6	B		(3.7)	1.1	0.3	0.6	(B)
根 来 寺	2.9	0.9	0.7	0.3	B	小 倉 城	2.6	1.0	0.2	0.4	B
尾 高 城	3.9	0.9	0.5	0.4	B		2.6	1.0	0.4	0.4	B
篠 本 城	3.5	1.0	0.4	0.4	A		4.0	1.1	0.4	0.5	B
草 戸 千 斬	3.9	1.1	0.6	0.6	A		4.0	1.1	0.2	0.5	B

※() は欠損。

※両端の切れるタイプをA。両端が尖るタイプをBとした。

※草戸千軒例は角骨器。

※各法量には報告書掲載図から計測したものがあるので、多少の誤差が含まれる。

IV. まとめ

平成5年から7年に亘る発掘調査の結果、萩原城遺跡は绳文時代から江戸時代に及ぶ遺跡であることが確認できた。绳文時代を除き12世紀末から16世紀までの長期に及ぶ遺跡の存続期間の中で、城としての性格を持ったと判断されるⅢ期の造構の具体的な変遷過程について以下記述を試み、今回の調査のまとめとしたい。

既述のとおり、Ⅲ期は出土遺物から判断して大きく前半のⅢa期と、後半のⅢb期に細分したが、Ⅲa期の造構には掘立柱建物と土坑があるだけで、城の性格は認められない。よって考察の中心はⅢb期という事になる。ただ、城の機能を表現するものとしては曲輪・堀や虎口などがあるが、この内、虎口については後述するように不明確な点が残っているし、萩原城は残存状態の非常に良好な「本丸」で知られているが、今回の調査ではこの本丸部分に関して何らの発掘も実施しておらず、その築造時期を決定する材料を欠いている。従って、今回検出した造構のなかで確実に城郭の機能を表現するものは堀であり、堀の掘削時期と順序を確定することが、城の築造時期と変遷過程を明らかにするものと考えた。

以下、堀の殆どが属すⅢb期に焦点を絞って検討を加える。

1. 文献史料からみた萩原城築造の契機

まず、堀の掘削・変遷過程を明らかにする前に、萩原城が位置する淡河地域に関する文献史料をできるかぎり列挙し、遺跡を取り巻く環境と築城の背景を確認した上で造構・遺物の考察に進みたい。

1. 淡河荘、仁平年（1151～54）中、金峯山道圓寺領となる⁽¹⁾。

「金峯山古今簽跡記曰、一、當山勅願寺之事、道圓寺、仁平中建立、寄附播磨國淡河荘、」「美濃郡淡河荘」「莊園志料」上巻

2. 石峯寺、安元年（1175～76）中、神田谷を寄進される⁽²⁾。

「岩峯寺衆徒等申、一分給入位田慶三郎背安元寄進状、令押妨當寺領神田谷云々、（中略）建武元年後十月廿八日 大欽助政守（か）在判 位田慶三郎殿」「徵考錄」

3. 承久4（1222）年、右近將監成正、淡河荘預所となる。但し当時の領家は不明⁽³⁾。

「下播磨國淡河御庄内 石峯寺 奉免御庄家使者可留乱入事 右奉免志者且本家先法限之奉免 下文顯然也、（中略）承久四年二月 日 預所右近將監成正（花押）」「徵考錄」

4. 建長元（1249）年、平某、淡河荘預所兼地頭代となる⁽⁴⁾。

「奉免 石峯寺本尊地藏薩埵御寄進田万難役事 右早任衆徒訴狀之旨奉免之畢、（中略）建長元年六月 日 預所兼地頭代平（花押）」「徵考錄」

5. 弘安元（1281）年2月、領主平時俊、西大寺僧証尊が石峯寺にて菩薩戒を授けた時、領内の殺生禁断を行う⁽⁵⁾。

「廿八日。著播磨岩峯寺。廿九日。講始十重行布薩。三月四日。於本堂。一千八百五人授菩薩戒。捧禁斷殺生等之狀。一通。領主平時俊状。一通代官等状。領内東西三里許。南北廿四五町云々。五日。於同所。七十七人授菩薩戒。六日。堂供養。中法會。」『金剛佛子証尊感身學正記』下

6. 正應2（1289）年8月22日、栗河殿の女房、一遍から最後の念佛札を授かる。⁽⁶⁾

「同日播磨栗河殿云入女房參而。奉受爲限侍。凡十五年之間。入目録人數。二十五億一千七百廿四人也。」『一遍上人繪詞傳直談鈔』卷之13

7. この頃、摂津国山田荘と播磨国淡河荘との間で境相論おこる。両荘ともに武家領のため、六波羅に訴え出る。⁽⁷⁾

「兼事不候之間、久閑乍候、(中略)抑當社領摂津國山田荘□(与か)播磨國淡河荘界相論并喧嘩沙汰候、阿庄共、依為武家所□(属か)、於六波羅、雖致沙汰候、山田庄ハ撰□(州か)北端、淡河庄ハ播州南端にて候□□、」「降惠書状」『勘仲記（兼仲御記）弘安元年（1278）十月～十二月記紙背文書』

8. 元弘元年（1331）、淡河右京亮時治、越前大野郡牛原で自殺する。⁽⁸⁾

「さる程に、北国の探題淡河右京亮時治、京都の合戦の最中、北国の蜂起を静めんがために、越前国に下って、大野郡牛原といふ所にぞ御座しける。」「北国探題淡河殿自害の事」『太平記』卷11

「時治 佐介四郎右京進 牛ガ原ニテ自害」『北條系図』

「北条時房の子時盛は佐介氏を称したが、その子時治は播磨国美義郡淡河荘を領して淡河氏を称した。「一遍聖絵」にみえる一遍から最後の念佛札を授かった〈淡河殿と申す女房〉は時治の妻女らしく、(以下略) 石田善人」「淡河氏」「兵庫大百科辞典」

9. 建武2年（1335）、位田慶三郎の押妨を止めるため、石峯寺に大炊助の執造状が与えられる。⁽⁹⁾
「岩峯寺衆徒等申、一分給人位田慶三郎背安元寄進状、令押妨當寺領神田谷云々、(中略)建武武年後十月廿八日 大炊助政守(カ) 在判 位田慶三郎殿」『徵考錄』

10. 南北朝の初め頃、南朝方の金谷経氏が近隣の山田庄丹生山に布陣したので、淡河氏もこれに呼応した。そのため、淡河・石峯寺などが戦場となつた。⁽¹⁰⁾

「金谷治部大輔経氏は播磨國の東条より起つて、吉川・高田が勢を付けて、丹生の山に城郭を構へ、山陰の中道を支え塞ぐ。」「春宮柳營官禁殺の事」『太平記』卷19

「□龜菊丸代岸田少輔房隆覺串軍忠事、右去月三日聴向東條之城、(中略)令焼拂城内、同七日於淡河荘、□(致)合戦之忠勤畢、(中略)建武三年九月八日 中原助兼(裏判) 進上 御奉行所

承候了（花押）」「辻文書」

「自安 鳥津周防五郎三郎忠兼軍忠事 右忠兼、去九月五日馳向播州下端（明石郡）之城郭、致至極合戰、（中略）今月廿日於丹生山合戰、（中略）建武三年十月 日 承候訖、（花押）（赤松則村）」「島津忠兼軍忠狀」「越前島津家文書」

「鳥津周防三郎左衛門尉忠兼軍忠事 播磨國為山田丹生寺御敵對治、大將軍御發向之間、今年七月十三日馳參志染軍陣、同八月（中略）同廿九日赤松律師坊相共破却淡河・岩峯・三田城、九月一日於櫛谷城數鷹合戰之狀、（中略）曆心二年十月九日」「島津忠兼軍忠狀」「越前島津家文書」

「播磨國広嶺山肥塚六郎範重申軍忠之事、去四月二日、折津國丹生山田丹生寺之凶徒御退治、左馬頭殿（足利直義）屬御手、尽軍忠（中略）曆心三年四月、賜御証判」「肥塚範重軍忠状案」「広峯神社文書」

11. 兴國2年（1341）、寺領安堵に関する後村上天皇の諭旨が石峯寺に与えられる⁽¹¹⁾。

「當寺領神田谷等知行不可有相違者 天氣如此、悉之、以状、興國二年十一月廿五日 右中將（花押） 岩峯寺衆徒等中」「後村上天皇諭旨」「石峯寺文書」

12. 康永3年（1344）、平政氏石峯寺に制札を下す⁽¹²⁾。

「禁制 條々事 岩峯寺 一不可取寺領池魚事（中略）一可任寺領御寄進等先例事（中略）康永三年甲申卯月十六日 平政氏（花押）」「平政氏禁制」「石峯寺文書」

13. 観応元年（1350）、赤松円心死去に伴い足利尊氏、赤松範資に淡河荘内下村を含む所領安堵状を下す⁽¹³⁾。

「御判（尊氏）下 赤松美作權守範資 可令早領知播磨国佐用庄内赤松上村・三川村、（中略）同国淡河庄内下村、（中略）右、以亡父円心遣領、連枝等、各所支配也者、（中略）觀応元年十二月五日」「足利尊氏袖判下文案」「森川文書」

14. 文和2年（1353）、平政氏、石峯寺に淡河荘内野世村の水田を寄進する⁽¹⁴⁾。

「奉寄進 石峯寺人般若經料足田畠 淡河庄野世村内（中略）跡事、（中略）文和貳年癸巳二月一日 遠江守平（花押）（政氏）」「平政氏田畠寄進状」「石峯寺文書」

15. 永和元年（1375）、淡河政宗、石峯寺本尊地蔵菩薩を造顕する⁽¹⁵⁾。

「覺阿弥陀仏淡河達江入道政宗之口 六十五才 永和元年乙卯五月三日 播州石峯寺」「本堂地蔵菩薩胎内銘」「重要文化財石峯寺薬師堂修理工事報告書」

16. 永和3年（1377）、駿河守、石峯寺に淡河荘内北畠内の土地を寄進する⁽¹⁶⁾。

「奉寄進 石峯寺西金堂常行三昧堂僧膳米料足田事 合壹段（中略）北畠内（中略）永和三年丁巳十二月 日 駿河守（花押）」「駿河守田地寄進状」「石峯寺文書」

17. 応永33年（1426）、淡河莊や八多莊屏風村などが攝津國山田莊との間で違乱・押領の事件を起こした。
 「六条八幡宮領攝津國山田庄堺事、去応永五年四月十一日御下知状分明也、(中略)同國八多庄屏風村、押部・淡河地下人等令押領云々、太不可然、(中略)応永卅三年八月十三日 在御判(足利義持) 右京大夫入道殿(細川満元)」「足利義持御判御教書案」「醍醐守文書」
18. 嘉吉元年（1441）、嘉吉の乱起こる。文安2年（1445）有馬持家と細川勝元との間で合戦が起こる。
 「廿四日、(中略)今夕有前代未聞珍事、赤松彦次郎教康、(以下、削注略)依諸敵御退治嘉礼成申渡御、近日人、有此經營之故也、末斜、室町殿渡御彼宿所、諸大名御相伴在其其席、猿樂三番、並酌五獻之時分、開御座後障子、着甲冑武者數十人亂入之、奉弑之、」「嘉吉元年六月条」「建内記」
 「廿八、、山名殿播州へ下向、百四十二騎、」「文安元年11月条」「東寺執行日記」
 「廿一、、播州合戰了、」「文安2年正月20日条」「東寺執行日記」
 「同、(24日)、於有馬郡、丹波勢ト合戦、有馬方三百七十人被打之、」「文安2年3月24日条」「東寺執行日記」
19. 嘉吉の乱後、当地は山名氏の支配下になる。山名持豊、文安元年（1444）石峯寺に制札を下し、教豈文安3年（1446）同寺の寺領を安堵する。
 「禁制 石峯寺 右軍勢甲乙人等乱妨狼藉事所令停止也、若有違犯之輩者可處罪科之、如件、文安元年十月日（花押）」「守護制札」「石峯寺文書」
 「播磨國三木郡岩峯寺事、為祈願守早速再興於堂舍長日可被致懇祈、仍當知行之地不可有相違狀如件、文安三年十月五日彈正少弼（花押）當寺衆徒中」「徵考錄」
20. 応仁元年（1467）赤松政則、播磨国の支配を回復し、龍野城主政秀石峯寺に兵糧米免除の執達状を与える。
 「栗河庄 積父寺兵糧米諸御公事以下令免除者也、仍執達如件、應仁元 十一月廿七日 政秀（花押） 積父寺守僧」「赤松政秀奉書」「石峯守文書」
21. 康正元年～2年（1455・56）、淡河莊と攝津國山田莊で争論起こる。
 「目安 播州淡河庄御百姓等諫言上 右子織者、当庄之内三津田村ニ作和谷と申山候、(中略)昔より今ニ至まで、三津田村之知行無相違候處ニ、近年山田の庄より、おさみて山木をきり取候間、法ニまかせて、(中略)粗謹言上 康正元年九月 日 播州淡河庄御百姓等 進上 御奉行所」「播磨國淡河莊百姓等申状案」「醍醐守文書」
 「辨証文(難裏書) 摄津国丹生山田与播州三木郡三田村山境相論事、(中略)康正二 四月十日 道円（花押）(郡司田原入道) 進藤安芸守殿」「田原道円奉書」「醍醐寺文書」

22. 文明6年（1474）、淡川越後守、石峯寺に臨時課役を課したため僧離山する。播磨守護赤松政則の守護代浦上則宗、帰山を命じる。
 「播州三木郡岩峯寺事、為勅願所代々御判明鏡候處、淡川越後守方毎々依相懸臨時課役、既寺僧等悉退散云々言語道断次第也、所詮早可歸住旨可有成敗、（中略）文明六 三月五日 則宗（花押）浦上美作守殿也 下野守殿」『徵考錄』
23. 文明14年（1482）、平（淡河）政盛、石峯寺に土地を寄進する。
 「宛御管絃講田之事 合肆拾刈壹段者（中略）右彼下地者石峯寺為管絃講田、限永代宛行處実也、此下地者上山四郎大夫誰為名田内、以別儀寄進いたすなり、（中略）文明十四年十二月廿五日 平政盛（花押）淡川殿也」『徵考錄』
24. 別所氏美養郡で勢力を持つ。淡河弥次郎、文明頃、別所氏に属する。
 「岩峯寺諸公事以下、自堅承事候之間、捐置申候、巨細面拜之時可令申候、恐々謙言 十一月廿八日 則治（花押）淡河弥次郎殿 御陣所」『徵考錄』
25. 永正元年（1504）、淡河村範生まれる。
 「村範 淡河彈正 三木郡淡河城主 永正元年生 永錄六年死ス六十歳 江見又次郎祐春舞」『赤松諸家大系図』
26. 天文2年（1533）、有馬則頼生まれる。
 「天文二亥巳誕生、播州三木郡淡河城主」、「御家系譜」「米府紀事略」卷之17
 「重則廿三歳時大永三年生。（中略）則頼ハ生播州満田城及壯年鑿同國淡川ノ城移住ス」『赤松諸家大系図』
27. 天文4年（1535）、淡河定範生まれる。
 「定範 淡河彈正 天文四年生淡河城二代相続也 別所長治執権ナリ」『赤松諸家大系図』
28. 正親町院（1557～85）頃、淡河弥三郎、別所村治（就治）に属する。
 「岩峯寺諸役以下事、承儀候間闇申候、恐々謙言、九月廿九日 村治（花押） 淡川弥三郎殿 御宿所」『徵考錄』
29. 天文23年（1554）9月1日、別所・淡河両氏と有馬氏との間で軋轢が生じ、有馬重則は三好長慶に助けを求める。
 「八月廿九日に有馬殿爲合力。長慶より三好日向守大將にて攝津國衆播州へ打立。九月一日に合戦あり。三好方打勝て三木の別所方の城城七ツ落也。然ば九月十二日歸陣也。」『細川兩家記』
 「天文廿三年（中略）同八月播州三木ノ別所ノ城主冷泉家三木次郎殿ト有間原（源）カ二部度々合戦アリ三好日向守政康大將ニテ播州上下者引率有馬方爲合力播州工打立九月一日合戦アリ三木方打負籠城ス日向守九月十二日歸陣也」『丹州播州エ三好勢造之事』『足利季世記』卷5

30. 永祿 8 年（1565）5 月 19 日、將軍足利義輝、三好義継・松永久秀に弑せられる。將軍の警備についていた有馬重則も打死する。

「十九日、（中略）辰刻ニ好人數松永右衛門佐等、以一萬計殺武家御所ヘ亂入取卷之、戰暫云々、奉公衆數多討死云々、大樹牛初點御生害云々、不可説不可説、先代未聞儀也、（中略）討死人數大樹、鹿苑寺殿、慶壽院殿、（中略）有馬源次郎、」『五月小』『吉繼卿記』

31. 元亀元年（1570）8 月 27 日、有馬則頼、三好衆に対するため信長方に加わり摂津国の中島内天満森に陣取る。別所氏も信長方に加わる。

「去程ニ四國ノ逆徒野田福島へ出張ノ由注進類り成ケレハ信長承リ（中略）有馬源一郎殿和泉衆以下悉ク信長エ馳加リ中島内天満森エ陣取ル此有様ヲ見テ同八月廿日ニ三好下野守弟爲二入道ハ野田城ヨリ降参シテ信長ノ手ニ加ハリケル（中略）四日播州三木ノ別所孫右衛門尉百四十騎ニテ尼崎ヨリ信長方ニ成テ天王寺ノ勢ニ加ハリケル」「野田福島合戦之事」『足利季世記』卷 8

「一信長一味方廿七日に三好左京大夫殿。同松永山城守。（中略）有馬。畠山。和泉の國衆の輩の勢。中嶋の内天満森へ悉く陣取由候也。（中略）一同四日に播州三木別所孫右衛門。百五十計にて尼崎より出。信長へ一味にて天王寺へ被越由候也。」『細川兩家記』

32. 天正 5 年（1577）4 月 23 日、毛利氏軍、守喜多直家等と共に播磨寧津に着陣する。三木、明石、高砂の諸氏、毛利氏に与する。

「尔來御無音之条、被成下 御内書候、（中略）雖然、如令兼約候、此擧之儀、去十六日令出張、近日至播州攻撃越候、其表之儀、急度至越江御亂入肝心候、不可有御油斷候、（中略）（天正五年）卯月朔日 右馬頭輝元（花押）謹上 上杉彈正少弼入道殿」「毛利輝元書状」「上杉家文書之二」

「就御行之儀、御手合段、度、被仰出候、定而可爲參着候、仍去廿三日、至播州寧津兵船悉被差上候、陸路之儀者、始守喜多、其外中國軍士出張候、（中略）（天正五年）卯月廿八日（一色）昭秀（眞木鶴）昭光 河田豊前守殿 繁坂清介殿」「眞木鶴昭光・一色昭秀連署奉書」『歴代古案』第 1

33. 天正 6 年（1578）2 月 23 日、羽柴秀吉播磨書写山に陣する。別所長治、毛利氏に通じて挙兵する。

「戊寅二月廿三日、羽柴筑前守秀吉、播州へ相勧く。別所与力、嘉吉川の賀須屋内膳の城を借り、羽柴筑前人数入れ置き、秀吉は書写山に取り上り、要害を構え、居陣なり。然る間、別所小三郎存分を申し立て、三木城へ権能るなり。」「磯野丹波・磯貝新右衛門の事」『信長公記』卷 11

「其表着陳（津）由、誠忠節之段感悦候、今度三木以下引付味方之間、彌入精、輝元隆景相談無油斷、急度至播州、（中略）（天正六年）三月十九日（花押）（義継）吉川駿河守とのへ」「足利義昭御内書」『吉川家文書之一』

34. 天正 6 年（1578）3 月 7 日、羽柴秀吉播磨下向。有馬則頼、現三木市久留美慈眼寺山上に陣する。

「秀吉都を立玉ふは天正六年三月四日軍勢七千五百騎 同月七日に播州に下向し玉ふ（中略）三木城寄衆次第 天正六年三月上旬（中略）一同村（久留美村）慈眼寺山上一本松ノ所ニ 有馬法印」「三木郡古城跡」「播磨鑑」

35. 天正 6 年（1578）3 月 29 日、羽柴秀吉、石峯寺に禁制を下す。

「禁制 石峯寺 一軍勢甲乙人乱妨狼藉事 一放火事 一伐採竹木事 右条々堅令停止訖、若於違犯輩者、速可處罪科者也仍如件、天正六 三月廿九日 筑前守（花押）（秀吉）」「徵考錄」

36. 天正 6 年（1578）8 月 15 日、羽柴秀吉、道場川原（現神戸市北区道場町）と三本松（同北区八多町屏風）に付城を築く。

「羽柴筑前守に相加へ、佐久間、惟任、筒井順慶、播州へ差し遣はされ、有馬郡の御敵さんだの城へ差し向かひ、道場河原・三本松、二ヶ所足懸かり拵へ、羽柴筑前守秀吉、人数入れ置き、是より摂州へ相働き、別所居城、三木への取出城へ兵糧・鉄炮・玉薬・普請等申し付け、帰陣候なり。」「丹波国波多野館取り巻くの事」「信長公記」卷11

37. 天正 6 年（1578）10 月頃、淡河定範、摂津国丹生山に陣する。

「なおも丹生山に取出を構え淡河彈正、同新三郎尉人数二千余桶能り、志染川より南方敵地に候なり。屯所小屋を相掛け長陣の覺悟仕り候。」「播州三木城責めの事」「武功夜話」卷 8

38. 天正 7 年（1579）4 月 30 日、淡河城攻撃のための付城を築く。

「四月廿八日、有馬郡まで、中将信忠卿御馬入れられ、是れより直ちに野瀬郡へ御働き、耕作廢ぎ捨て、四月廿九日、古池田まで御帰陣。（中略）次の日、岐阜に至りて御帰城。越前衆、惟住五郎左衛門、御敵城おうごうの城へ差し向かひ、御取出申し付け、古池田へ帰陣候て、様子言上のところ、越前衆御暇下され、帰國候なり。」「二条殿、烏丸殿、菊庭殿、山科左衛門督殿、嵯峨策彦、武藤弥平衛、病死の事」「信長公記」卷12

「先淡河彈正城へ御取扱、秀吉公御下知、東西南三所付城被仰付、西の付城には杉原七郎左衛門、東長松寺之上なる附城ニハ有馬法印様、南の附城には浅野彈正様、此三ヶ所何れも山の高ミより城内を見下し、段、仕寄を被附、依之淡河彈正助不及防戦、夜中に堀にはしこ材木等渡し、其上豈など敷せ、忍ひ出、三木の城に一所につほミ、」「元禄十四巳年四月廿五日 播州ニ雨森伝兵衛罷越候節之覚書」「米府紀事略」卷 1

39. 天正 7 年（1579）5 月 26 日、淡河城落城し、淡河定範、三木へ逃れる。

「五月廿五日、夜中、羽柴筑前守秀吉、播州海藏寺の取出へ忍び入り、乗っ取り候。これに依つて、次の日、並びおふごうの城も明け退くなり。」「同上」「信長公記」卷12

「当方表別所に構え海手路次を塞ぎ候べく取り詰め候。城内兵糧の蓄え、次第に事欠き手弱に相成り候。霜月頃には是非とも責め落し討ち果すべく、舍弟小一郎、蜂彦右先懸け、攝津守の付城一塞ぎ、丹生山、海竜寺、御ふいの城取り押さえ候(中略)(天正七年)六月十一日 筑前御判 前野将右衛門どのへ」「羽柴筑前守より丹波陣中の前野長康に宛てたる手紙の事」「武功夜話」卷8

40. 天正7年(1579)6月28日、秀吉、淡川市庭に制札を下す。⁽⁴⁰⁾

「徒条々 淡川市庭 一當市毎月五日・十日・十五日・廿日・廿五日・晦日之事、一らくいちたるしやうはい(中略)一はたこ錢、たひ人あつらへ次第たるへき事、(中略)天正七年六月廿八日 秀吉御判」「村上正弥家文書」18番

41. 天正7年(1579)9月10日、大村合戦で淡河弾正定範卒し、淡河氏滅ぶ。⁽⁴¹⁾

「爰ニ淡河弾正ハ今日ノ軍ニ手痛ク當ケル故主從五騎ニ打ナサレ。我身モ深手負。(中略)敵ノ首ヲ面々ノ膝ノ上ニ抱腹切タリ。名譽ノ打死也。」「大村合戦」「別所長治記」

42. 天正8年(1580)正月17日、別所長治、三木城にて自害する。⁽⁴²⁾

「十七日 早天ニ簾中ニ入給ヘバ。(中略)是ヲ見テ長治モ三歳ノ男子引寄一刀ニ刺殺シ。(中略)長治。友之此出ヲ聞給。心闇ニ生害アリケルヲ。三宅治忠後ヘ參介錯仕。」「長治。友之自害」「別所長治記」

43. 天正10年(1582)8月28日、秀吉、有馬則頼に淡川谷3260石を与える。⁽⁴³⁾

「三木郡之内、淡川谷三千戸百六拾石進之候、全可有領知候、恐々謹言 天正十 八月廿八日 筑前守 秀吉(花押) 有馬中務入道殿」「有馬文書」

44. 天正13年(1585)9月16日、秀吉、有馬則頼に計4550石を与える。⁽⁴⁴⁾

「就播州三木郡内三千戸百石、河尻内三百石、為加増播磨東郡中田原村千五十石、都合四千五百五十石、相添目録別番、令扶助畢、全可領知者也。天正拾三 九月十六日(花押)(羽柴秀吉)有馬中務入道殿」「羽柴秀吉領知判物」「有馬文書」

45. 天正15年(1587)3月1日、有馬則頼、秀吉に従い九州へ出陣する。⁽⁴⁵⁾

「天正十五(中略)三月朔日、秀吉公九州御進發之御、諸士出陣日限人數之事、(中略)前備(中略)百五十 有馬刑部卿法印」「當代記」卷2

46. 文禄元年(1592)、有馬則頼、子の豊氏と共に文禄の役に出陣する。⁽⁴⁶⁾

「然間、小西に与力せし宍岐侍従、有馬刑部卿法印、木村新八郎、(中略)其勢二万余騎、小西が要害を大將陣と定め、真中になし、六ヶ所の要害を構えたり。」「小西於平安道振猛威事」「太閤記」卷15

47. 文禄3年頃の有馬則頼の知行高、1万石となる。⁽⁴⁷⁾
 「文禄三甲午、自春伏見普請として、日本國之衆上洛、(中略)惟時伏見普請役之帳(中略)三萬五千斛 有馬玄蕃(中略)壹萬石 有馬法印」『當代記』卷2
48. 文禄4年(1595)、有馬豊氏、遠江横須賀3万石を秀吉から与えられる。⁽⁴⁸⁾
 「是迄御折番祝著之至候、横須賀御拜領之由承候間、(中略)七月廿日 家康(花押) 有馬玄蕃(豊氏)頭殿」『舊文書』
49. 慶長4年(1599)、有馬則頼、伊達政宗より家康に対する褒美を受け取る。⁽⁴⁹⁾
 「敬白(起假か)請文前書之事 一内府(家康)へ惣別御用之儀、頼入付而、虚意表裏毛頭有間敷事(中略)…自勿論無ニ無三内府公江申合候間、(中略)一筋ニ内府御手前を守り、可奉一命候(中略)卯月五日 羽柴大崎少將(伊達)政宗 血判 有馬中書(則頼)殿(今井)宗薰老」『伊達政宗記録事蹟考記』14
50. 慶長6年(1601)、有馬則頼、有馬郡三田城に居住する。⁽⁵⁰⁾
 「三成誅罰の後、本領攝津国・有馬郡の内二万石をくハヘ給ハリて、同郡三田城に住す。」『寛永諸家系図傳』第13
 「六年正月十八日舊領攝津國・有馬郡のうちにをいて二万石をたまひ、三田城に住す。」『寛政重修諸家譜』第8
51. 慶長7年(1602)、有馬則頼死去する。⁽⁵¹⁾
 「同年(慶長7年)七月下旬に卒す。」『寛永諸家系図傳』第13
 「(慶長)七年七月十七日卒 八十余歳」「有馬」「瀬翁譜」「七年七月二十八日三田において卒す。年七十。劍甫宗知梅林寺と號す。攝津國淡河の天正寺に葬る。のち筑後國久留米の梅林寺に改葬す。」『寛政重修諸家譜』第8
 「慶長七年七月廿八日逝、壽七十八、葬天正寺、「筑後將士軍談」卷第21
 「城主三(中略)父子福知山入部也 然而慶長七年正月廿八日隠居父刑部卿卒去 大呂村 天寧寺守葬 后筑後國久留米改葬 法名梅林寺殿前刑部卿法印劍甫宗知大居士 位牌存之」「福知山支略」

以上の史料から、淡河地域の在地勢力の動向を大略まとめると、次のようになる。

平安時代の状況については不明な点が多いが、鎌倉時代の前半には、平氏のち淡河氏と称する勢力が現れ、16世紀末まで淡河荘を領していた。鎌倉時代の後半以降には、摂津国・山田荘との間で境相論が起こるようになる。この時平氏・淡河氏の名は文献上に登場しないが、同氏が相論に係わった事は疑いない。

南北朝に至り、当初は南朝方に属していたが、乱後北朝方となっている。おそらく、この動乱期を経て赤松氏との関係が深まったものと思われる。嘉吉の乱によって、赤松氏の

影響が後退し、一時は山名氏の支配下となるが、応仁の乱の頃には再び赤松氏の勢力下となっている。南北朝から応仁の乱に至る間にも淡河氏は石峯寺に寄進を続けており、当地の領主の地位を確保していたものと思われる。

15世紀の末頃になると、三木に拠点をもつ別所氏の勢力が淡河に及び、これ以降淡河氏は別所氏と命運を共にすることとなる。

一方、16世紀中頃になると、三木と淡河の中間地に位置する三津田（溝田）を基盤として有馬重則が台頭してくる。当時畿内の実質的支配者といわれる三好氏に有馬氏は属するが、16世紀終わりに信長・秀吉方となり別所・淡河両氏を討つことになる。

城郭築造の契機 次にこの淡河関連の史料を一覧し、当地域が戦禍に巻き込まれる可能性を考えると、以下の4時期が注目されよう。

a. 南北朝の内乱期（1339年頃）。

南北朝期の初期に、南朝方が近隣の揖津国山田荘丹生山を拠点としたため、南朝方に属した淡河・石峯寺が合戦の舞台となった（文献No 10）。

b. 嘉吉の乱期（1441年～1445年頃）。

嘉吉元年6月24日、赤松満祐・教康は將軍義教を暗殺。乱後播磨守護となった山名持豊と、東播三郡の領有を認められた赤松満政との間で軋轢が生じた。山名氏との合戦で敗退した満政を助けるため挙兵した一族の有馬持家も、丹波守護の細川勝元と戦って破れた。『東寺執行日記』に文安2年3月、近接する有馬郡において丹波勢と合戦があり有馬方に多数の死者が出たと記されている（文献No 18）。持家は自家保全のため満政を逆に討つことになる。

c. 別所氏・淡河氏と有馬重則・三好長慶との戦い（1554年）。

別所城の三木次郎が、15世紀終わりには別所氏に属していた淡河氏と共に勢力を拡張してきたので、地理的に両者に挟まれた三津田城を拠点として新興してきた有馬重則との間で合戦があった。重則は、2年前に危機を救った三好長慶に助けを求めたため、長慶は三好長逸を出陣させて別所方の城を落城させた。やがて長慶自ら明石の太山寺に布陣したので別所方は降伏し長慶は帰陣した（文献No 29）。

d. 天正6年～8年の羽柴秀吉による播州攻め（1578～80年）。

天正7年4月末乃至5月、別所方の淡河氏の居城である淡河城を取り巻く付城が築かれ、5月26日には淡河城が落城する。萩原城にいた有馬則頼は、淡河城の東に位置する長松寺の付城に布陣した（文献No 33～42）。

この内、bの嘉吉の乱期に関しては、直接的に淡河地域が合戦の場となったという記録はないが、石峯寺三重塔・薬師堂の焼損した礎石や地盤で確認された焼土層、再建された建築の様式等から、この寺も兵火にかかったと言われており、乱後、山名教豊が石峯寺に対し守護安堵と共に堂舎の再興を指示していることからみて、戦乱の影響はあったものと考えられる。従ってこの4時期を当該地域に於いて城が築造される契機となり得るものと考えておきたい。

2. 「堀」 SD02~10の掘削順序

本丸北側で検出されたSD02~10は出土遺物の接合関係や、遺構の切り合い関係からみて、すべてが同時に機能していたのではなく、掘削と埋没が繰り返し行われたものと考えられる。

まずSD04では、中層～最上層から出土した備前すり鉢が、SD03下層出土の破片と接合し、SD04最上層出土の丹波すり鉢はSD07下層のものと接合関係にある。SD03はSD07によってその西端を破壊されているので、これよりSD04→SD03→SD07（及びSD06）の順で掘削されたと考えられる。

また、SD04最上層出土の土師質すり器が、SD09最下層出土のものと接合する事から、SD04→SD09の順が確認される。SD03・08・09及び10はその配置や小溝によって連結する状況から判断して同時期と思われるし、出土層位について把握できおらず問題点を含んではいるが、SD08出土の丹波すり鉢の破片がSD10から出土し接合している。さらにSD03を切るSD07は、その一部をSD02によって破壊されており、SD05もその北端をSD02によって切られている。

以上の検討から、SD04→SD03・08・09・10→SD06・07→SD02の順で掘削された事が推定される。SD05については遺物もなく、時期的位置づけの根拠を欠くが、少なくともSD02以前である事は疑いない。

なお、F区北端で検出したSD01に関しては、他の堀との切り合い関係を持たないため遺物から判断して16世紀後半の掘削という以外、時期的に限定は困難である。

3. 出土遺物の検討

前節の検討から最初に掘削されたのは、SD04である事が明らかとなった。次に遺物について再度確認するとSD04からは土師器炮烙A-V類（16世紀中頃）、丹波すり鉢a類（16世紀前半）、同c類（16世紀中半）、中国製白磁皿E群（15世紀末～1573年）、同染付碗C-I類（15世紀末～16世紀前半）、備前すり鉢IV期B（古）（15世紀後葉～末）と土師器すり鉢b類が出土している。これらは15世紀末頃から16世紀中頃のものが主体を占める。

最上層から出土した中国製染付小皿については、石山本願寺期の大坂城などで出土例があり、「小倉城」の報告でも天正年間頃のものとされているが、ここでは土師器すり鉢c類（図88-150）と共に、SD04の最終埋没時期を示すものと考えておく。

SD03・09・10からの遺物を見ると、土師器炮烙B-II類（16世紀第3～第4四半期）、同A-VI類（16世紀第4四半期中心）、丹波すり鉢a類（16世紀前半）と土師器すり鉢c類が出土している（SD09出土のb類の土師器すり鉢1491は、上面検出であり混入の可能性があるためここでは検討に加えない）。これらは16世紀第3～第4四半期のものが主体と考えて良いだろう。なお、土師器小皿に関しては未だ当地の編年が確立されておらず、今回の調査でも資料的には恵まれなかったため今後検討を加える必要がある。

土師器すり鉢 SD04とSD03・09両者に含まれる土師器すり鉢については、近年、播磨地域に於ける16世紀代の遺跡からの出土例が増加してきているが、その多くは包含層や、流土中の出土で時期的な位置づけが困難なものが大半を占めている。ただ、最近になって断片的ながら年

代の推定ができる資料も散見されるようになったので、以下ある程度の見通しを記して堀の掘削時期を検討する資料としたい。

特徴 土師器すり鉢は、同時代の丹波すり鉢と比較して口径の割に器高が低く、体部内面に粗いヨコハケを施した後、ヘラまたはクシ状工具によって間隔を置いたすり目を加える。体部外面にナデ調整をし、下端に横方向のヘラケズリを加える事などがその特徴である。体部内面下半は大抵使用によって著しく磨滅し、平滑な面となっており、見込のすり目が僅かに残るもののが一般的である。

分類 今回の調査では、いくつかの全形を知りうる資料に恵まれたが、他の遺跡ではその一部が出土する場合が殆どであるので、分類は口縁部の形状に重点を置いた。

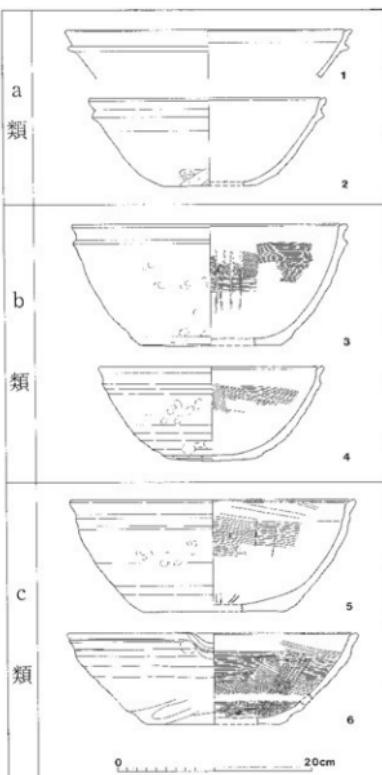
土師器すり鉢は、口縁端部の外面直下に凸帯を巡らすa類と、凸帯が段に変わるb類、そして段が消滅するc類に分類される（図116）。

神戸市北区淡河町東畑遺跡のSG2からは、土師器鍋、同小皿、備前すり鉢と共に土師器すり鉢が出土している。土師器鍋は十河分類のA-I類乃至II類で15世紀末から16世紀前半のものである。備前すり鉢は佐野編年のIV期B（新）と思われ、16世紀初～中葉に位置づけられている。

土師器小皿は手づくねのものと底部外面に回転糸切痕のあるものとが出土している。土師器すり鉢は口縁端部外面に凸帯のあるa類である。

b類の土師器すり鉢については、今のところ件出遺物を特定できるような資料に恵まれていないが、段が消失する次の段階のc類については、いくつかの例が知られている。

姫路市御着城跡の井戸2からは、土師器すり鉢c類と、土師器炮烙、同小皿、備前すり鉢、同甕、同水屋甕と瀬戸・美濃天目碗が出土している。土師器炮烙は十河分類のA-VI類とB-I類で、16世紀の第4四半期を中心とするものである。備前すり鉢は、佐野編年



1. 北区淡河町東畑遺跡 2. 多可郡中町恵い出遺跡
3～5. 北区淡河町萩原城遺跡 6. 姫路市本町遺跡
(1, 2, 6. は各報告書よりトレス)

図116 土師器すり鉢分類図

のV期（中）以降のもので、甕はV期（古）と考えられる。報告者の秋枝氏はこの井戸を1580年以前のものとされている。

大坂城跡（大阪市中央体育館地域）のSK506からは中国製染付碗、同小壺、同皿、瀬戸・美濃鉄釉天目壺、同灰釉天目壺、土師器小皿、同土釜と共に土師器すり鉢c類が出土している。SK506は豊臣氏大坂城期の前期で、天正11（1583）年から慶長3・4（1598・99）年に属する。同時期のSK515も土師器すり鉢c類と共に、瀬戸・美濃天目壺、同丸壺、同筒形壺、同丸皿、同折線皿、ヒダ皿、唐津皿、備前徳利形瓶、同壺、同すり鉢、同大甕、青磁、白磁のほか李朝陶磁器などが出土している。⁽⁵⁹⁾

平成11年度に神戸市教育委員会が調査を実施した、兵庫区の兵庫津（七宮）遺跡の第8生活面は、慶長大震災（1596年）頃のものであるが、この面から小片ではあるがc類の土師器すり鉢が検出された。また、第7生活面は出土陶磁器や銭貨から17世紀中頃の面と思われるが、この面でも土師器すり鉢c類が砂目の唐津皿と共に出土した。⁽⁶⁰⁾

大坂城跡（大阪市中央体育館地域）のSK589は豊臣氏大坂城期の後期で1599年から1615年までの遺構で、土師器すり鉢c類と共に瀬戸・美濃天目壺、同筒形壺、志野丸壺、絵志野蓋、唐津壺、同徳利形瓶、同壺、同杏形壺、丹波平鉢、備前すり鉢、青磁、白磁のほか慢頭心の青花碗などが出土している。

年代 以上からa類は16世紀の前半頃、c類は16世紀の第4四半期から17世紀の中頃と考えられる。従って、b類は16世紀の中頃を中心とする時期と推断される。

土師器すり鉢の口縁端部外側の凸帯が段となり、消滅するという変化の過程は、十河氏の土師器炮烙の型式変化とも一致しており、さらに、土師器炮烙の凸帯が段へ変化する時期を同氏が16世紀中頃とされていることも、土師器すり鉢の編年を考える上で大きな示唆となる。⁽⁶¹⁾

土師器すり鉢の口縁部の変化は緩やかでa類とb類、b類とc類の中間的形態を示すものが存在することは他の遺物と異ならない。その意味でより一層の型式分類の必要性を感じるが、今回は変化の大筋を示すに止め今後より良好な資料が得られた段階で再検討を加えたい。

4. SD04及びSD02の掘削時期について

SD04 前節3の結果、堀の中で最初に掘削され、土師器すり鉢b類などを出土したSD04は16世紀中頃に、土師器すり鉢c類などを出土したSD03・09・10は16世紀第4四半期にその機能を果たしていたと考えられる。既述したように、堀の掘削開始をもって城の成立と仮定するならば、萩原城の築造は16世紀でも中頃と推定され、本章1で検討しておいた4つの城成立の契機の内、aとbは時期的に整合せず第3の天文23（1554）年がその候補としてあげられよう。埋土の最上層ではあるが、SD04が炭を多く含む事を考慮すれば『細川両家記』が「三木の別所方の城城七ツ落也」と記すところの落城した城の1つにこの萩原城が含まれていたとも想像される。

SD02 一方、今回検出した堀のなかで最大規模を有するSD02に関しては、出土遺物が少なく且つ、時期が判明するものは16世紀の前半のものであるが、他の堀との関係からみても16世

紀第4四半期以降に掘削されたことは確実である。

有馬則頼　さて、萩原城は別所・淡河両氏と戦った有馬重則の子、則頼（法印）の居城とされている。この城は天正7（1579）年5月に別所氏に与する淡河弾正定範の居城、淡河城を秀吉勢が攻め落とした後、則頼が淡河城主となつたため廢城になったと言われている。萩原城の堀の中でSD02が最後に掘削されたという調査結果から判断して、SD02は則頼に関係する可能性が最も高いと考えられる。従つて、則頼の萩原城入城の時期の確定がSD02の掘削時期を確定する上で1つの根拠を与えるものと思われる。

そこで、有馬則頼に関する記録の中に、その糸口がないか検討してみよう。まず萩原城に則頼が居していた事については、1677年の『足利国慶氏所蔵文書』の「国次先祖遺書之事」に「有馬玄番頭有馬法印ト申出、當庄木津在城之頃」との記載がある。「木津」は現在、本丸と小谷を挟んだ東側の地区を指しているが、木津地区の調査では鎌倉時代の遺構は確認されたものの、現時点では城郭遺構は認められず、現在の「萩原」がかつて「木津」であった可能性も含めて、この「木津在城」は「萩原城」在城の事と考えられる。

1762年成立の『播磨鑑』にも「有馬法印居城 在南萩原村（中略）長十六間 横十五間此有馬法印 中務少輔則頼ト云 重則ノ子也 三木ノ城ノ出生」とあり、さらに1853年の『筑後將士軍談』にも「初柄源次郎則頼改中務少輔、後號刑部卿、居萩原城、天正中爲播州淡河城主、」との記述が見られる。

以上から、少なくとも1677年には、則頼が萩原城を居城としていた事が伝えられていたものと考えられる。

ところで、有馬則頼は天正7年または8年（1579・80）萩原城から淡河城に移った後、慶長6年（1601）には兵庫の三田城主となり、翌年死去する。子の豊氏がその遺領を受け継ぐが元和6年（1620）九州久留米に所領替えとなり、その後有馬家が代々久留米藩主となり幕末を迎えることになる。

『米府紀事略』　この久留米藩が元禄14（1701）年4月に、雨森伝兵衛を使者として播磨淡河に遣わし則頼や父重則関係の位牌、石塔及び居城跡を調査させており、その時の記録が久留市民図書館と篠山神社に伝わる『米府紀事略』に収録されている。『米府紀事略』は町奉行などを勤めた杉山清兵衛正伸と子正徳が著の記録を、安永6年（1777）から文政12年（1829）にかけて執筆したものである。

その雨森の「覚書」の淡河城について述べた中に、「・・ 淡河の城地、（中略）元此城は淡河弾正之助居城にて、天正の比、三木の城主別所小三郎と一味たるより、弾正親族此城え柄籠、下向の敵を支へんとす、秀吉公被向御馬、其節、法印様には三津田の城より、淡河の東に当たり、萩原村の古城へ御移、御在城被遊、太閤様淡河表御出陣之節、（中略）無二の御味方可被成段被仰上候処、秀吉公御満悦思召、播州表之案内可致のよし被蒙御意、」との記述がある。

また卷之16の「法印様覚書 有馬主膳殿藏書²³⁾」には「一 法印様御若年之時分ハ阿州二好実休（義景）ニ御属し被成、方、御陣御勤候而、実休御討死之後御法体被成候事 一 其後播州ニ而別所小三郎殿ニ御属し被成、小三郎殿御伯父別所志摩守殿の御葬ニ被為成候、又其後小三郎殿と御不和に被為成、太閤様え御属シ被成候由承り候事」と記載されている。

さらに、江戸中期頃の記述とされる、兵庫県赤穂郡上郡町の宝林寺が藏する『播州諸城交替連綿之記』⁽²⁾の三津田城の条には「有馬筑後守重則此處ニ居ス、其子中務大輔則頼天文年中此城ヲ築ケ（天正八年淡河城移居隠居ス）」とある。

以上の史料は全て江戸時代のものでその点問題もあるが、今この記述を信じるならば、有馬則頼は天文23年（1554）に父重則が三好長慶の助力を得て別所・淡河両氏と戦った時は、父と共に三津田（溝田）城おり、三好実休の死（永禄5・1562年）の後もこの三津田城に在城して今度は別所氏の麾下に属したが、秀吉の播州攻めに呼応して「萩原村の古城」へ移ったと読むことができる。この解釈が正しければ則頼が三津田城から萩原城に移ったのは、秀吉勢が淡河城を攻撃する直前に近い、天正6～7年（1578～1579）頃の時期であったと推定できるのではないだろうか。従って、萩原城のSD02の掘削時期は、16世紀第4四半期でも前半と推測される。

横矢1～3 また、横矢の出現も永禄から天正初めと考えられており、これも則頼入城時に設けられた可能性が考えられよう。ただ、横矢3に関して言えば、上面で検出したSX04から肥前陶器（唐津系）塊と考えられる破片が出土している（図65-96・97）。肥前陶器の出現は現在、1580年以降とされるのが一般的なので、SX04は則頼が淡河城へ移る時期に作られたものであり、萩原城築城時期とは時間的差異があるということになる。

しかしここでは、問題の肥前陶器の破片は周辺にあった年代の異なる様々な土師器・須恵器や瓦などを投棄した最終の時期を表現するものと考え、SX04が作られる以前に平坦面（横矢3）が既に存在した可能性の方を、より重視しておきたい。

5. 結語と残された問題

萩原城の築造時期、城主などについては以下の見解が今までに提示されている。

- ① 「有馬法印則頼が居城したもので、始め有馬氏は三津田城（中略）に父重則の代から居城していたのであるが、永禄2年（1559—引用者）、淡河城主弾正少輔元範卒し、その間際に乗じ、淡河庄南萩原村の古城を修築し住した。」『城』第62号
- ② 「淡河莊の領主であった淡河氏の分立による居城であろうと思われる。（中略）長く淡河氏が居城していたらしいが、天文二十三年（1554）に有馬郡の有馬氏は三好長慶に従って東播磨の三木城を攻め、この時、淡河城や萩原城も落城し、城主は淡河城（ママ）へ敗走したので、その後、有馬重則の居城となった。」『日本城郭大系』
- ③ 天文23年（1554）以前の築城で、城主は淡河氏である。『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』
- ④ 「近江国愛智郡（滋賀県愛智郡）に住し、播磨国淡河莊地頭職を併せ所領していた中嶋豊前守が（中略）建治2年（1276）2月に築城したのにはじまるといわれ、以降長く淡河氏と共存していた。天文7年（1538）尼子晴久の播磨乱入の時、中嶋経純は晴久に加担していたが、同9年尼子氏が播磨より去るに及んで萩原城を引き揚げ西播に移った。この間際に乗じ三津田城の有馬則頼が萩原城に移住した。」『兵庫大百科事典』

今回の調査で12世紀末～14世紀と考えられる掘立柱建物、土坑等が検出された事は、上記④の推定築城時期を裏付けるものとも解釈され、「神戸市埋蔵文化財年報」にもこの事実を踏まえて萩原城の築造時期などを紹介してきた。

萩原城築造の時期 しかし、3ヶ年にわたる発掘調査の成果を纏めるに当たって、調査を行わなかった本丸以外で城郭の機能を確実に表現するものとして堀に注目して考察を進めた結果、当城は16世紀でも中頃（天文23年を含む）以降の築造という結論に達した。

但し、この結論も過去発表された築造時期を全く否定し得るものではなく、今後、本丸部分などの調査が実施されれば、再度検討の必要性が生じるものと考えている。本章1で検討した当該地域における城郭成立の契機の内、堀の掘削時期から判断して除外した、南北朝期と嘉吉の乱期もその意味で、萩原城の築城時期として可能性は残していると思われる。

出入口部（虎口） また、城郭の最重要部分の1つとされる出入口部（虎口）に関しては、今回はその部分が現在の生活道路として使用されていることもある、発掘調査を行うことができず、その構造や構築時期を明確にする事ができなかった。現在、虎口は横矢3の南側を通る東西方向の小道が、この横矢の東側で屈曲して北へ延び、再び屈折して東に向かうものと考えられており、過去発表された縄張図もそのように復元されている。

しかし、調査の結果から見れば、横矢3の南側の小道はそのまま東に進めば、SD02に繋がっており、SD02が通路的役割乃至敵兵を誘導するための堀切であった可能性が考えられる。横矢南側の小道はSD02開口部の手前で本丸西側にある南北方向の深い堀状部分に続いていた可能性も高く、この堀底を通って本丸と南丸の間に通る道も想定できる。SD02に関して言えば、これがもし通路的な堀切であるとすれば、2度以上屈曲して城内に入ることになり、「横矢掛け」を狙う機能を保持するものと言える。この場合でもSD02から本丸や掘立柱建物群へ向かうための施設が必要であるが、今回の調査では検出されていない。

さらに、SD02が一般的な堀切であったとすれば、現在虎口と考えられている部分が西端に開口部を持つSD02と同時に機能しているとは考えがたい。SD02以前の堀としたSD03～10の配置を見れば、現在虎口と考えられている部分が存在し得る時期は、SD02掘削以前または城郭とは全く関係の無くなった時代であろう。

いずれにせよ、現在虎口と想定されている部分の調査が実施できない以上、解決の糸口を見つけることは困難である。

掘立柱建物 A～F区で検出した掘立柱建物群に関しては、その帰属時期の決定に問題を残しているが、16世紀後半と考えたⅢ b期の建物は、2棟を除き主軸方位をほぼ正確に真北方向に描える傾向が明らかで、Ⅲ a期のものとは大きく異なる事を指摘できる。

これら前代とはやや異なる様相を持つ掘立柱建物の出現は、16世紀中頃以降にこの遺跡が城としての性格を帯びるようになった事と関わりを持つものとも考えられるが、これも虎口の復元問題と共に今後の課題として提示するに止め、今回の調査の結語にかえておきたい（図117）。

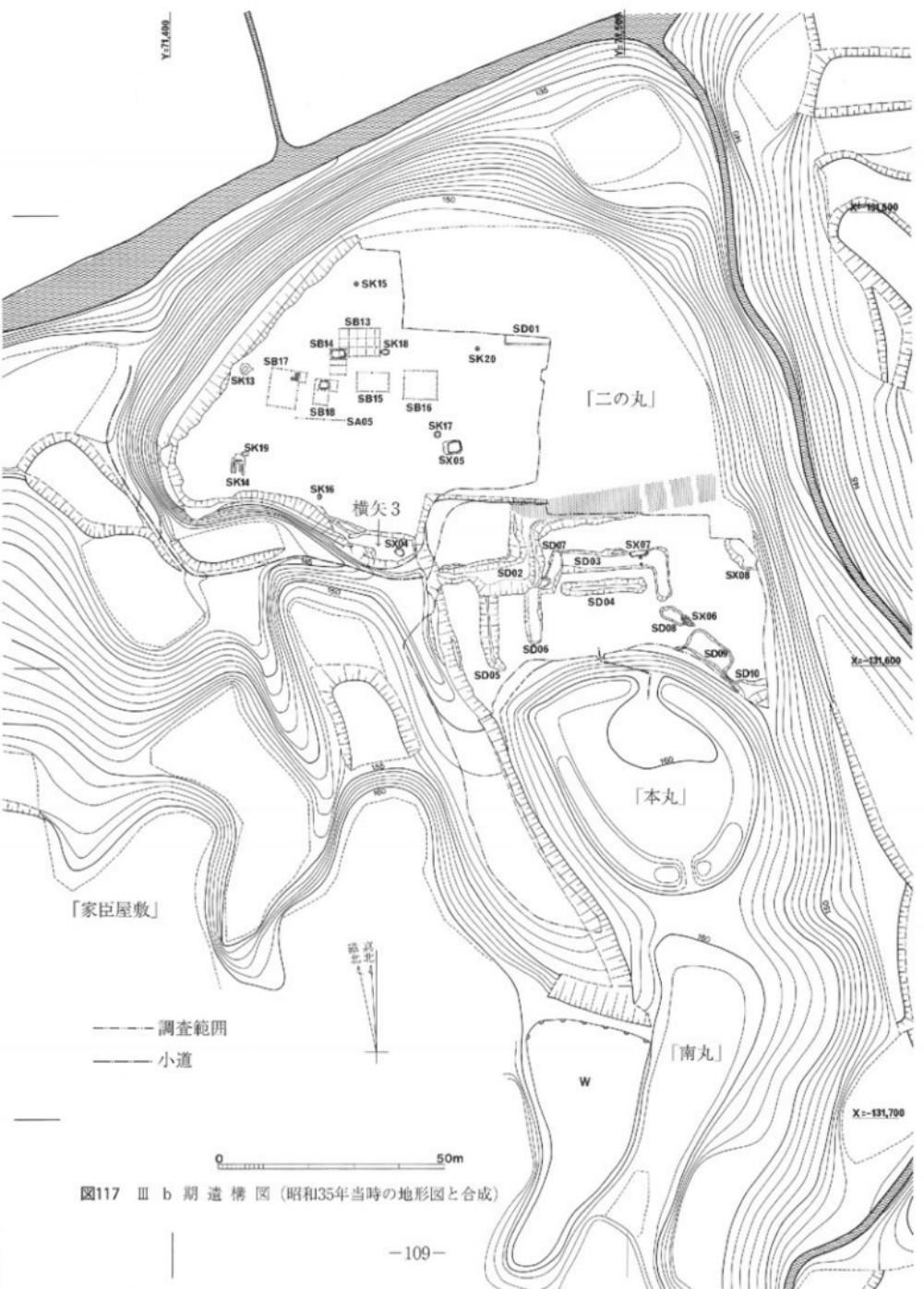


図117 III b 期 遺構図（昭和35年当時の地形図と合成）

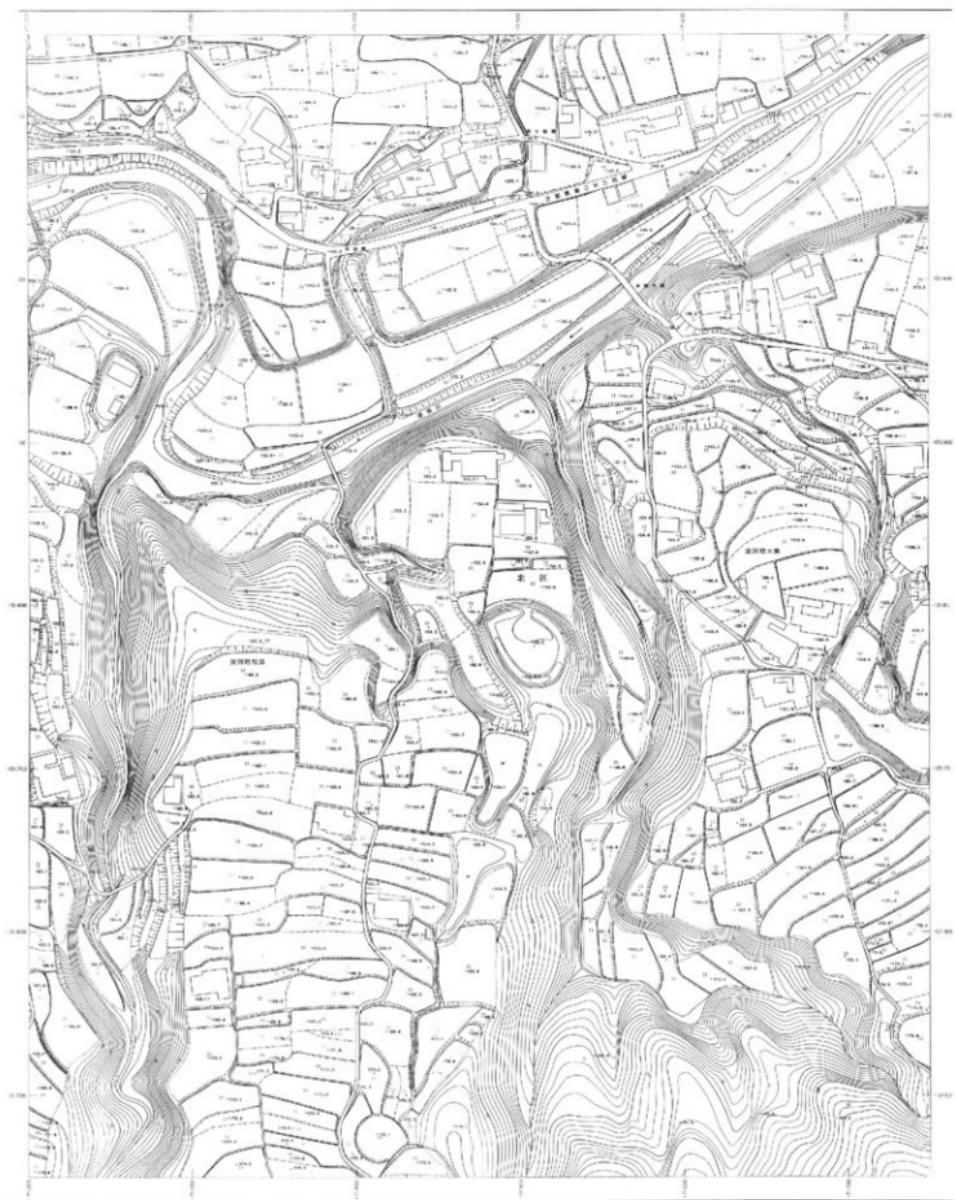


図118 周辺地形図（昭和35年撮影写真からの地形図）

注

- (1) 「第七篇近國六 播磨國美義郡淡河莊」 清水正健編『莊園志料』上巻 (株)角川書店 1965年12月20日
- (2) 「徵考錄」『石峯寺文書』 木南 弘・落合重信他『神戸市文献史料』第2巻 神戸市文化財調査報告書25 神戸市教育委員会 1979年3月
- (3) 同上
- (4) 同上
- (5) 「(弘安)同四年辛巳八十一歳」「金剛仰子叡尊感身學正記」下 奈良国立文化財研究所史料第2冊 西大寺叡尊傳記集成 奈良国立文化財研究所 1956年3月25日
時俊の名は「北條系圖」に見える。
貞盛 平将軍——時房——時盛 佐介組。建政三年五月二日卒。八十一才。——時治
時直——清時 安喜守——時俊——貞俊
『系図部冊五 北條系圖』『續群書類從』卷第140 続群書類從完成会 1977年5月20日
- (6) 「一遍上人繪詞傳直談鈔卷之十三」「大日本佛教全書」第69冊 仏書刊行会 1981年9月30日
「淡河殿といふのは(中略)淡河時俊のことである。時俊は鎌倉幕府の執権である北条氏一族で、北条時房の系統である。(中略)他阿弥陀仏真教から最初の名号札を与えられたのは、右の淡河時俊である。」今井雅晴「捨型 一遍」歴史ライブラリー61 (株)吉川弘文館 1999年3月1日
- (7) 「勘仲記紙背文書 九 隆恵書状」『兵庫県史』史料編中世8 兵庫県史編集専門委員会 1994年3月31日
- (8) 「北国探題淡河殿自害の事」長谷川端校注・訳『太平記』卷第11 新編日本古典文学全集54 小学館 1994年10月10日
『系図部冊五 北條系圖』『續群書類從』卷第140 前掲書
注(5)系図参照。「時俊」と「時治」の記載には年代的な錯乱がある。
- 石田善人「淡河氏」「兵庫県大百科事典」神戸新聞出版センター 1983年10月1日
- (9) 「徵考錄」『石峯寺文書』 前掲書
- (10) 「春宮柳營宮禁殺の事」長谷川端校注・訳『太平記』卷第19 前掲書
「辻文書」「大日本史料」第6編之3 東京大學史料編纂所 1969年1月1日
「越前島津家文書 八 島津忠兼軍忠狀」「兵庫県史」史料編中世9 古代補遺 兵庫県史編集専門委員会 1997年3月31日
「越前島津家文書 一九 島津忠兼軍忠狀」「兵庫県史」史料編中世9 古代補遺 同上
「広峯神社文書 三 肥塚範重忠状案」「兵庫県史」史料編中世2 兵庫県史編集専門委員会 1987年3月31日
- (11) 「17. 後村上天皇輪旨」「石峯寺文書」 前掲書
- (12) 「18. 平政氏禁制」「石峯寺文書」 同上
- (13) 「森川文書 一 足利尊氏袖判下文案」「兵庫県史」史料編中世9 古代補遺 前掲書
- (14) 「19. 平政氏田畠寄進状」「石峯寺文書」 前掲書

- (15) 「第二章第一節 石峯寺の沿革の調査」「重要文化財石峯寺薬師堂修理工事報告書」 重要文化財石峯寺薬師堂修理委員会 1968年12月
- (16) 「21. 駿河守田地寄進状」「石峯寺文書」 前掲書
- (17) 「醍醐寺文書 一〇二 足利義持御判御教書案」「兵庫県史」史料編中世7 兵庫県史編集専門委員会 1993年2月25日
- (18) 「伏見宮本第五卷 嘉吉元年六月廿四日」「大日本古記録」建内記3 東京大學史料編纂所 1987年1月16日
「五〇五 東寺執行日記 文安元年一月条」三宅克広「第二章 上郡町の中世史料」「上郡町史」第3巻史料編I 上郡町史編纂専門委員会 1999年6月30日
「五〇九 東寺執行日記 文安二年二月条」三宅克広「第二章 上郡町の中世史料」前掲書
「五一〇 東寺執行日記 文安二年三月二四日条」三宅克広「第二章 上郡町の中世史料」前掲書
- (19) 「23. 守護訓札」「石峯寺文書」 前掲書
「微考録」「石峯寺文書」 前掲書
- (20) 「27. 赤松秀秀泰書」「石峯寺文書」 前掲書
- (21) 「醍醐寺文書 一一六 播磨国淡河莊百姓等申状案」「兵庫県史」史料編中世7 前掲書
「醍醐寺文書 一一八 田原道円泰書」「兵庫県史」史料編中世7 同上
- (22) 「微考録」「石峯寺文書」 前掲書
- (23) 同上
- (24) 同上
- (25) 「赤松諸家大系図 赤松諸家大系譜上之卷第七」 藤本哲『赤松氏の史料と研究(三)』 講談社出版サービスセンター 1986年5月30日
- (26) 「御家系譜」「米府紀事略」卷之17 『久留米市史』第9巻資料編(近世II) 久留米市 1993年10月31日
「赤松諸家大系図 赤松諸家大系譜上之卷第七」 藤本哲『赤松氏の史料と研究(二)』 前掲書
- (27) 「赤松諸家大系図 赤松諸家大系譜上之卷第七」 同上
- (28) 「微考録」「石峯寺文書」 前掲書
- (29) 「合戦部十二 細川兩家記」「群書類從」卷第380 繕群書類從完成會 1959年8月20日
「足利季世記卷之五」 近藤瓶城編・近藤圭造校訂『改定史籍集覽』第13冊 (株)臨川書店 1990年12月15日
『續應仁後記』には「摠州ノ有馬源二郎重則ト播州衆ト取合起テ重則頃ニ長慶ヲ賴ム」とある。
「畿内近國所々退治事付長慶威勢事」「續應仁後記」卷6 近藤瓶城編・近藤圭造校訂『改定史籍集覽』第3冊 (株)臨川書店 1990年10月31日
- (30) 「永祿八年五月小十九日条」 山科言繼著『言繼御記』26 國書刊行会 1914年12月25日
- (31) 「足利季世記卷之八」『改定史籍集覽』第13冊 前掲書

- 「合戦部十二 細川兩家記」「群書類從」巻第380 前掲書
- (32) 「一二九 椎木鶴昭光・一色昭秀連署奉書」「歴代古案」第1 史料叢集(古文書編)25
(株)統群書類從完成会 1993年12月25日
「上杉家文書之二 六五三 毛利輝元書状(切紙)」「大日本古文書」家わけ12-2 東京
大學史料編纂所 1971年2月20日
- (33) 「磯野丹波・職員新右衛門の事」大田牛一著・桑田忠親校注『新訂信長公記』巻11 慶長
15(1610)年成立 (株)新人物往来社 1997年5月15日
「吉川家文書 九二 足利義昭御内書(切紙)」「大日本古文書」家わけ9-1 東京大學
史料編纂所 1970年9月20日
『中國兵亂記』には「播州別所小三郎長治は織田信長卿へ恨有て遂防戦由、自今隨御幕下
將軍義昭公御上洛の節御先陣可仕候間、戦毛利家御不禮申上候段御赦免被下候様にと、淡河
弾正を以て小早川隆景へ申達す。」とある。
中島元行著『中國兵亂記』田中誠一編『吉備群書集成』第3輯 吉備群書集成刊行会 1922
年1月25日
- (34) 「三木郡古城跡」平野庸脩著・橋本政次校注『地志播磨鑑』宝曆12(1762)年成立 播
磨史籍刊行会 1958年 (株)歴史図書社 1969年11月25日 覆刻
慈願(眼)守山城については、発掘調査が実施されている。
小網 豊「三木城攻めの陣跡」「日本歴史」第559号 日本歴史学会 1994年12月1日
仁尾一人・長浜誠司「慈眼寺守山城跡の調査」多賀茂治編『三木市 加佐山城跡・慈眼寺守
山城跡 - 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XVII-1』兵庫県文化財報告第144冊
兵庫県教育委員会 1995年3月31日
- (35) 「微考錄」「石峯寺文書」前掲書
- (36) 「丹波国波多野館取り巻くの事」「新訂信長公記」巻11 前掲書
- (37) 「播州三木城責めの事」吉田孫四郎雄藏著・吉田蒼生雄訳『武功夜話』巻8 (株)新人物
往来社 1987年5月10日
- (38) 「二条殿・烏丸殿・菊庭殿・山科左衛門督殿・嵯峨策彦・武藤弥平衛・病死の事」「新訂信
長公記」巻12 前掲書
「元禄十四巳年四月廿五日播州ニ雨森伝兵衛罷越候館之覚書」「米府紀事略」巻1 前掲書
- (39) 「二条殿・烏丸殿・菊庭殿・山科左衛門督殿・嵯峨策彦・武藤弥平衛・病死の事」「新訂信
長公記」巻12 同上
「羽柴筑前守より丹波陣中の前野長康に宛てたる手紙の事」「武功夜話」巻8 前掲書
松浦 武「武功夜話」検証-信長・秀吉戦跡実地踏査報告 新人物往来社 1996年1月
8日 では「然れば当方表、別所(の)構え、海手路次寒げ寒げ取り詰め候。城内兵糧の蓄
え、次第に事欠き手弱く相成り候。霜月頃には是非とも責め落し討ち果たすべく、舍弟小一
郎、蜂彦右、先懸け、根津守付城塞ぐべく、丹生山、海蔵寺、御ふ郷の城、取り押さえ候。
(下線引用者)」と校訂されており、「御ふ郷」は「淡河」であると記されている。
- (40) 桑田 優「近世淡河町の成立過程」「神戸市史紀要 神戸の歴史」第12号 神戸市市长總
局 1985年7月

- (41) 「大村合戦」「新校別所長治記」 三木文庫編『圖説三木戦記』 1968年4月1日
- (42) 「長治、友之自害」「新校別所長治記」 前掲書
- (43) 「有馬文書」「兵庫県史」史料編中世9古代補遺 前掲書
- (44) 「有馬文書 二 羽柴秀吉領知判物」「兵庫県史」史料編中世9古代補遺 同上
- (45) 「當代記卷二」「史籍雜纂」第2 國書刊行会 1911年11月30日
- (46) 「小西於平安道振猛威事」 小瀬甫庵著・檜谷照彦・江本裕校注『太閤記』15巻 新日本古典文学大系60 (株)岩波書店 1996年3月15日
- (47) 「當代記卷一」「史籍雜纂」第2 前掲書
- (48) 「有馬豊氏に遭れる書状(文禄四年七月二十日)」 中村孝也「新訂徳川家康文書の研究」(中巻) 日本學術振興會 1980年3月28日
- (49) 「伊達政宗より有馬則頼・今井宗薫に遭れる書状(慶長四年四月五日)」 中村孝也「新訂徳川家康文書の研究」 同上

徳川義宣氏は、文禄4年4月26日付の則頼宛の家康書状の解説の中で、則頼は文禄年間頃から家康と昵近となり慶長4年頃には、家康側近の位置を占めるに至ったと考えられるとしている。

徳川義宣『新修 徳川家康文書の研究』(財)徳川黎明会 1983年6月20日

- (50) 「寛永諸家譜 村上源氏二巻之内」 林 羅山編・齊木一馬他校訂『寛永諸家系図傳』第13 寛永20(1643)年9月成立 (株)続群書類從完成会 1990年9月20日
「寛政重修諸家譜第四百六十九 村上源氏 赤松支流」 林述齋編『寛政重修諸家譜』第8文化9(1812)年11月成立 高柳光寿他編 (株)続群書類從完成会 1980年4月25日
- (51) 「寛永諸家譜 村上源氏二巻之内」「寛永諸家系図傳」第13 前掲書
「有馬」 新井白石著『新編藩翰譜』第3巻 元禄15(1702)年2月成立 (株)人物往来社 1967年12月30日

「關原・亂始末大概之事」 矢野一貞著『筑後將士軍談』 嘉永6(1853)年成立 宮崎來城他校閲『校訂筑後國史 筑後將士軍談』上巻 筑後道籍刊行會 1926年10月10日

- 関 三藏「福知山支略」「福知山市史」史料編3 福知山市史編さん委員会 1990年3月31日
- (52) 注(25) や注(51)に掲げる系譜では有馬重則は応永28(1421)年に死去したとされる有馬義祐を祖としているが、天文・弘治頃(1532~1557年)の摂津国の大守を列記した『荒木略記』に「有馬郡三田之城に有馬出羽守。是は有馬玄蕃頭一家にて無之矣。有馬玄蕃頭は生同攝磨赤松にて御座候。有馬を名乗と申候矣。攝磨守にて御州侯。」とあり、有馬郡を本拠とし、兵庫県三田市の三田城に居城する有馬氏と有馬則頼(や、その父重則)とは出自が異なるものと考えられていたことが判る。

「荒木略記」「群書類從」巻第398 続群書類從完成会 1960年5月20日

また、天文・弘治頃に「有馬出羽守」と称された人物は諸系譜に現れないが、風早恂氏は「天文弘治の頃は、民部少輔村秀の時代である。有馬出羽守とも称したのであろうか。」とされている。

風早 恽「赤松有馬氏の史料展望」「神戸史談」234 神戸史談会 1974年1月1日

有馬氏の年譜を纏められた高田義久氏は、天文23年に登場する有馬源次郎はこの村秀のこ

とであるとされているが、ここでは従来の説に従っておく。

高田義久『有馬郡主 赤松有馬氏年譜』 1997年3月

長江正一『三好長慶』人物叢書 (株)吉川弘文館 1994年11月20日

- (53) 重要文化財石峯寺三重塔修理委員会『重要文化財石峯寺三重塔修理報告書』 1955年1月
重要文化財石峯寺薬師堂修理委員会『重要文化財石峯寺薬師堂修理工事報告書』 1968年
12月

- (54) 池元啓子「遺物編第1章第4節」谷口俊治・川上秀秋編『小倉城跡』2 前掲書

- (55) 後述するもの以外で土師器すり鉢を出土している遺跡としては以下のものがある。

〈a類〉

- ① 神戸市北区淡河町萩原城遺跡

岩崎寅也・松下智義『萩原城遺跡発掘調査報告書』阪神文化財調査会 1997年9月20
日

- ② 神戸市北区淡河町勝尾遺跡

西岡巧次『勝尾遺跡I』神戸市教育委員会 前掲書

- ③ 神戸市北区淡河町西北遺跡

阿部敬生『南僧尾』神戸市教育委員会 前掲書

- ④ 神戸市西区玉津町枝吉城遺跡

神戸市古田片山遺跡調査団『吉田南遺跡周辺の遺跡』現地説明会資料2 1980年10月12
日

- ⑤ 神戸市西区玉津町日輪寺遺跡

2000年 神戸市教育委員会調査

- ⑥ 兵庫県西脇市比延前田遺跡

岸本一郎『比延前田遺跡 西脇市比延小学校改築に伴う発掘調査報告書』西脇市文化財
調査報告書第8集 兵庫県西脇市教育委員会 2000年3月31日

- ⑦ 兵庫県多可郡中町段ノ城遺跡

安平勝利『段ノ城遺跡』中町文化財報告13 兵庫県多可郡中町教育委員会 1997年3月
31日

- ⑧ 兵庫県多可郡中町思い出遺跡群

宮原文隆『思い出遺跡群I - 第1区～第5区の文化財発掘調査 -』中町文化財報告17
兵庫県多可郡中町教育委員会 1998年3月31日

- ⑨ 兵庫県姫路市英賀城遺跡

秋枝 芳・山本博利『加茂遺跡』姫路市教育委員会 前掲書

〈b類〉

- ① 神戸市北区淡河町西北遺跡

阿部敬生『南僧尾』神戸市教育委員会 前掲書

- ② 神戸市北区淡河町淡河城遺跡

1977年 神戸市教育委員会調査

- ③ 神戸市西区玉津町吉田南遺跡

西口圭介編『吉田南遺跡（足田地区）・北王子遺跡』兵庫県埋蔵文化財調査報告第149冊
兵庫県教育委員会 1995年3月31日

④ 神戸市垂水区垂水日向遺跡

木戸雅寿・横田明「垂水日向遺跡（天ノ下地区）」「平成9年度神戸市埋蔵文化財午報」
神戸市教育委員会 2000年3月

⑤ 兵庫県小野市小田町小田城遺跡

吉識雅仁・甲斐昭光『小田城発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 前掲書

⑥ 兵庫県小野市金鐘城遺跡

岸本直文「第二章小野市の考古資料」『小野市史』第4巻史料編Ⅰ 1997年10月30日

⑦ 兵庫県三田市釜屋城遺跡

岡田章一「第6章第4節」井守徳男編『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅱ 兵庫県文化財調査報告書第16冊 兵庫県教育委員会 1983年3月31日

⑧ 兵庫県高砂市高砂町遺跡

清水一文『高砂町遺跡－高砂私立高砂中学校体育館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高砂市文化財調査報告第11号 高砂市教育委員会 1996年3月31日

⑨ 兵庫県西脇市野村町野村構居遺跡（b類またはc類の小片）

別府洋二『野村構居跡－一般河川加古川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』
兵庫県文化財調査報告書第111冊 兵庫県教育委員会 平成3年度

⑩ 兵庫県西脇市比延前田遺跡

岸本一郎『比延前田遺跡』前掲書

〈c類〉

① 神戸市北区淡河町西北遺跡

阿部敬生『南僧尾』神戸市教育委員会 前掲書

② 神戸市西区伊川谷町太山寺坊院遺跡

植山 茂『神戸市西区太山寺坊院跡発掘調査報告』阪神高速道路公団・(財)古代學協会・平安博物館 1984年10月31日

③ 神戸市西区玉津町吉田南遺跡

西口圭介編『吉田南遺跡（足田地区）・北王子遺跡』前掲書

④ 兵庫県姫路市本町遺跡

姫路市教育委員会『本町遺跡』1984年11月30日

⑤ 兵庫県高砂市高砂町遺跡

清水一文『高砂町遺跡』高砂市教育委員会 前掲書

⑥ 大阪府堺市堺環濠都市遺跡

土山健史『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－SKT356・車之町東1丁4番所在梅榮堂ビル建設工事に伴う事前調査』堺市文化財調査概要報告第33冊 堀市教育委員会 1992年
10月31日

〈型式不明〉

① 神戸市北区八多町屏風遺跡

神戸市教育委員会が平成3年5月～7月にかけて調査を実施し、体部片のみ出土した。

なお、平成12年度に神戸市教育委員会が実施した西区玉津町の日輪寺遺跡の発掘調査で、堀状遺構が検出され、多量の土器類が出土した。この中から備前すり鉢や土師器鍋などと共に、土師器すり鉢が出土した。整埋作業が未完のため土器類の正確な時期等を決定できないが、15世紀代に遡る可能性もある。土師器すり鉢の口縁部の型式はa類である。

発掘調査担当の山本雅和氏から御教示を得た。謝意を表します。

- (56) 岩崎直也『東畠・南浦遺跡発掘調査報告書』阪神文化財調査会 1999年3月25日
- (57) 秋枝 芳「姫路城昭和大修理の成果と展望（I）－考古資料の再検討－」『城郭研究室年報』第1号 姫路市立城郭研究室 1992年3月30日
秋枝 芳「姫路城昭和大修理の成果と展望（II）－考古資料の再検討－」『城郭研究室年報』第2号 姫路市立城郭研究室 1992年12月28日
- (58) 森 毅『第Ⅲ章第7節豊臣氏大坂城期の遺構と遺物』『難波宮址の研究』第9 前掲書
- (59) 同上
- (60) 神戸市兵庫区七宮町2丁目で神戸市教育委員会が平成11年6月～10月にかけて調査を実施した。
- (61) 注(58)と同じ
- (62) 小河良和「堺環濠都市遺跡出土の土師質土器・炮烙について」『関西近世考古学研究』IV 前掲書
(55) でも触れたようにa類は15世紀代から始まる可能性もあるが、中心となる時期は、16世紀前半と思われる。
- (63) 「足利国慶氏所蔵文書」木南 弘・落合重信他『神戸市文献史料』第2巻 前掲書
- (64) 内藤後哉・中村大介「淡河木津遺跡第1次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』 前掲書
- (65) 明本東海『神戸市淡河の歴史』 1968年6月20日
- (66) 「(淡河)同組古城蹟」「地志播磨鑑」 前掲書
- (67) 「關原一亂始末大慨之事」矢野一貞著『筑後將士軍談』 前掲書
- (68) 貞享3(1686)年の村上正弥氏所蔵文書に「一古へ淡河上山之城(淡河城、引用者)主淡河彌正殿(中略)天正年中太閤様三木之城御責被成候節、上山之城ハ有馬法印・同四郎治郎殿江從太閤様被仰付御責、(中略)其跡有馬法印・同四郎治郎殿御城主」とある。
- 〔二〕 淡河町山緒につき書上』『兵庫県史』史料編近世3 兵庫県史編集専門委員会 1993年3月31日
- (69) 注(50)と同じ
『米府紀事略』では天正18年の小田原の陣の後、『筑後將士軍談』では文禄4年8月に有馬則頼は静岡県横須賀城に移り、3万石を領したと記載されている。『備前老人物語』にも則頼が渡瀬繁詮に従い横須賀城にいたとされる箇所があり、『兵庫県の地名』はこの為に淡河城は廢城となったと考えられるとしている。ただ、横須賀3万石を領したのは子の豊氏であることは豊氏宛の家康書状で確認できるが(注48)、則頼が横須賀城に在城した事や3万石を領したことは他の史料で確認することが出来なかった。

- 杉山伸正・正徳（正篤）「米府紀事略」「久留米市史」第9巻史料編（近世II） 前掲書
矢野一貞『筑後將士軍談』 前掲書
「有馬玄蕃殿家来稻津壱岐般申時の書付」「備前老人物語」 近藤瓶城編『史籍集覽』 近藤
出版部 1926年5月15日
- 加藤隆久・木南 弘・小芝光弘「神戸市」「兵庫県の地名」日本歴史地名大系第29巻-I
平凡社 1999年10月20日
- 鈴木東洋「横須賀城」「日本城郭大系」第9巻 (株)新人物往来社 1979年6月15日
- (70) 「元禄十四巳年四月廿五日播州ニ雨森伝兵衛罷越候節之覚書」「米府紀事略」卷之1 前掲
書
- (71) 「法印様覚書 有馬主膳殿藏書」「米府紀事略」卷之16 前掲書
- (72) 「(2) 播州諸城交替連錦之記(宝林寺藏)」 藤本 哲『赤松氏の史料と研究(一)』 講談
社出版サービスセンター 1976年12月20日
- (73) 盛 峰雄「陶器の編年1. 碗・皿」「九州陶磁の編年」 前掲書
- (74) 下田 勉「萩原城」「城一渢河特集-」No.62 関西城郭研究会 1969年11月21日 (奥付に
は「機関誌 城 第五十七号」とある。)
- (75) 下田 勉「萩原城」 石田善人他編『日本城郭大系』第12巻 (株)新人物往来社 1981年
3月15日
- (76) 「萩原城」「兵庫県の中世城館・莊園遺跡-兵庫県中世城館・莊園遺跡緊急調査報告-」
兵庫県教育委員会 1982年3月30日
- (77) 下田 勉「萩原城」「兵庫県大百科事典」 神戸新聞出版センター 前掲書

表5 I・II期遺物観察表(石器以外)

(法量の単位はcm)

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (器高) (底径)	胎 土	色 (外 面) (内 面)	備 考	旧番号
1	SX03	純紋・深鉢	— — —	長石・石英の中砂多 量に含む	橙7.5YR6/6~明褐色7.5YR5/6 タ	近世埋土中	H区 SX06
14	SB01 P-1	須恵・塊	15.7 — —	微砂粒含む	灰白7.5Y8/1 タ		D区 P-38
15	同上	同上	— — 5.6	同 上	灰白N7/1 タ		同上
16	SB04 P-2	同上	15.2 — —	微砂粒若干含む	灰N6/0~5/0 タ		D区 P-42
17	同上	同上	— — 5.0	1mm程度の砂粒含む	灰白N8/0 タ	底部外面回転糸切り	同上
18	SB05 P-3	須恵・小皿	8.3 1.35 6.6	微砂粒含む	灰白N5/0 灰白N6/0		D区 P-30
19	SB05 P-4	須恵・鉢	— — —	長石の細粒多く含む 粗い	灰白5Y8/1 タ (胎)灰オリーブ5Y6/2		E区 P-1
20	SK01	須恵・小皿	8.0 1.65 4.6	1mm~3mm程度の砂 粒含む	灰白7.5Y8/1 タ	底部外面回転糸切り 口クロ回転右まわり	B区 SX06
21	同上	同上	— — 7.85 1.75 5.0	同 上	灰白7.5Y8/1 タ	同 上	同上
22	同上	同上	8.0 1.75 4.6	1mm~2mm程度の砂 粒含む	灰白5Y8/1 タ	同 上	同上
23	同上	須恵・塊	— — 15.4 4.5 6.0	同 上	灰白7.5Y8/1 タ	底部外面回転糸切り	同上
24	SX01	土師・鍋	— — — 16.8	1mm~4mm程度の砂 粒含む	にぶい橙5YR6/4~橙5YR6/6 橙5YR6/6	外面2条/cmのタタキ	B区 SX04
25	同上	須恵・捏鉢	— — 29.4	微砂粒含む	灰N6/0 灰N5/0~4/0	口縁部自然釉	同上
26	SK04	須恵・塊	— — 13.4	長石の細粒若干含む	灰N5/0 タ	口縁部自然釉	E区 SK13
27	SK05	須恵・鉢	— — —	微砂粒若干含む	灰N5/0 灰白N7/0~6/0	口縁部自然釉	B区 SK19
28	SK06	須恵・鉢	— — —	微砂粒含む	灰N8/0~7/0 タ	口縁部自然釉	C区 SK15

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (高さ) (底径)	胎土	色 (外 面) (内 面)	備考	旧番号
29	SK07	須恵・塊	—	長石の極粗砂含む	明青灰5PB7/1~青灰6/1 タ		E区 SK14
30	SK08	須恵・捏鉢	—	1mm程度の砂粒含む	灰N6/0 タ	口縁部自然釉	B区 SK25
31	SK03	同上	25.2	微砂粒含む	灰白N7/0 タ	口縁部自然釉	D区 SK32
32	SK03	土師・筒形 容器	— 10.2	微砂粒多く含む	浅黄橙7.5YR8/4 浅黄橙10YR8/3 ~にぶい黄橙10YR7/3		B区 SK22
33	SK10	丹波・甕	28.0	長石の中砂多く含む 黒・茶色の砂粒多く 含む	灰褐5YR4/2 灰N6/0~灰黄2.5Y6/2		F区 SK08
34	SX02	土箆・鍋	23.8	長石・石英・赤色粒 子の細砂~中砂多く 含む	橙5YR7/6 淡黄橙7.5YR8/4		E区 SX02
35	同上	同上	19.2	長石・石英の極粗砂 多く含む	にぶい赤褐5YR5/4 淡黄橙7.5YR8/6	体部外面4条/cmの タタキ 外面幕付着	同上
36	同上	須恵・鍋	18.0	長石の中砂多く含む	オリーブ黒5Y3/1 灰5Y1/1~4/1	体部外面4条/cmの タタキ	同上
37	SX03	土師・鍋	24.0	長石・石英・赤色粒 子の細砂若干含む	橙5YR7/6 淡黄橙7.5YR8/6		E区 SX03
38	同上	須恵・捏鉢	— 9.4	長石の中砂多く含む	灰白7.5Y7/1~N7/0 タ		同上
39	同上	同上	— 11.2	長石の中砂多く含む 粗い	青灰5B6/1 タ		同上
40	P-6	須恵・塊	16.0	微砂粒含む	灰白7.5Y7/1 タ		D区 P-59
41	P-7	須恵・捏鉢	—	長石・石英の細砂~ 中砂多く含む 粗い	灰白N7/0 タ	口縁部自然釉	E区 P-23
42	P-8	同上	—	長石の細砂~中砂多 く含む 粗い	灰白N7/0 タ	口縁部自然釉	E区 P-7
43	P-9	須恵・塊	—	長石の細砂多く含む	青灰5PB5/1~暗青灰5PB4/1 タ	口縁部自然釉	E区 P-46
44	P-10	須恵・鉢	—	長石・黒色粒子の細 砂~中砂含む	灰白N7/0~6/0 タ	口縁部自然釉	E区 P-44

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (器高) (底径)	胎 土 色 (外 (内 面) 面)	備考	旧番号	
45	P-11	青磁・碗	— — —	やや粗い (胎) 明青灰5PB7/1 (釉) 灰オリーブ7.5Y5/2	全面施釉 外面下半ロクロケズ り	E区 P-39	
46	P-12	白磁・皿	— — 5.2	精良 (胎) 灰白2.5Y8/2 (釉) 灰白7.5Y7/1	費付無釉 釉に貫入あり	B区 P-19	
47	P-5	青花・碗	— — 5.6	精良 (胎) 灰白N8/0~9/0 (釉) 青味がかる	全面施釉 費付無釉 通子碗	B区 P-20	
48	包含層	土師・鍋	23.0 — —	微砂粒含む 9mm程度の砂粒含む	橙7.5YR7/6 タ	外面煤付着	A区
49	同上	同上	16.6 — —	1mm~2mm程度の砂 粒含む	にぶい黄橙7.5YR7/3 にぶい黄橙10YR7/3~6/3	体部外面3条/cmの タタキ	D区
50	同上	同上	18.8 — —	長石の細砂～施粗砂 多く含む	褐灰5YR5/1 橙2.5YR7/6~6/6	体部外面3条/cmの タタキ 体部外面下半に煤	E区 横矢上面
51	同上	須恵・鉢	— — —	1mm程度の砂粒含む	灰N6/0 タ		B区
52	同上	土師・小皿	7.2 1.4 4.0	1mm程度の砂粒含む	浅黄橙7.5YR8/4~8/6 タ	底部回転糸切り 回転台右まわり	B区
53	同上	青磁・碗	— — 4.4	精良 (胎) 灰白5Y7/1 (釉) 灰オリーブ5Y6/2		逆弁文	C区
54	同上	白磁・皿	13.0 — —	精良 (胎) 灰白N8/0 (釉) 明灰灰10GY8/1		全面施釉 体部外面下端に露胎	J区
55	同上	須恵・碗	15.6 4.4 5.6	長石の細砂～中砂多 く含む やや粗い	灰白7.5Y7/1~7.5Y6/1 タ	底部外面回転糸切り ロクロ回転右まわり	E区
56	同上	須恵・碗	15.2 3.35 6.0	微砂粒含む	灰白N7/0~灰N6/0 タ	底部外面回転糸切り	D区
57	同上	須恵・捏鉢	30.2 — —	1mm~3mmの砂粒含 む	灰N6/0 タ	口縁部自然釉	D区
58	同上	同上	28.0 — —	1mm程度の砂粒含む	オリーブ灰2.5GY6/1 タ		A区
59	同上	同上	25.2 8.4 9.0	長石・チャートの中 砂～中疊多く含む 粗い	灰N6/0~5/0 青灰5PB5/1	底部外面回転糸切り 底部外面粗砂付着	K区

表6 Ⅲ期遺物観察表（金属器以外）

(法量の単位はcm)

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (器高) (底径)	胎　土	色　調 (外　面) (内　面)	備　考	旧番号
60	SB10 P-13	丹波・擂鉢	27.2 — —	長石・黒色砂粒多く含む	明褐色7.5YR5/6～褐7.5YR4/6 にぶい褐7.5YR5/4 ～明褐色7.5YR5/6	ヘラ擂目	E区 P-11
61	SK11 下層	白磁・皿	9.6 —	精良	(胎)灰白7.5Y7/1～灰白N8/1 (釉)灰白N8/0～2.5GY8/1	全面施釉	D区 SK31
62	同上	同上	11.1 — —	精良	(胎)灰白5Y8/1 (釉)灰白色	全面施釉	同上
63	SK12	土師・小皿	9.3 2.2 4.5	長石・石英・チャートの中砂多く含む	浅黄橙10YR8/3 ♪	底部外面回転糸切り (カ)	E区 SK17
64	同上	同上	10.0 2.2 4.8	長石・石英・チャートの中砂多く含む	灰白2.5Y8/1～8/2 ♪	底部外面回転糸切り (カ)	同上
65	同上	同上	13.4 2.5 5.0	長石・石英・チャートの中砂多く含む	浅黄橙10YR8/3 浅黄橙10YR8/4	手づくね系	同上
66	同上	瀬戸美濃・皿	10.6 3.0 5.9	やや粗い	(胎)灰白5Y8/1 (釉)暗オリーブ7.5Y4/3	灰釉丸皿 全面施釉 輪トチン跡	同上
67	SB14	土師・擂鉢	27.7 — —	長石の中砂多く含む	灰黄橙10YR5/2 オリーブ黒5Y3/1		D区 SK29 下層
69	SB18	白磁・皿	13.6 3.8 7.8	精良	(胎)灰白N8/0 (釉)灰白色	全面施釉 高台置付部ヘラ面取 り高台置付部釉剥ぎ	D区 SK28
70	SK13	土師・小皿	12.0 1.95 6.7	微砂粒含む	にぶい黄橙10YR7/3～6/3 灰N6/0～5/0	体部外面下半に指頭 圧痕	B区 SX03
71	SK14	同上	12.3 2.3 5.0	微砂粒含むが精良	灰白10YR8/2 ♪		B区 SX05
72	SK15	土師・擂鉢	24.4 — —	微砂粒含む	浅黄橙7.5YR8/4～橙5YR7/6 橙5YR7/6	クシ擂目	C区 SK13
73	SK16	備前・鉢	23.6 7.3 15.5	長石の中砂多く含む 長石の中疊あり	にぶい赤褐2.5YR5/4 ～明赤褐2.5YR5/6 にぶい赤褐2.5YR5/4		E区 SK23
74	SK17	丹波・壺	16.0 (重約4.0) 22.0	長石の中砂多く含む 長石の中疊若干あり	褐7.5YR4/4 黄褐2.5Y5/3～褐7.5YR4/4 (胎)灰白N7.0～灰N6/0		F区 SX04
75	SK18 下層	土師・小皿	9.7 2.05 4.2	微砂粒含むが精良	灰白2.5Y8/2 ♪	底部外面回転糸切り	D区 SK33
76	同上 上層	瀬戸美濃・皿	10.8 2.5 6.0	精良	(胎)灰白7.5Y8/1 (釉)浅黄7.5Y7/3 ～オリーブ黄7.5Y6/3	灰釉丸皿 底部外面露胎	同上

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (器高) (底径)	胎 土	色 調 (外 面) (内 面)	備 考	旧番号
85	SK19	土師・小皿	8.7 1.9 3.7	微砂粒含む	灰白2.5Y8/1~8/2 タ	底部外画同軸糸切り	B区 SK20
86	同 上	土師・小皿	9.6 2.45 4.6	1mm程度の砂粒含む	灰白2.5Y8/1 タ		同 上
87	同 上	須恵・小皿	7.6 1.7 4.8	1mm~3mm程度の砂 粒含む	灰白5Y7/1 タ	混入品 底部外画同軸糸切り	同 上
88	SK20	土師・小皿	— — 4.0	精良	灰白2.5Y8/2 タ	底部外画同軸糸切り 同軸台右まわり	F区 SK04
89	同 上	同 上	13.4 2.4 8.8	長石・チャートの中 砂~粗砂含む	灰白10Y8S/2 タ	摩滅のため調整等不 明	同 上
90	SX04	土師・鍋	21.2 — —	長石・石英の極粗砂 多く含む 赤色粒子含む	橙5YR6/6~6/8 タ	体部外面3~4条 /cmのタキ 外面煤付着	E区 SX10
91	同 上	同 上	19.2 — —	長石・石英の中砂含 む	橙5YR7/6 に赤い黄褐10YR7/4 ~明黄褐10YR7/6	体部外面2条/cmの タキ 外面煤付着	同 上
92	同 上	須恵・搗鉢	25.2 — —	長石の中砂多く含む やや粗い	青灰5B5/1 タ		同 上
93	同 上	同 上	28.0 7.9 11.6	5mm以上の砂粒含む 粗い	灰N6/0~5/0 タ	口縁部自然釉	同 上
94	同 上	丹波・搗鉢	31.4 —	長石の中砂多く含む	に赤い赤褐2.5YR5/4 ~明赤褐2.5YR5/6 タ	ヘラ擂目	同 上
95	同 上	同 上	— —	長石・石英の粗砂~ 中砂多く含む	橙7.5YR7/6 タ	ヘラ擂目 体底部の境不明瞭	同 上
96	同 上	陶器・塊	— — 4.0	精良	(胎) 橙5YR7/6~7/8 (釉) 灰オリーブ7.5Y6/2	体部外面下半~底部 外曲露胎 肥前系	同 上
97	同 上	同 上	— —	精良	(胎) 灰白5Y8/1~7/1 (釉) 灰オリーブ5Y6/2	全面施釉 釉に貫入あり 肥前系	同 上
98	SX05 石室埋上	土師・搗鉢	28.4 11.8 15.2	長石・石英の中砂多 く含む 赤色粒子多く含む	橙5YR7/6~7/8 タ	9本1組のクシ擂目	G区 SX05
99	同 上	丹波・搗鉢	29.6 15.5 14.4	長石の中砂~粗砂多 く含む	橙2.5YR7/8 に赤い赤褐2.5YR5/4 に赤い赤褐2.5YR5/4 ~に赤い黄褐10YR7/4	ヘラ擂の窓印一部残 る ヘラ擂目	同 上
100	同 上 石室裏 込め上	白磁・瓶	11.0 —	精良	(胎) 灰白2.5Y8/1 タ		同 上

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (器高) (底径)	胎土	色調 (外 面) (内 面)	備考	旧番号
103	SX06	土師・焼烙	23.4 11.4 —	長石・石英・赤色粒子の細砂～中砂多く含む	橙7.5YR7/6 にぶい橙7.5YR7/4	体部外面中央に格子タキ	K区 SX25
104	SX06	備前・壺	— — 精良	— —	灰5Y6/1 褐灰7.5YR4/1 (胎) 灰赤2.5YR4/2	外面クシ描沈線 外面ロクロ成形痕顯著	K区 SX25
106	SX08	土師・鍋	20.2 — —	長石の中砂若干含む	黄橙7.5YR8/8～7/8 橙7.5YR7/6	体部外面3条/cmのタキ	J区 東端落ち込み
107	同上	土師・擂鉢	23.0 9.7 8.8	長石・石英の中砂、赤色粒子の中砂～中砂多く含む	橙5YR7/8～6/8 ＊	クシ描目 底部に長石の中砂付着	同上
108	P-14	青磁・碗	15.2 8.5 5.6	やや粗い 須恵質に近い	(胎) 灰白5Y8/1～7/1 (釉) オリーブ灰10Y6/2 (底部下半) 浅黄橙10YR8/4	内面印花文 底部外面露胎の他、全面施釉	E区P-46 B区包含層 K区SX01 集右部
109	SD01	丹波・擂鉢	— — —	長石の細砂～中砂多く含む	橙2.5YR7/8～6/8 にぶい橙5YR6/4	ヘラ擂目	F区 長方形段落ち部
110	SD02	土師・鍋	25.8 — —	長石・赤色粒子の中砂多く含む	橙5YR7/6～6/6 ＊		H区 SX09
111	同上	須恵・擂鉢	19.4 — —	長石の粗砂～極粗砂 多く含む	灰N6/0 灰N4/0～暗灰N3/0	8本1組のクシ描目	同上
112	同上	白磁・碗	17.6 — —	やや粗い	(胎) 灰白N8/0～7/0 (釉) 透明	釉の厚さ極めて薄い 全面施釉	同上
113	同上	瀬戸美濃・大目焼	12.0 7.0 4.4	砂粒殆ど含まないが、粗い	(胎) 灰白5Y8/1 (釉) 灰黄褐10YR4/2 ～黑褐10YR3/1	底部外面に化粧掛け 内反り高台 鉄釉	I区 SX13 K区 東部底土
114	同上	丹波・擂鉢	— — —	長石の中砂～粗砂多く含む	黑褐7.5YR3/1 灰褐7.5YR5/2～4/2	ヘラ擂目	I区 SX13
115	同上	同上	— — —	長石の粗砂多く含む やや粗い	にぶい赤褐5YR4/3 ＊	ヘラ擂目 SD03の123と同一個体の可能性高い	同上
116	SD03 中～下層	土師・鍋	23.0 — —	長石の細砂やや多い	にぶい赤褐5YR5/4 にぶい赤褐5YR5/4 ～明赤褐5YR5/6	焼成良好 陶器に近い	J区 SD01
117	同上 下層	土師・焼烙	21.8 — —	長石・石英・赤色粒子の細砂多く含む	灰黄褐10YR6/2 ＊	体部外面格子タキ 体部外面に煤付着	同上
118	同上 中層	土師・擂鉢	— — —	長石・石英の細砂～中砂、赤色粒子の細砂多く含む	橙2.5YR6/6 橙2.5YR6/6～6/8	SD04上面検出のもとの同一個体の可能性がある。	同上
119	同上 下～上層	同上	22.0 — —	長石・石英の中砂多く含む	橙2.5YR6/8 ＊	クシ描目 口縁部外面のみ赤褐色	同上

番号	出土場所	器種	法量 (11径) (器高) (底径)	胎土	色調 (外 面) (内 面)	備考	旧番号
120	SD03 最上層	土師・小皿	7.8 2.2 4.2	長石・チャートの粗砂多く含む	灰白2.5Y8/2 灰白10Y8S/2	底部回転糸切り 回転台右まわり	J区 SD01
121	同上 中層	白磁・皿	—	やや粗い	(胎) 灰白5Y8/1 (釉) 灰白10Y8/1~7/1	輪花	同上
122	SD03 最下層	陶器・壺	—	長石の中疎含む やや粗い	(胎) 灰白N8/0~7/0 (釉) 淡黄7.5Y7/3 ～オリーブ黄7.5Y6/3	瀬戸(カ) (内面色) 灰黄2.5Y7/2	J区 SD01
123	同上 下層	丹波・擂鉢	—	長石の中疎～粗砂多く含む やや粗い	にぶい赤褐5YR5/3~4/3 にぶい褐7.5YR5/3	ヘラ擂目 SD02の115と同一個 体の可能性高い	同上
124	同上 中層 (カ)	同上	—	長石の中疎多く含む	にぶい黄褐10YR5/4 にぶい褐7.5YR6/4 ～にぶい褐7.5YR5/4	ヘラ擂目 SK18の破片と接合	同上
125	SD04 最上層	土師・小皿	10.6 2.9 5.5	砂粒殆ど含まない	灰白2.5Y7/1 黄灰2.5Y6/1	底部外面回転糸切り 内面に炭化物付着	K区 SX03
126	同上 上層	同上	8.2 2.2 4.4	精良 赤色粒子の中疎多く含む	浅黄褐10YR8/4 ～	底部外面回転糸切り 回転台右まわり	同上
127	同上 下層	同上	9.4 2.3 4.3	長石・赤色粒子の細砂若干含む	明黄褐10YR6/6 浅黄褐10YR8/4	底部外面回転糸切り 回転台右まわり	同上
128	同上 中層	丹波・擂鉢	—	砂粒殆ど含まない	にぶい赤褐5YR4/4 褐7.5YR4/3	ヘラ擂目	同上
129	同上 最上層	土師・鍋	21.8	長石・石英・赤色粒子の細砂～中疎多く含む	褐2.5YR6/6~6/8 橙5YR6/6	体部外面3条/cmの タタキ	同上
130	同上 中～下層	土師・擂鉢	22.0	長石・赤色粒子の中疎多く含む	褐5YR7/6~7/8 橙5YR7/6		同上
131	同上 最上層	陶器・擂鉢	26.8 13.8 10.4	長石の中疎多量に含む	にぶい褐7.5YR5/3 にぶい褐7.5YR5/3 ～褐7.5YR4/3	6本1組のクシ擂目 口縁外面黒褐色 底部外面に中疎付着	同上
132	同上 中層	丹波・擂鉢	— 12.6	長石の中疎多く含む	灰褐5YR5/2 にぶい褐7.5YR5/3	ヘラ擂目	同上
133	同上 最上層	備前・壺	10.4	長石の細砂極少量含む	黄灰2.5Y6/1~黒褐2.5Y3/1 灰褐5YR4/2~オリーブ黒5Y3/1 (胎) 灰赤2.5YR5/2~4/2	体部外面ロクロ成形 模様著 肩部にクシ擂波状文	同上
134	同上 中～最上層	備前・擂鉢	24.8 11.2 13.5	長石・石英の粗砂～中疎多く含む	褐灰10YR5/1~4/1 ～	7本1組のクシ擂目 SD03下層の破片と 接合	同上
135	同上 中層	青磁・碗	—	精良	(胎) 灰白N8/0~7/0 (釉) オリーブ灰10Y6/2	全面施釉 蓮弁文	同上

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (器高) (底径)	胎上	色 調 (外 面) (内 面)		備考	旧番号
					(胎)	灰白N8/0 (釉) 淡い青味がかる		
136	SD04 最上層	青花・小杯	6.4 — —	やや粗い	(胎) 灰白N8/0 (釉) 淡い青味がかる			K区 SX03
137	同上 遺構 検出中	白磁・皿	— — 7.0	精良	(胎) 灰白N8/0 (釉) 透明	全面施釉 高台疊付部ヘラ面取り 高台疊付部釉剥ぎ	同上	
138	同上 下層	青花・碗	— — 5.2	やや粗い	(胎) 灰白N8/0 (釉) 淡い青味がかる	全面施釉 高台疊付部釉剥ぎ 蓮子碗	同上	
139	SD04 最上層	丹波・擂鉢	37.8 — —	長石の中砂多く含む	にぶい赤褐色5YR4/3 にぶい赤褐色5YR5/3	ヘラ描目 SD07下層の破片と接合		K区 SX03
140	SD07 上層	土師・小皿	13.0 2.2 6.5	長石・石英の中砂多く含む	灰白2.5Y8/2 +	摩滅のため調整等不明		K区 SX12
141	同上 下層	同上	8.2 2.4 3.8	長石・チャートの中砂多く含む	灰白5Y8/1~灰白N8/1 +	摩滅のため調整等不明		同上
142	SD09 下層	土師・小皿	13.0 2.5 7.6	長石・チャートの細砂～中砂多く含む	灰黄2.5Y7/2 +	底部外面ヘラケズリ		K区 SX02
143	同上	同上	10.4 2.0 4.9	長石・石英・チャートの中砂多く含む	灰白2.5Y8/1~8/2 灰白5Y8/1~7/1	底部外面回転糸切り (カ)		同上
144	同上	同上	10.2 2.4 5.0	長石・チャートの中砂多く含む	灰白10YR8/2 ～浅黃褐色10YR8/3 +	底部外面回転糸切り 回転台右まわり 底部内面に凸部		同上
145	同上	同上	8.6 1.9 3.5	長石・石英・チャートの中砂多く含む	灰白2.5Y8/2 +	底部外面回転糸切り 回転台右まわり 底部内面に凸部		同上
146	同上	同上	8.6 2.0 4.5	長石の中砂多く含む	灰白2.5Y7/1 +	底部外面回転糸切り 回転方向不明 底部内面に凸部		同上
147	同上 最上層	窓戸美濃・皿	10.2 — —	砂粒殆ど含まないが 粗い	(胎) 灰白7.5Y8/1 (釉) 灰白7.5Y7/2	灰釉丸皿 全面施釉 釉に貫入あり		同上
148	同上 最下層	土師・炮烙	27.0 — —	長石・赤色粒子の中砂～粗砂多く含む	にぶい黄褐色10YR7/4~6/4 にぶい橙5YR6/4	体部外面に2条/cm のタタキ 外面媒付着		同上
149	同上 最上層	土師・擂鉢	27.8 12.4 14.6	長石・赤色粒子の中砂多く含む	明赤褐色2.5YR5/6~5/8 橙2.5YR6/8	ヘラ描目 底部内面にヘラ描の木の葉状描目		同上
150	同上 最下層	土師・擂鉢	29.0 11.5 14.5	長石の細砂～中砂、赤色粒子の中砂多く含む	橙5YR7/8～浅黃褐色7.5YR8/6 橙5YR7/8	SD04最上層の破片 と接合 外面下端のケズりなし		同上
151	SD10	土師・炮烙	— — —	長石の細砂～中砂多く含む	橙5YR6/6~6/8 にぶい橙5YR6/4	体部外面に格子タタキ		K区 SX14

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (器高) (底径)	色調		備考	旧番号
				胎	土 (外 面) (内 面)		
152	SD10	丹波・擂鉢	—	長石の細砂多く含む	灰褐色5YR5/2 灰褐色7.5YR5/2	ヘラ擂目 SD08の破片と接合	K区 SX14
153	包含層	土師・小皿	8.8 2.1 3.6	長石・チャートの中 砂多く含む	灰白10YR8/1~8/2 灰白2.5Y8/2	底部外画同軸系切り 回転台右まわり	K区
154	同上	同上	8.8 2.2 4.2	長石・チャートの極 細砂～中疊含む	灰白2.5Y8/2 タ	摩滅により調整等不 明	同上
155	同上	同上	9.0 1.9 4.3	チャートの中疊含む が良	灰白2.5Y8/1~8/2 タ	同上	同上
156	包含層	土師・小皿	10.4 2.4 4.3	長石の中砂～粗砂若 干含む	灰白2.5Y8/1 タ	摩滅のため調整等不 明 上縁端部に焼付着	K区
157	同上	同上	13.4 2.8 6.8	長石・チャートの中 砂～粗砂多く含む チャートの中疊含む	灰白2.5Y8/1~8/2 タ	摩滅のため調整等不 明	同上
158	同上	土師・擂鉢	21.6 — —	微砂粒・赤色粒子含 む	にぶい橙7.5YR7/4 にぶい・黄橙10YR7/4	クシ擂目	B区
159	同上	丹波・擂鉢	31.0 — —	長石の細砂若干含む	にぶい橙5YR6/4 タ (胎) 灰白7.5Y7/1~灰白N8/0	ヘラ擂目	同上 流土中
160	同上	備前・甕	33.0 — —	長石の粗砂多く含む	褐10YR4/4 灰白5Y7/1~7/2		E区
161	表土層	陶器・碗	11.0 6.9 4.0	長石の粗砂含む	(胎) 灰褐色10YR5/2 (胎) 灰白5Y7/2	高台疊付は露胎に砂 目、底部内面に兜巾 肥前系	E区 横矢上面
162	耕土床土	瀬戸美濃・ 皿	— — 3.2	粗い	(胎) 灰白7.5Y8/1~N8/0 (胎) 浅黄7.5Y7/3	灰釉丸皿 印花菊文	D区
163	包含層	白磁・皿	9.6 — —	精良	(胎) 灰白5Y8/1 (胎) 灰白5Y8/1	漆織ぎ痕	B区
164	耕土床土	同上	10.5 — —	精良	(胎) 灰白N8/0 (胎) 灰白7.5Y8/1~7/1		D区
165	耕土床土 遺構面上 2片接合	同上	— — 6.0	精良	(胎) 灰白5Y8/1 (胎) 灰白5Y8/1	高台疊付部ヘラ面取 り 全面施釉、漆織ぎ痕	B区 E区
166	耕土床土	青花・碗	— — 5.2	精良	(胎) 灰白N8/0 (胎) 透明 (必須) ライトブルー ～ディープブルー	高台疊付部ヘラ面取 り 全面施釉	C区

表7 IV期遺物観察表（金属器以外）

(法量の単位はcm)

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (鉢高) (底径)	胎 土	色 調 (外 面) (内 面)	備 考	旧番号
171	SK22	陶器・鉢	21.8 11.2 9.0	長石の中砂～粗砂多く含む	(胎) にぶい赤褐色2.5YR4/4 ～赤褐色2.5YR4/6 (釉) 黄灰2.5Y6/1	高台・底部外露胎 体部外面下半に鉄輪 唐津片口鉢	I区 SX20
172	SK23	備前・壺	— — —	長石の細砂や多い	褐褐色7.5YR4/1～黒褐色7.5YR3/1 灰4/0 (胎) 暗褐色5YR5/1～4/1	体部外面下半に斜め 方向のヘラケズリ	I区 SX22
173	SK24	丹波・擂鉢	24.8 — —	長石の粗砂多く含む	褐褐色7.5YR4/3 にぶい褐7.5YR5/4	7本1組のクシ擂目	K区 SX09
174	SK25	土師・鍋	22.8 — —	長石・石英・赤色粒 子の中砂多く含む	にぶい褐7.5YR5/3 にぶい褐7.5YR5/4	外面葉付着	K区 SX06
175	同上	丹波・擂鉢	— — —	砂粒殆ど含まない	にぶい褐7.5YR5/4 にぶい褐7.5YR5/3	ヘラ擂目	同上
176	同上	白磁・皿	4.6 1.6 1.3	精良	(胎) 白9/0 (釉) 僅かに青味のある透明釉	体部外面下半～高台 部露胎 肥前系磁器 紅皿	同上
177	同上	染付・皿	12.0 3.8 4.4	良	(胎) 灰白N8/0 (釉) やや青味がかる	全面施釉 豊付部釉剥ぎ 肥前系磁器	同上
178	SX09	陶器・皿	12.0 3.5 3.6	砂粒殆ど含まない	(胎) にぶい褐7.5YR5/3 (釉) 暗褐色5Y6/2～5/2	内面・豊付3ヶ所砂目 高台内に兜巾 唐津溝線皿	E区 SX01
179	同上	同上	11.5 3.2 3.6	砂粒殆ど含まない	(胎) 灰褐色5YR5/2～4/2 (釉) 暗褐色5Y5/2～4/2	内面・豊付3ヶ所砂目 高台内に兜巾 唐津溝線皿	同上
180	同上	丹波・鉢	25.4 4.7 17.6	長石の中砂多く含む	灰褐色7.5YR4/2 褐7.5YR4/3～暗褐色7.5YR3/3	内面自然釉 (釉) 浅黄5Y7/3	同上
181	同上	丹波・擂鉢	32.6 13.8 13.8	長石・石英の極粗砂 ～細纖維含む	橙2.5YR6/8	ヘラ擂目	同上
182	SX10	染付・碗	9.8 5.4 4.0	やや粗い	(胎) 灰白N8/0 (釉) 灰白N8/0 ～灰白2.5GY8/1	二重網目文 豊付部釉剥ぎ 肥前系磁器	I区 SX19
183	同上	土師・小皿	9.0 1.3 7.0	長石・チャート・赤 色粒子の中砂含む	にぶい橙5YR7/4～橙5YR7/6 浅黄橙7.5YR8/4	底部外面回転糸切り 回転台右まわり	同上
185	SX12 裏込め 栗石内	染付・碗	6.6 —	精良	(胎) 灰白5Y8/1 (釉) やや青味がかる	外面七宝文 内面四方擇文 肥前系磁器	II区 SX08
186	SX11	陶器・壺	12.0 — —	砂粒含まないが粗い	(胎) 灰白2.5Y8/2 (釉) 浅黄2.5Y8/3	全面施釉	H区 SX07
187	同上	丹波・擂鉢	34.8 — —	長石・石英の細繊維 多く含む	にぶい赤褐色5YR5/3～4/3 にぶい黄橙10YR6/4 (胎) 灰白7.5Y7/1	8本1組のクシ擂目 内面自然釉	同上

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (器高) (底径)	胎土	色調 (外 面) (内 面)	備考	旧番号
188	SX13	土師・炮烙	20.6 — —	赤色粒子の細砂～細 砾多く含む	橙7.5YR7/6 橙5YR7/6	体部外面に格子タタ キ	H区 SX06
189	SX13	須恵・撹鉢	22.4 — —	長石・石英の細砂～ 中砂多く含む	灰N6/0 —		同上
190	同上	同上	23.4 — —	長石の細砂～中砂多 く含む 粗い	明青灰5PB7/1～青灰5PB6/1 (内面白自然釉) 灰N4/0		同上
191	同上	陶器・鉢	17.2 — —	やや粗い	にぶい黄褐10YR5/3 (内面白) 黒褐2.5Y3/1 (胎) 灰Y6/1	内面のみ施釉 (外面自然釉) 灰白5Y7/2	同上
192	同上	陶器・壺	— 4.7	やや粗いが良	(胎) 灰白5Y8/1～8/2 (釉) 浅黄2.5Y8/3	底部外面・高台露胎 肥前系京焼風陶器	同上
193	同上	白磁・皿	— 5.1	精良	(胎) 灰白5Y8/1 (釉) 白N9/0	体部外面下半露胎 肥前系経器紅皿	同上
194	同上	青花・皿	11.2 3.0 6.0	精良	(胎) 灰白5Y8/1 (疊付部) 橙色 (釉) 灰白2.5GY8/1	全面施釉 疊付部釉剥ぎ 疊付部ヘラ面取り	同上
196	SX14	丹波・撹鉢	— —	長石の中砂～粗砂含 む	褐灰7.5YR5/1 灰褐7.5YR4/2～褐7.5YR4/3 (胎) 灰白5Y6/1	8本1組のクシ模様	J区 SX10
197	SD11	染付・碗	11.6 6.5 4.0	やや粗い	(胎) 灰白N8/0～7/0 (外面釉) 灰白2.5GY8/1 ～明オリーブ2.5GY7/1	外面青磁釉 疊付部釉剥ぎ・砂付着 肥前系経器碗	K区 SD02
198	同上	同上	10.0 — —	やや粗い	(胎) 灰白N7/0 (釉) 透明	肥前系磁器碗	同上
199	同上	染付・仏壇 器	7.4 4.8 4.0	やや粗い	(胎) 灰白10YR8/1 ～にぶい黄橙10YR7/2 (釉) 灰白2.5GY8/1	底部内面露胎 同一様2カ所 肥前系磁器	同上
200	同上	染付・皿	12.2 3.8 4.5	精良	(胎) 灰白N8/0 (釉) やや青味がかる	疊付部釉剥ぎ・砂付 着 肥前系磁器	K区 SD02
201	同上	丹波・壺	— — 20.0	長石の極粗砂～中砂 多量に含む 粗い	(胎) 灰白10YR7/1 ～にぶい黄橙10YR7/2 (外面釉) 灰黄褐10YR5/2	(内面白) にぶい黄橙10YR5/3	同上
202	J・K区	瀬戸天満・ 皿	11.0 2.6 6.6	砂粒含まないが粗い	(胎) 灰白7.5Y8/1 (釉) 浅黄7.5Y7/3	全面施釉 底部外面輸トテン 灰釉丸皿	K区 SX01 石除去中
203	同上	白磁・皿	17.8 — —	精良	(胎) 灰白N8/0～7/0 (釉) 灰白7.5Y8/1	全面施釉	同上 集石上面
204	同上	丹波・撹鉢	30.8 14.7 19.0	長石の中砂～粗砂多 く含む	(胎) にぶい橙7.5YR7/4 ～橙7.5YR7/6 (釉) にぶい橙7.5YR6/4	7本1組のクシ模様	同上 集石上層

番号	出土場所	器種	法量 (口径) (高さ) (底径)	胎土	色 (外 面) (内 面)	備考	旧番号
205	J・K区	土師・炮塔	24.6 — —	長石・赤色粒子の中 砂多く含む	(胎) 浅黄橙10YR8/4 (釉) 浅黄橙7.5YR8/4~8/6	体部外面格子タタキ	K区 SX04 埋土
206	同上	瀬戸美濃・皿	10.8 3.5 6.6	砂粒含まないが粗い	(胎) 灰白7.5Y8/1 (釉) 浅黄5Y7/3	全面施釉 釉に貫入り 灰釉丸皿	K区 SX05
207	J・K区	白磁・皿	11.0 2.8 5.8	精良	(胎) 灰白N8/0 (釉) 灰白N8/0 ~灰白2.5GY8/0	全面施釉 豊付部釉剥ぎ 豊付部ヘラ面取り	K区 SX04 05下層
208	同上	染付・皿	— 4.4	精良	(胎) 灰白N8/0 (釉) やや青味がかる	全面施釉 豊付部釉剥ぎ・砂付 着	K区 SX05
210	同上	土師・炮塔	36.8 (高)8.0	砂粒殆ど含まない	橙5YR7/8 ~に赤い橙7.5YR7/4 タ	口縁部穿孔現存1ヶ 所 体部外面焼付着	K区 近世盛土

表8 石器観察表

(法量の単位はcm)

番号	出土場所	種類	法量 (長) (厚)	石材	重さ(g) ()は大き く欠けるもの	旧番号
2	現代耕土直下	石斧	8.78 2.0	結晶片岩(カ)	132.12	G区 西端部
3	中世包含層	石鎌	1.74 0.3	サスカイト	(0.60)	F区
4	ピット	同上	1.47 0.29	同上	0.51	F区 P-12
5	遺構検出中	同上	1.74 0.26	同上	(0.35)	F区
6	SX13	同上	2.18 0.35	チャート	1.35	H区 SX06
7	表土層	同上	2.45 0.45	サスカイト	(1.95)	B区
8	盛土層	同上	2.35 0.45	同上	(0.88)	同上
9	中世包含層	同上	2.45 0.3	同上	0.98	D区 南半
10	同上	同上	1.98 0.29	同上	0.67	F区
11	盛土層	同上	1.85 0.45	同上	(0.82)	B区
12	中世包含層	同上	1.25 0.25	同上	(0.44)	同上
13	床土層	石匕	2.49 0.25	チャート	0.95	E区

表9 石造品観察表

(法量の単位はcm)

番号	出土場所	種類	法量 (高さ) (最大幅)	石材	備考	旧番号
77	SK18	一石五輪塔	52.0 15.6	砂岩	完形 安置式	D区・SK33 S-2・5・9
78	同上	同上 (火・水輪)	16.1 11.4	同上		同上 S-6
79	同上	同上 (空・水輪)	22.6 11.5	同上	風・水輪偏平化	同上 S-1
80	同上	同上 (空・風輪)	12.0 10.1	同上	風輪偏平化	同上 S-10
81	同上	同上 (空・風輪)	15.2 10.1	同上		同上 S-3
82	同上	同上 (火・水輪)	13.6 12.7	同上	風輪偏平化	同上 S-4
83	同上	同上 (地輪)	30.6 14.6	同上	鑿刃幅約10.0cm	同上 S-8
84	同上	同上 (地輪)	19.6 13.0	同上	鑿刃幅約6.5cm	同上 S-7
101	SX05	一石五輪塔	51.5 15.8	同上	完形・獨立式 風・水輪偏平化	G区 SX05
228	近世石垣	板磚	117.0 65.0	同上	4種子	I・J区间

表10 金属器観察表

(法量の単位はcm)

番号	出土場所	種類	法量	材質	重さ(g)	備考	旧番号
68	SB14	鉄炮玉	φ1.25	鉛	8.38		D区 SK29
102	SX05	鑿	現長16.2	同上	—	大・小2片	G区 SX05
105	SX06	小柄	長21.93	銅・鉄	—		K区 SX25
168	SK21	錢貨	φ2.39	銅	—	寛永通宝	I区 SX18
169	同上	同上	φ2.29	同上	—	同上	同上
170	同上	同上	φ2.15	同上	—	同上 (背元)	同上
184	SX10	キセル雁首	長6.59	同上	—		I区 SX19
195	SX13	錢貨	φ2.53	同上	—	寛永通宝	H区 SX06
209	J・K区 近世埋土	笠鞍	長3.44	同上	—		K区 SX04

番号	出土場所	種類	法量	材質	重さ(g)	備考	旧番号
211	横矢3 上面	刀	現長26.75	鉄	—		E区 横矢上面
212	遺構画面上	釘	長4.74 (一辺 0.44×0.5)	同上	—	T字頭 断面方形	B区 南西部
213	同上	同上	長4.70 (一辺 0.48×0.5)	同上	—	同上	B区 北東部
214	中世包含層	同上	現長3.27 (一辺 0.43×0.46)	同上	—	同上	B区
215	同上	同上	長2.06 (一辺 0.46×0.25)	同上	—	同上 断面長方形	B区 西辺部
216	同上	不明品	長2.17 最大 ϕ 1.05	同上	—		同上
217	床土除去中	鉄炮玉	ϕ 1.19	鉛	7.64	一部欠	D区
218	中世包含層	同上	ϕ 1.24	同上	10.01		E区 西辺
219	現代耕作土	キセル壓首	現長5.67	銅	—		A区
220	遺構検出中	同上	現長5.50	同上	—		K区 西端部
221	同上	錢貨	ϕ 2.41	同上	—	元豐通宝	F区
222	同上	同上	ϕ 2.40	同上	—	古寛永	H区
223	中世包含層	銅板	(厚さ 0.27~0.67)	同上	4.59		F区 北半
224	同上	同上	(厚さ 0.2)	同上	4.89		同上
225	流土中	銅板	3.54×2.56	銅	8.61	内外面 あれている	B区 北半
226	床土中	同上	3.81×5.85	同上	23.69		B区
227	同上	同上	3.58×4.69	同上	19.49		同上

写 真 図 版



1. 調査地遠景（東から・下端が本丸）



2. 同上（西から）

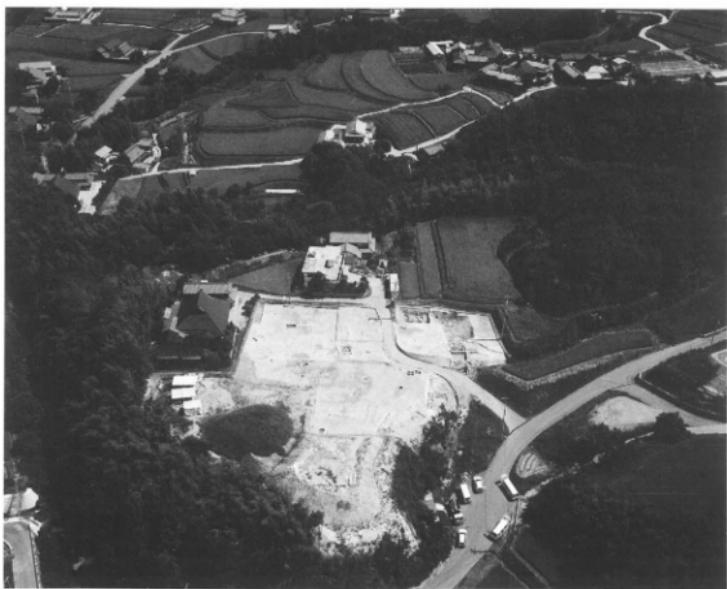
図版 2



1. 調査地遠景（北から）



2. 同上（北から）



1. 調査地遠景（西から）



2. 同上（南から・出入口部）

図版4



1. E～H区（南東から）



2. 同上（北西から・中央上が本丸）



1. 売穴住居炭化材検出状態（南から）

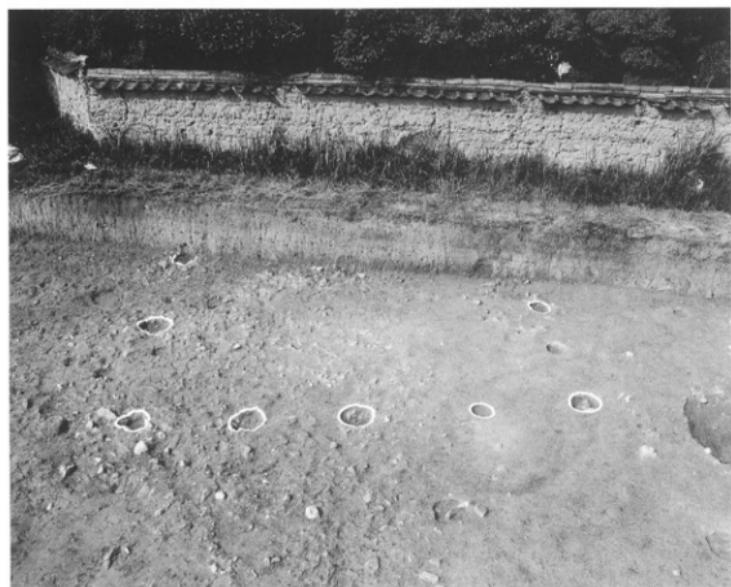


2. 同上（東から）

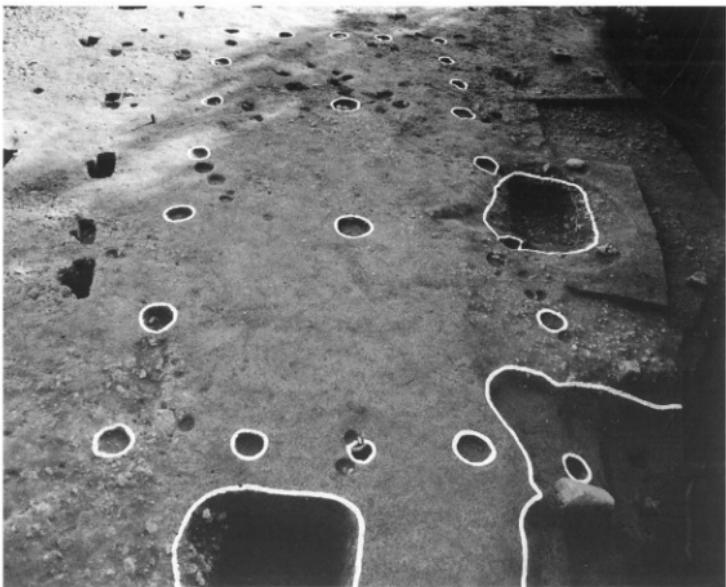
図版 6



1. SB02 (西から)



2. SB03 (南から)



1. SB06 (北から)



2. SK01・02 (南から)